

由比ヶ浜南遺跡 (No.315)

鎌倉市長谷二丁目 176 番 8 地点

例 言

1. 本報は鎌倉市長谷二丁目 176 番 8 地点に所在する遺跡の発掘調査である。
2. 発掘調査は個人専用住宅にかかる建築範囲約 55㎡を対象とし、平成 20 年 7 月 22 日から 8 月 7 日にかけて実施した。
3. 現地での調査体制は以下の通り
担当者 伊丹まどか
調査員 山口正紀
作業員 浅香文保・天野隆男・杉浦永章・鈴木啓之（社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報作成は以下の分担で行った。
遺物実測 梶岡ケイト
遺物図版作成 梶岡ケイト
遺構図版作成 梶岡ケイト
遺物観察表 梶岡ケイト・田畑衣理
遺構計測表 梶岡ケイト・田畑衣理
遺構写真 山口正紀
遺物写真 須佐仁和
写真図版作成 田畑衣理
執筆・編集 田畑衣理
5. 出土品などの発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が管理・保存している。
6. 本報図版の遺構・遺物の縮尺は以下の通り。
遺構全測図：1／60 個別遺構図：1／40 実測遺物図：1／3 銭：1／1
なお各挿図にはスケールを表示してある。
7. 本文の都合から遺物に関する詳細は観察表にまとめて掲載している。また復元して実測した遺物は計測値に（ ）を、最大遺存値に [] を付して表している。
 - ・ 遺物の分類及び編年は下記を参考にした。
瀬戸・尾張型山茶碗：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑：中野晴久 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
渥美：安井俊則 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
貿易陶磁：大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編 -』
火鉢：河野真知郎 1993「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢 神奈川第 2 集』神奈川県考古学会
瓦：原廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『永福寺跡 - 遺物・考察編 -』鎌倉市教育委員会
 - ・ 文中で「かわらけ」と記載したものは「轆轤成形かわらけ」を指し、「手づくね成形かわらけ」は「手づくね」と記載している。
8. 本報告では世界測地系（第 IX 系）の座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23（2011）年 3 月 11 日の東日本大震災以前の測量数値を使用している。また原点移動に関しては熊谷満・伊藤博邦（鎌倉遺跡調査会）のご協力を賜りました。
9. 発掘調査及び報告書作成に関しては下記の方々よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。（敬称略・五十音順）
押木弘己・汐見一夫・清水由加里・原廣志・福田誠・渡邊美佐子

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	170
1. 遺跡の位置と歴史的環境	
2. 調査の経過・方法と調査区設定	
3. 堆積土層	
第二章 検出された遺構と遺物	176
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面全測図・最終トレンチ位置図	
第三章 まとめ	185
1. 検出された遺構と遺物	
2. まとめ	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	171	図7 第1面面上・構成土・出土遺物	180
図2 調査区配置図	174	図8 第2面全測図	181
図3 堆積土層図	175	図9 第2面各遺構・出土遺物	182
図4 第1面全測図	176	図10 第2面面上・構成土・表土・出土遺物	183
図5 第1面各遺構・出土遺物(1)	178	図11 第3面全測図・最終トレンチ位置図	184
図6 第1面各遺構・出土遺物(2)	179		

表目次

表1 出土遺物観察表	187	表3 遺構計測表	190
表2 出土遺物破片数表	189		

図版目次

図版1	191	図版2	192
第1面全景(西から)		調査区北壁(南から)	
第1面全景(東から)		調査区西壁(東から)	
第2面全景(西から)		調査区東壁(西から)	
第3面全景(西から)		調査地点近景(南から)	
図版3 出土遺物1	193	図版4 出土遺物2	194

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と歴史的環境 (図1)

本調査地点は鎌倉のほぼ中心を南北に流れる滑川の西側一帯に形成された砂丘状に位置している。この砂丘は、東は滑川西岸、西は当時の稲瀬川の古い流路があった江ノ島電鉄線の長谷駅周辺、北は下馬交差点から長谷観音堂前に至る現在国道134号線を東西に広がる。中世においては「由比ヶ浜」あるいは部分的には「前浜」と言われた地域である。「由比ヶ浜」の地名は『新編相模国風土記稿』によれば稲村ヶ崎を鎌倉側に越えた所にある坂ノ下から小坪の飯島(西浜)まで広がる鎌倉の浜全体の総称としている。『極楽寺律要文録』、『足利尊氏書状案』によると、「前浜」の支配権は和賀江島を含め忍性以来極楽寺長老に与えられている。また現在の国道134号線は、中世においては長谷小路(大町大路)と考えられ、鎌倉七口のうち大仏坂・極楽寺坂から都市中心部へと繋ぐ重要な道筋であった。この長谷小路をはさんだ北側の山沿い地域は「甘縄」と呼ばれ、甘縄神明社、長楽寺、万寿寺等の寺社の他に安達一族の屋敷をはじめ、多くの御家人や被官がその居宅を構えた場所である。中世以前においても鎌倉群衙の存在と関係して奈良時代の宝亀2年(771年)まで古東海道の道筋であったと考えられる。「前浜」の西端に位置する稲瀬川(水無瀬川)は『万葉集』に詠まれ、和田塚周辺には「下向原古墳群」があったことが『新編相模国風土記稿』に書かれ、妥女塚古墳から出土した人物埴輪が京都大学に保存されている。

本調査地点が位置する「由比ヶ浜南遺跡(No.315)」は「長谷小路周辺遺跡(No.236)」の南側一帯、「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡(No.372)」の西側に位置しており、今回の調査で5地点目である。以下に順に説明する。

稲瀬川東岸に位置する地点2は未報告な為詳細は不明だが、中世遺構確認面は海拔2.5m前後で方形竪穴建築址・井戸・溝・土坑などが検出、概ね14世紀代としている。中世以前では多くの遺物が出土しているが、遺構は検出されていない。海拔1.8m前後には、ほぼ平坦な「波蝕台」が検出している。地点3の中世遺構確認面は海拔9.5m前後で方形竪穴建築址・溝状土坑・ピットなどを検出し、概ね14世紀代としている。中世以前では海拔8.1m前後で竪穴建築址の可能性が示唆できる遺構が4棟と多数の土器片などが検出、概ね7世紀末～10世紀代としている。遺跡周辺区域の中でも高い位置にあり、由比ヶ浜北側に形成された砂丘の頂部に近い場所に営まれた遺跡と言える。地点4は「前浜」の中心地に位置し、北側に隣接する「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」と同様に海拔5.3m前後で多数の埋葬遺構が検出している。海拔5m前後では河川に接する土塁や柵で囲まれた礎石建物もつ屋敷・道路・竪穴遺構や土坑・井戸等も検出、更に海拔2m前後まで中世遺構が存在している。中世遺構の年代は屋敷内の礎石建物範囲内から出土した嘉元三(1305)年の銘をもつ板碑やかわらけ・瀬戸窯製品の年代から13世紀中葉～14世紀中葉を主とし、部分的に15世紀後半まで存続していた可能性を示唆している。地点5は「由比ヶ浜南遺跡」の西端に位置し、海拔5.8mから厚く堆積していた風成砂層を除去した海拔3.1m～1.7mの北から南に傾斜する暗褐色砂質土層を中世遺構面としている。周辺の調査事例と比べて遺構の密度は比較的希薄ではあるが、海拔2m前後で大多数の土坑・井戸・集石場遺構が検出、遺物は漁労具関係の出土が多い。下層から出土する遺物の磨滅状態も含め、当時の海岸線は海拔1.5m付近に存在し、一般的な生活遺構というよりは漁業関係の遺構と推察している。古代遺構は検出されず、概ね13世紀中葉～14世紀代としている。

砂丘状に形成される「前浜」一帯は、当時の生活面の海拔が現在と大きく変化しており、砂丘に伴



図1 調査地点と周辺の遺跡

< 調査地点一覧 >

○**由比ヶ浜南遺跡 (No.315)** 1. 長谷二丁目 176 番 8 地点 (本調査地点) 2. 長谷二丁目 122 番 9・10 (1989 年調査・未報告) 3. 長谷二丁目 118 番 2 (瀬田 1995 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書(以下、市緊急報告書) 11-1』 鎌倉市教育委員会 (以下、省略) 4. 由比ガ浜四丁目 1102 番 2 (斉木他 2002 『由比ヶ浜南遺跡』 由比ヶ浜南遺跡発掘調査団) 5. 長谷二丁目 85 番 1 (櫻井他 2004 『由比ガ浜南遺跡』 神奈川考古学財団)

○**由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 (No.372)** 6. 由比ガ浜四丁目 1181 番 (玉林 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』) 7. 由比ガ浜四丁目 1171 番 3 (斉木 2001 『鎌倉市遺跡調査会調査報告書 22 集 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』) 8. 由比ガ浜四丁目 1179 番 1 (大河内 2001 『鎌倉市遺跡調査会調査報告書 22 集 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』 鎌倉遺跡調査会) 9. 由比ガ浜四丁目 1170 番 1 (斉木 1994 『由比ヶ浜 4-6-9 地点発掘調査報告』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団) 10. 由比ガ浜 4 丁目 1170 番 1 (宮田他 2014 『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』 (株) 博通) 11・12. 由比ガ浜四丁目 1136 番 11 (斉木他 1997 『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 1・2・3 分冊』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団) 13. 由比ガ浜四丁目 1130 外 (大河内 1999 『貿易陶磁研究集会 鎌倉大会資料集 - 相模国・鎌倉市街地における中世前期の貿易陶磁』 貿易陶磁研究会・鎌倉市教育委員会) 14. 由比ガ浜四丁目 1134 番 1 (大河内 1996 『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 第 1 分冊・古代編』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団) 15. 由比ガ浜四丁目 1142 番 12 (宮田 1996 『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』 鎌倉考古学研究所) 16. 由比ガ浜四丁目 1142 番 1 (玉林 1984 『鎌倉氏由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 - 特殊養護老人ホーム鎌倉静養館 - 鎌倉市教育委員会』) 17. 由比ガ浜四丁目 1133 番 1 外 (2,002 年調査 宗臺他 2004 ~ 05 『第 14 回 遺跡市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 / 『鎌倉之埋蔵文化財 8 平成 14・15 年度』 鎌倉市考古学研究所・鎌倉市教育委員会) 18. 由比ガ浜二丁目 1235 番 4 (2007 年調査 未報告)

○**長谷小路周辺遺跡 (No.236)** 19. 長谷一丁目 252 番 1 (菊川 1991 『市緊急報告書 7』) 20. 長谷二丁目 1171 番 4 (斉木他 2012 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』 鎌倉遺跡調査会) 21. 由比ガ浜三丁目 207 番 1 (斉木 2007 年調査) 22. 由比ガ浜三丁目 203 番 6 外 (森 2015 『市緊急報告書 31-1』) 23. 由比ガ浜三丁目 202 番 2 (斉木・宗臺 1992 『長谷小路南遺跡発掘調査報告書』 長谷小路南遺跡発掘調査団) 24. 由比ガ浜三丁目 204 番 5 (山口 2011 年調査 未報告) 25. 由比ガ浜三丁目 199 番 1 (斉木 1990 『由比ヶ浜三丁目 199 番 1 地点遺跡発掘調査報告書』 由比ガ浜三丁目 199 番 1 地点遺跡発掘調査団) 26. 由比ガ浜三丁目 2 番 200 (宮田 1997 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 27. 由比ガ浜三丁目 200 日産保養所用地 (玉林 1979 年調査 未報告) 28. 由比ガ浜三丁目 194 番 24 (宗臺 1991 『市緊急報告書 7』) 29. 由比ガ浜三丁目 194 番 25 (斉木 1989 『市緊急報告書 5』 / 斉木 1990 『由比ヶ浜三丁目 194 番 25 外遺跡調査報告』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 30. 由比ガ浜三丁目 194 番 71 (伊丹 2014 年調査) 31. 由比ガ浜三丁目 194 番 50 (汐見 2004 『市緊急報告書 20』) 32. 由比ガ浜三丁目 1175 番 2 外 (馬淵 1994 『市緊急報告書 10』) 33. 由比ガ浜三丁目 194 番 40 (大河内 1997 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 34. 長谷一丁目 205 番 12 (汐見 2002 『市緊急報告書 18』) 35. 由比ガ浜三丁目 1173 番 3 外 (大河内他 2001 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 36. 由比ガ浜三丁目 258 番 8 (斉木 1990 『市緊急報告書 6』) 37. 由比ガ浜三丁目 258 番 1 (斉木 1995 『長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目 258 番 1 地点』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 38. 由比ガ浜三丁目 9 番 41 (斉木 1990 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 32』 神奈川県教育委員会) 39. 由比ガ浜三丁目 254 番 15 外 2 筆 (福田他 2001 『市緊急報告書 17』) 40. 由比ガ浜三丁目 254 番 1 (鈴木 2006 年調査) 41. 由比ガ浜三丁目 223 番 11 (斉木 1991 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 33』 神奈川県教育委員会) 42. 由比ガ浜三丁目 228 番 2 (宗臺 1998 『市緊急報告書 14』) 43. 由比ガ浜三丁目 228・229 番 8 (宗臺 1993 『市緊急報告書 9』) 44. 由比ガ浜三丁目 1262 番 6 (宮田他 2000 『長谷小路周辺遺跡』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団) 45. 由比ガ浜三丁目 1256 番 4・5 (宮田他 2005 『長谷小路周辺遺跡』 (株) 博通) 46. 由比ガ浜三丁目 1262 番 2、1251 番 1・2 (宗臺他 2002 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』 東国歴史考古学研究所) 47. 由比ガ浜三丁目 194 番 1 (斉木 2016 年調査)

う高低差から中世の生活面が平坦でないことを示す。土地利用も一般的な「街」としての生活空間とは異なった用いられ方をしており、古くから人骨が多く発見され、かなり広い範囲で埋納遺構が営まれていることから埋葬の地として使われてきたことがわかる。また周辺の加工痕の残る骨類や鑄造・鍛冶関連遺物の出土により職能集団の存在も推察できる地域と言える。歴史的環境を記すにあたっての引用・参考文献は末稿にまとめて記載した。

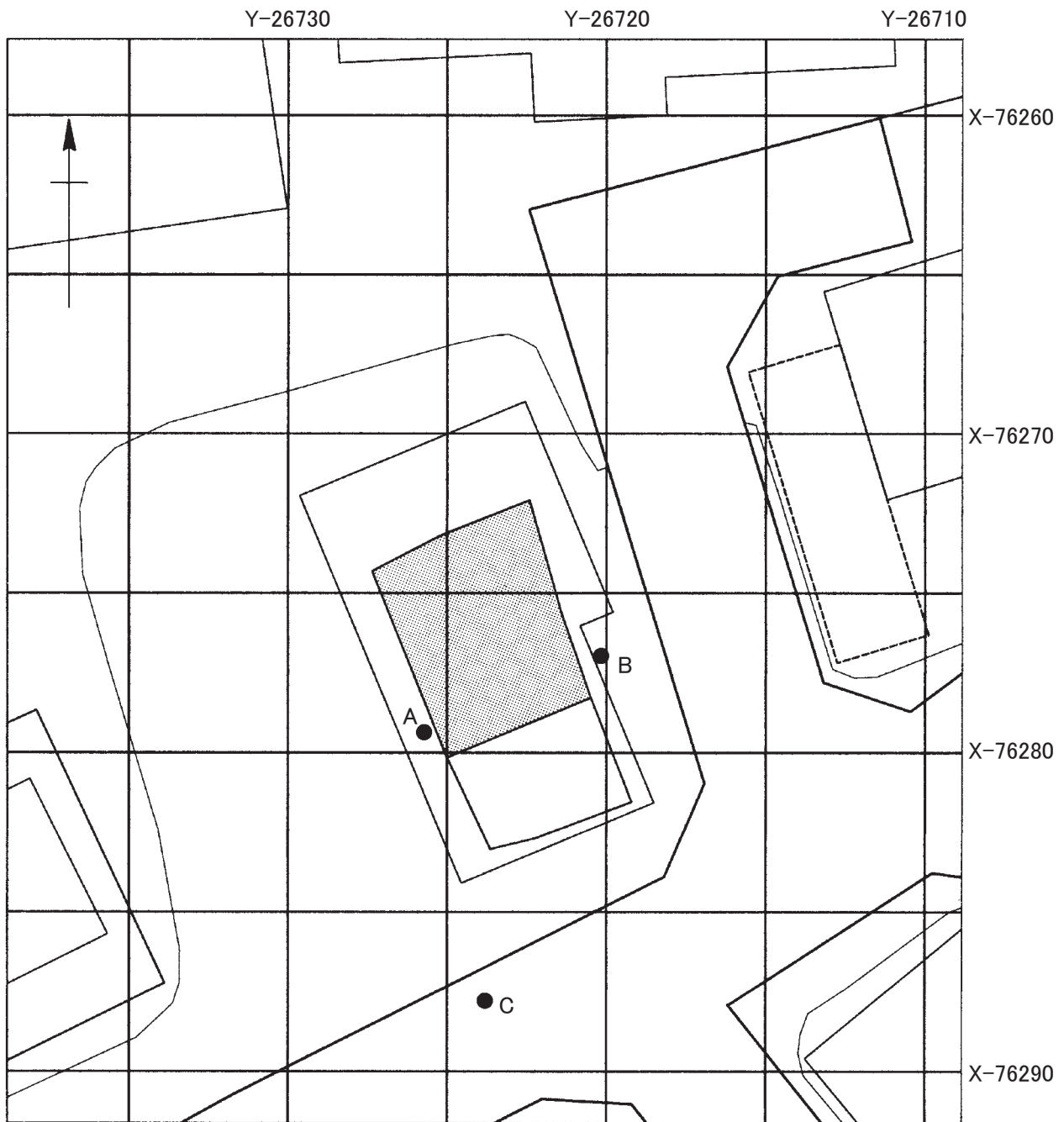
2. 調査の経過・方法と調査区設定（図2）

本調査は鎌倉市長谷二丁目176番8地点における、個人専用住宅建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会が平成20年2月26日から2月27日に行った確認調査の結果に基づき実施された。調査に伴う残土を敷地内で処理する必要から調査区は南北に二分割し、北半をⅠ区、南半をⅡ区とした。しかしⅠ・Ⅱ区全面を一括で表土掘削した所、現地表下60cm付近でⅡ区より大量の湧水となり、また調査地が砂地という点からも今後調査区崩壊の恐れがある為、Ⅰ区のみ調査となった。調査期間は平成20年7月22日から8月7日まで、調査面積は27.5（本来55）㎡、現地表海拔は6.2m。調査開始にあたっては調査区に任意の方眼紙を設け、基本点Aと見返り点Bを設定して遺構の測量・図面作成に使用した。基本点Aと見返り点Bは鎌倉市4級基準点成果表に基づき国土座標に倣った座標値の移設を熊谷満・伊藤博邦（鎌倉遺跡調査会）両氏の協力のもと行なった。現地調査では日本測地系（座標AREA9）の国土座標値を使用した。本報告作成に際して国土地理院が公開する座標変換ソフトweb版「TKY2JGD」で世界測地系（第IX系）に変換し、図2に表記した。

3. 堆積土層（図3）

本調査地は砂丘上に位置しており、基本的に客土を用いた地業面を検出することはなく、自然堆積の風成砂層上に生活面が構築されている。そのため遺構を検出・確認した層を生活面として捉えて調査した。調査区北壁・東壁で確認した土層堆積図より堆積状況を上層より説明する。湧水処理のため調査区壁下に排水溝や犬走りを設置したことにより、図示した調査区壁の堆積土層図は平面調査の検出状況とは合致していないことを前もって明記する。

調査前の現地表海拔は6.2m前後でほぼ平坦な造成を形成していた。現地表から約30cmの表土を重機によって除去し、あとは人力によって海拔5.6m前後（現地表下60cm）で検出された貝砂・炭化物・土器片を含む締まりのある黄褐色砂質土（第3層）を第1面とした。第1面は現代埋土によって大きく攪乱され、一部遺構が壊されている。遺構の重複が多く、本来なら1a面・1b面と分けて調査すべきではあるが、この段階での大量の湧水と土質を考慮して同時期に掘り上げている。第2面は海拔5.4m前後（現地表下80cm）で検出された貝砂・炭化物・褐鉄粒を含むやや締まりのある明黄褐色砂質土（第9層）上とした。湧水のため排水溝・犬走り設置で調査面積が狭小となり、第1面に比べて遺構密度は低い。第3面は東壁側溝で斜面堆積と思われる落ち込みを確認し、生活面としては捉え難いものの、貝砂・黄白色砂を含むやや締まりのある褐色砂質土（第15層）上とした。確認レベルは海拔5m前後（地表下120cm）。湧水の為に全体的に掘下げるのが困難な為、調査区南側に最終トレンチを設置。遺構の底面（海拔4.7m）を検出し、斜面堆積が溝状遺構であることが判明した。海拔4.7m以下は明黄褐色砂質土の無遺物層となり、中世基盤層と思われる。



0 5 10m
(1/200)

地点	日本測地系		世界測地系	
	X	Y	X	Y
A	-76636.144	-26432.287	-76279.3934	-26725.7161
B	-76633.735	-26426.789	-76276.9848	-26720.2179
C	-76644.511	-26430.408	-76287.7602	-26723.8374

図 2 調査区配置図

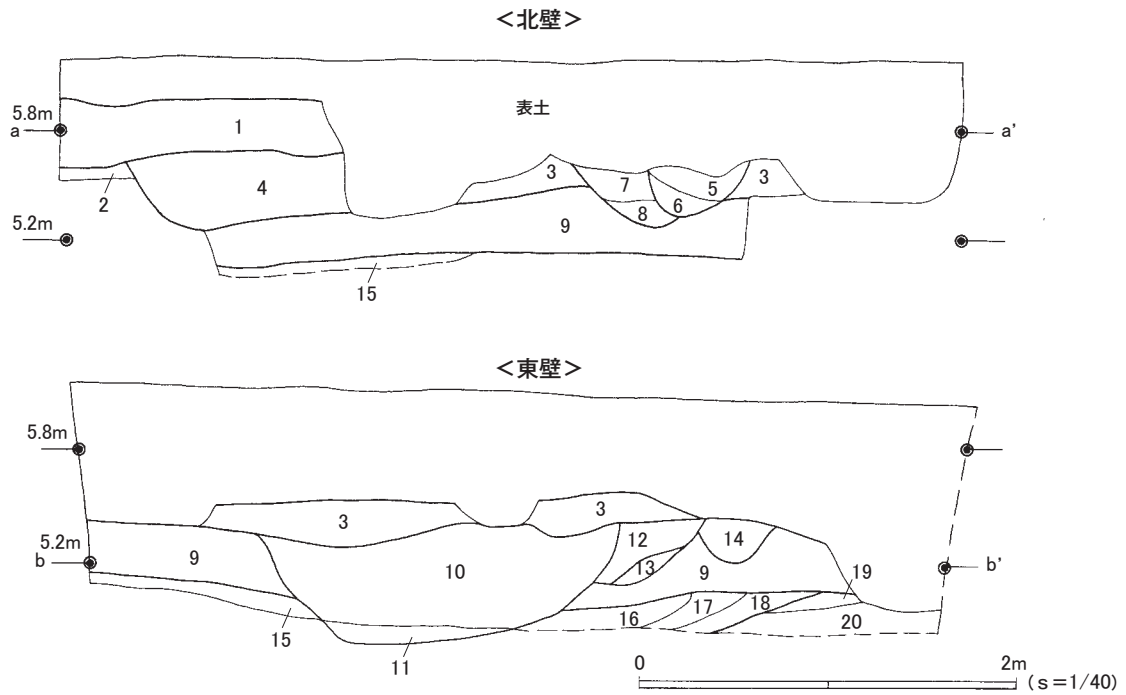


図3 堆積土層図

<土層注記 (図3)>

- | | |
|------------|---|
| 1 青灰色砂質土 | 貝砂・炭化物・泥岩粒多量・かわらけ片少量。縮まりあり。中世遺物包含層。 |
| 2 褐色砂質土 | 貝砂・炭化物少量。縮まりあり。 |
| 3 黄褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物・かわらけ片少量。縮まりあり。(第1面構成土) |
| 4 茶褐色砂質土 | 貝砂多量・泥岩(5cm)少量・かわらけ片少量。縮まりなし。(遺構5覆土) |
| 5 暗褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物少量・泥岩粒・縮まりあり(遺構27覆土) |
| 6 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物少量・縮まりあり(遺構27覆土) |
| 7 暗褐色砂質土 | 貝砂・炭化物多量・縮まりややあり。(遺構25覆土) |
| 8 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物少量。縮まりなし。(遺構25覆土) |
| 9 明黄褐色砂質土 | 貝砂・炭化物微量・褐鉄粒多量。縮まりあり。(第2面構成土) |
| 10 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物・かわらけ片少量。黄褐色砂混じる。縮まりややあり。(遺構36覆土) |
| 11 褐色砂質土 | 貝砂多量・黄白色砂ブロック少量・炭化物少量。縮まりややあり。(遺構36覆土) |
| 12 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物・かわらけ片少量・黄褐色砂混じる。縮まりややあり。 |
| 13 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物少量・黄白色砂ブロック少量混じる。縮まりややあり。 |
| 14 褐色砂質土 | 貝砂多量・炭化物・かわらけ片少量・黄褐色砂混じる。縮まりややあり。(遺構38覆土) |
| 15 褐色砂質土 | 貝砂多量・黄白色砂少量。縮まりややあり。(第3面構成土) |
| 16 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂質土・やや粗い貝砂含む。縮まりややあり。(3面溝状遺構覆土) |
| 17 灰白色砂 | 褐色砂ブロック多量・粗い貝砂を含む。縮まりなし。飛砂に似ている。(3面溝状遺構覆土) |
| 18 灰褐色砂質土 | 白色の貝砂・暗褐色砂質土混じる。有機物を一部含む。縮まりややあり。(3面溝状遺構覆土) |
| 19 明黄褐色砂質土 | 貝粒多量・炭化物少量・褐鉄粒多量。褐色砂混じる。縮まりあり。 |
| 20 明黄褐色砂質土 | 貝粒多量・炭化物少量・褐鉄粒多量。縮まりあり。無遺物層。(中世基盤層) |

第二章 検出された遺構と遺物

本調査では現地表から約30cm下まで重機によって表土掘削を行ない、その後は人力によって遺構の発見・記録をした。調査区は南北5.8m×東西4.8mで、本報告では3面に分けて報告している。報告の際の遺構番号は、遺構確認時点で付した番号であり、遺構の新旧を表すものではない。本文内では各面の特徴的な遺構・実測遺物のあった遺構のみを説明しており、その他は遺構計測表にまとめて提示した。

出土遺物は遺物整理箱に総数2箱と非常に少なく、その大半は小破片や自然遺物であるため報告数は少ない。各面で発見した遺物の詳細は出土遺物観察表にまとめ、その他の遺物の様相は遺物破片数表を提示した。以下、発見した遺構は上層から下層の順に第1面から第3面・最終トレンチと分けて報告した。調査開始前現地表の海拔は6.2mである。

1. 第1面の遺構と遺物 (図4～7)

第1面は海拔5.6m前後(現地表下60cm)で検出された貝砂・炭化物・土器片を含む締まりのある黄褐色砂質土(第3層)上を遺構確認面とした。発見した遺構は、溝1条・溝状土坑2基・土坑9基・ピット17穴である。第1面は現代埋土によって大きく攪乱され、一部遺構が壊されている。遺構の重複関係から、本来ならば1a面・1b面と2時期に分けて調査するべきではあったが、この段階での大量の湧水と土質を考慮して同時期に掘り上げている。遺物はかわらけ(手捏ね・糸切り)、青磁、瀬戸、常滑、備前、火鉢、瓦、鉄製品、石製品、骨角製品、貝、古代の土師器・須恵器が出土している。

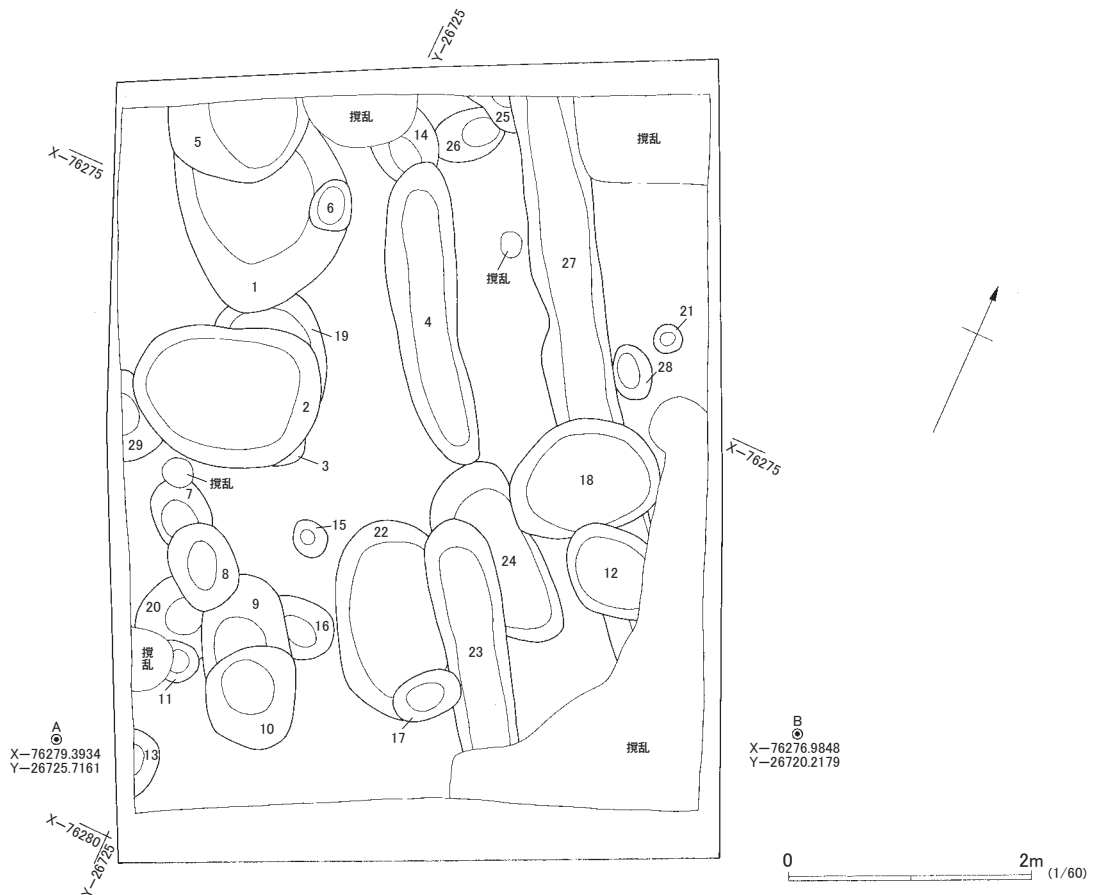


図4 第1面全測図

遺構 1 (図 4 ~ 5)

調査区の北東隅で検出された楕円形状土坑。北側は遺構 5 に切られる。検出規模は長径 150cm 以上 × 短径 136cm、確認面からの深さ 20cm (海拔 5.3 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・泥岩粒・黄色砂ブロックが混じる茶褐色砂質土。南北軸方位は N - 51° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 1 は小型かわらけ。やや器高のある碗型を呈する。2 は常滑片口鉢 I 類の口縁部片。その他に破片でかわらけ、瀬戸瓶子、常滑甕が出土している。

遺構 2 (図 4 ~ 5)

調査区の西部で検出された楕円形状土坑。検出規模は長径 153cm × 短径 116cm、確認面からの深さ 28cm (海拔 5.25 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・青灰色砂ブロック多量が混じる褐色砂質土。南北軸方位は N - 20° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 3 は小型かわらけ。4 は常滑片口鉢 I 類の口縁部片。5 は瓦器質輪花型火鉢の口縁部片。6 は加工骨の未製品。片端面に 2 箇所切痕と表面は微かに火をうけ煤付着する。7 は須恵器甕の肩部小片。平行状のタタキ目痕がのこる。その他に破片でかわらけ・常滑片口鉢 I 類・甕、土器質火鉢、土師器甕、貝が出土している。かわらけは轆轤成形の中に 1 点だけ手づくねが混じる。

遺構 4 (図 4 ~ 5)

調査区中央部で検出された溝状土坑。検出規模は長径 250cm × 短径 50cm、確認面からの深さ 11cm (海拔 5.4 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物多量を含む黄白色砂質土。南北軸方位は N - 30° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 8 は滑石鍋転用品で、スタンプの加工途中か。その他に破片でかわらけ、貝が出土している。

遺構 5 (図 4 ~ 5)

調査区北東部で検出された土坑。北側は調査区外に続くため全体の規模・形状は不明。検出規模は長径 115cm × 短径 65cm 以上、確認面からの深さ 22cm (海拔 5.35 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・泥岩少量・かわらけ片少量を含む茶褐色砂質土。南北軸方位は N - 28° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 9 はかわらけ。通常の小型よりやや小振りな碗型を呈する。10 ~ 11 は常滑片口鉢 I 類の小片。12 は備前播鉢の小片。条線は 5 本確認できる。13 は巴文の鏡瓦。その他に破片でかわらけ、瀬戸折縁深皿、常滑甕、瓦器質火鉢、貝が出土している。

遺構 8 (図 4 ~ 5)

調査区南西部に検出された楕円形状ピット。検出規模は長径 70cm × 短径 52cm、確認面からの深さ 23cm (海拔 5.3 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物少量を含む暗青灰色～茶褐色砂質土。南北軸方位は N - 58° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 14 は小型のかわらけ。その他に破片でかわらけ、常滑甕・片口鉢 II 類、貝が出土している。

遺構 12 (図 4 ~ 5)

調査区南東部に検出された楕円形状土坑。東側は攪乱に切られる。検出規模は長径 70cm × 短径 60cm 以上、確認面からの深さ 18cm (海拔 5.3 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・青灰色砂ブロック多量を含む褐色砂質土。南北軸方位は N - 20° - W を示す。

出土遺物: 図 5 - 15 は骨角製品の筭転用品か。先端 2 箇所を再加工している。その他に破片でかわらけ、常滑片口鉢 II 類、貝が出土している。

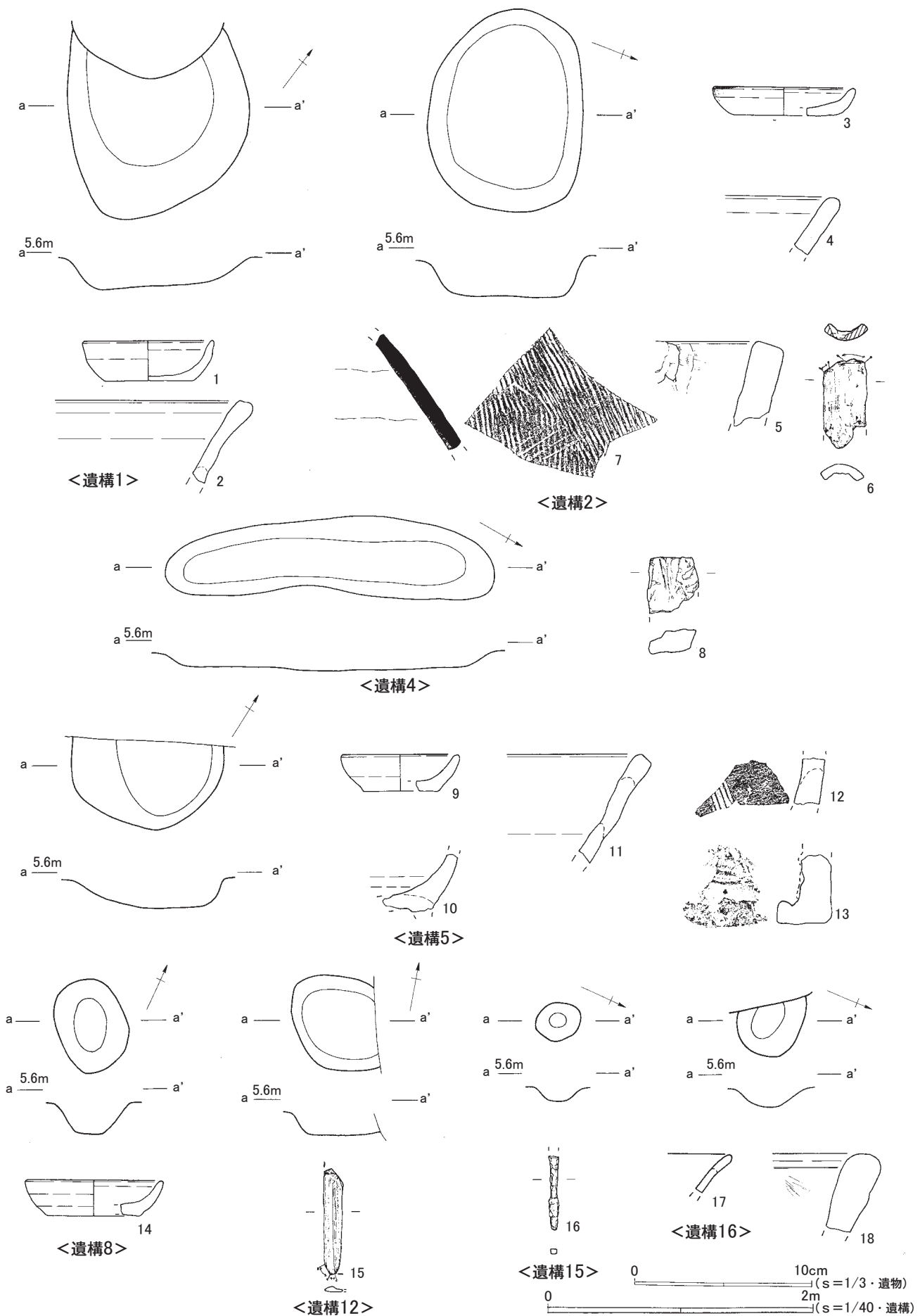


図5 第1面各遺構・出土遺物(1)

遺構 15 (図 4 ~ 5)

調査区中央部に検出された円形状ピット。検出規模は長径 32m × 短径 28cm、確認面からの深さ 10cm (海拔 5.4 m) 前後。覆土は貝粒・炭化物少量を含む褐色砂質土。南北軸方位は N - 25° - W を示す。

出土遺物：図 5 - 16 は鉄釘。その他に破片でかわらけ、常滑甕、骨、貝が出土している。

遺構 16 (図 4 ~ 5)

調査区南西部に検出された楕円形状ピット。西側は遺構 9 に切られる。検出規模は長径 52cm 以上 × 短径 50cm、確認面からの深さ 13cm (海拔 5.3 m) 前後を測る。覆土は貝粒・炭化物少量を含む褐色砂質土。南北軸方位は N - 7° - E を示す。

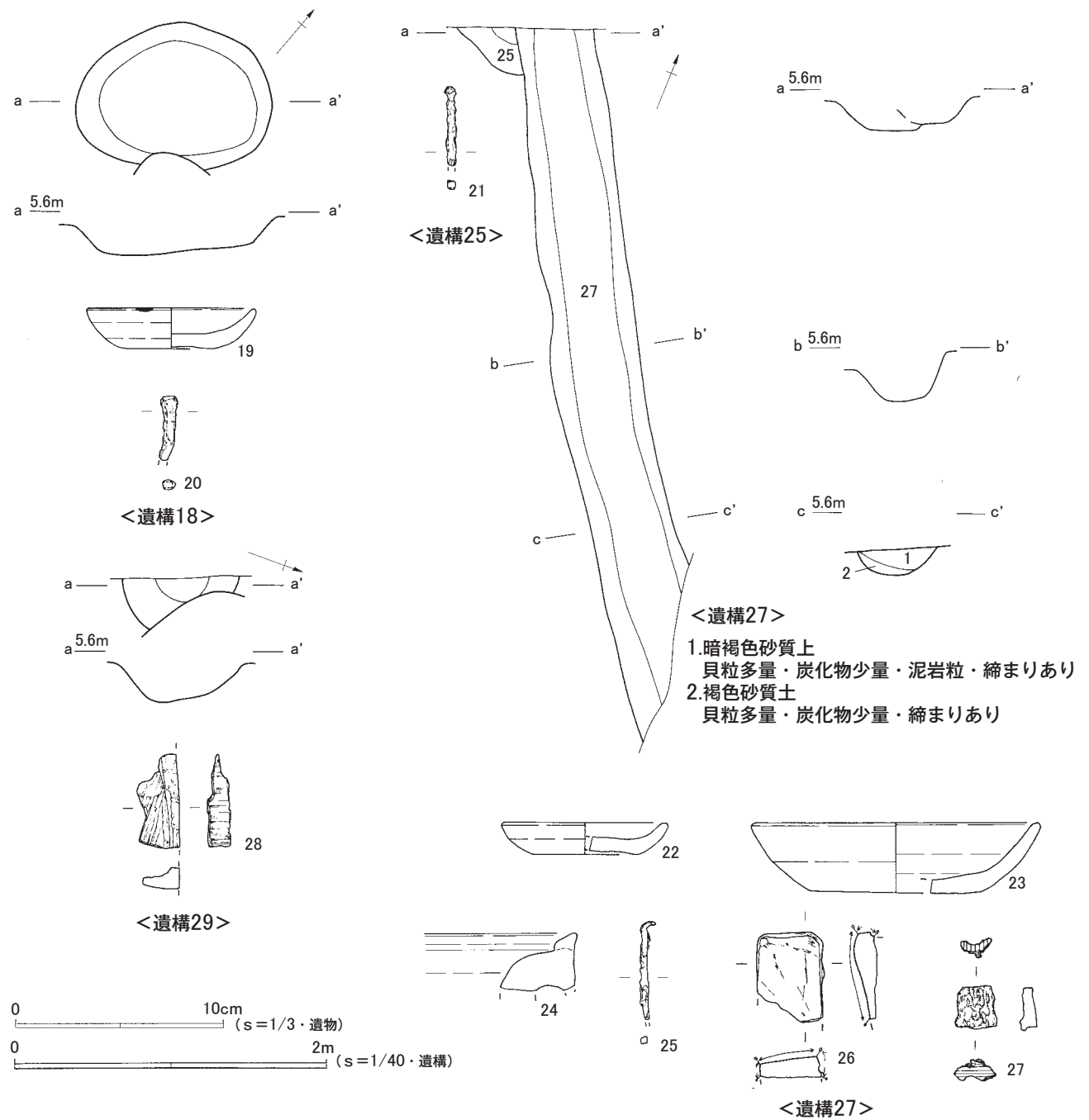


図 6 第 1 面各遺構・出土遺物 (2)

出土遺物：図5-17は尾張型山茶碗の口縁部片。18は土器質火鉢の口縁部片。その他に破片でかわらけ、青磁蓮弁文碗、常滑甕、土師器坏が出土している。

遺構 18 (図4・6)

調査区東部に検出された楕円形状土坑。南側は遺構12に切られる。検出規模は長径125cm×短径85cm、確認面からの深さ20cm(海拔5.3m)前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物多量・青灰色砂ブロック多量に含む褐色砂質土。南北軸方位はN-40°-Wを示す。

出土遺物：図6-19は小型のかわらけ。20は鉄釘。その他に破片でかわらけ、常滑片口鉢Ⅱ類、貝が出土している。

遺構 25 (図4・6)

調査区北東部に検出されたピット。北側は調査区外、東側は遺構27に切られているため全体の規模と形状は不明。検出規模は長径35cm以上×短径30cm以上、確認面からの深さ20cm(海拔5.3m)前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・かわらけ片少量を含む締まりのない褐色砂質土。南北軸方位はN-28°-Wを示す。

出土遺物は図6-21は鉄釘。その他に破片でかわらけ、貝が出土している。

遺構 27 (図4・6)

調査区北東隅を南北に走る溝。北側は調査区外、南側は攪乱のため全体の規模と形状は不明。検出規模は長径450cm以上×短径45~55cm、確認面からの深さ15~25cm(海拔5.35~5.2m)前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物少量・泥岩粒を含む暗褐色~褐色砂質土。南北軸方位はN-33°-Wを示す。

出土遺物は図6-22は小型、23は大型かわらけ。23は底部糸切り後のナデ調整が、手づくねと見間違う様相を呈している。24は常滑甕、25は鉄釘、26は鳴滝産仕上砥、27は用途不明の加工骨。その他に破片でかわらけ、常滑甕、貝が出土している。

遺構 29 (図4・6)

調査区西部に検出された土坑。左側は調査区外、東側は遺構2に切られているため全体の規模と形状は不明。検出規模は長径75cm×短径33cm以上、確認面からの深さ20cm(海拔5.3m)前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・かわらけ片少量を含む締まりのない褐色砂質土。南北軸方位はN-45°-Wを示す。

出土遺物は図6-28は鳴滝産硯転用不明品。その他に破片でかわらけ、加工骨、貝が出土している。

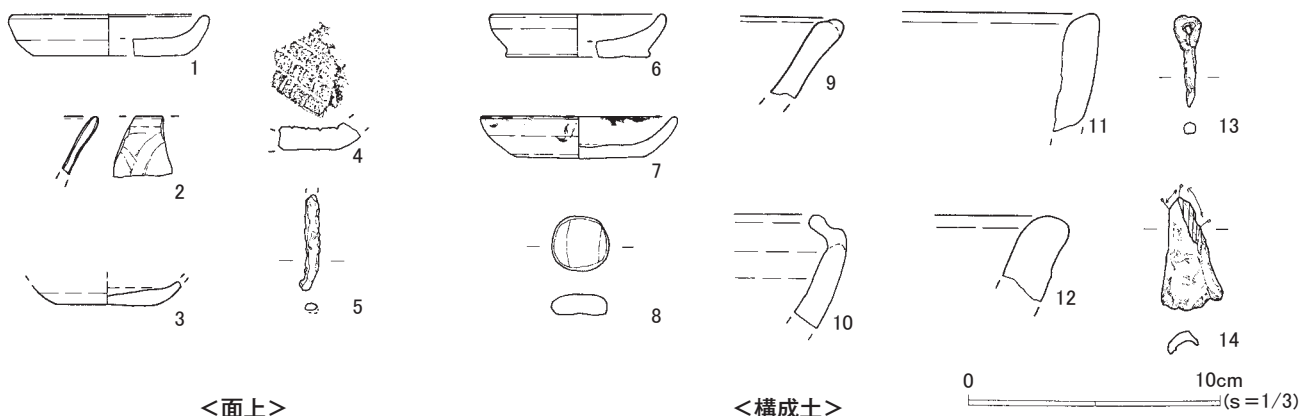


図7 第1面面上・構成土・出土遺物

第1面面上・構成土・出土遺物（図7）

図7-1～5は面上出土遺物。1は小型のかわらけ。2は竜泉窯鎬蓮弁文碗の口縁部小片。内面によるキズあり。3は瀬戸入子の底部片。4は瀬戸卸皿の底部片。露胎の為、釉調や施釉方法は不明。内底面の卸目は浅い。外底部脇～底部はロクロ成形後にヘラケズリ調整を施している。5は鉄釘。

図7-6～14は構成土出土遺物。6～7は小型のかわらけ。6は口径底径比の差が少ない箱形状のタイプを呈する。7は灯明皿か。8はかわらけ転用の円盤状土製品。9～10は常滑諸製品。9は片口鉢I類の口縁部片。10は片口碗の口縁部片。11～12は火鉢の口縁部片。13は先端を折り曲げて接続させている環状金具。14は骨角未製品。

2. 第2面の遺構と遺物（図8～10）

第2面は海拔5.4m前後（現地地表下80cm）で検出された貝砂・炭化物・褐鉄粒を含むやや締まりのある明黄褐色砂質土（第9層）上とした。発見した遺構は、溝状土坑1基・土坑4基・ピット7穴である。湧水のため排水溝・犬走り設置で調査面積が狭小となり、第1面に比べて遺構密度は低い。深度や覆土の様相に大きな変化が見られないことから、調査の段階では面として捉えているが、短期間の遺構の造り替えと考えられる。出土遺物はかわらけ、青磁、青白磁、常滑、鉄製品、骨角製品、貝、古代の土師器・須恵器が出土している。全体的に磨滅が激しく、調整が不明瞭な遺物が大多数の為に実測できたものは少ない。

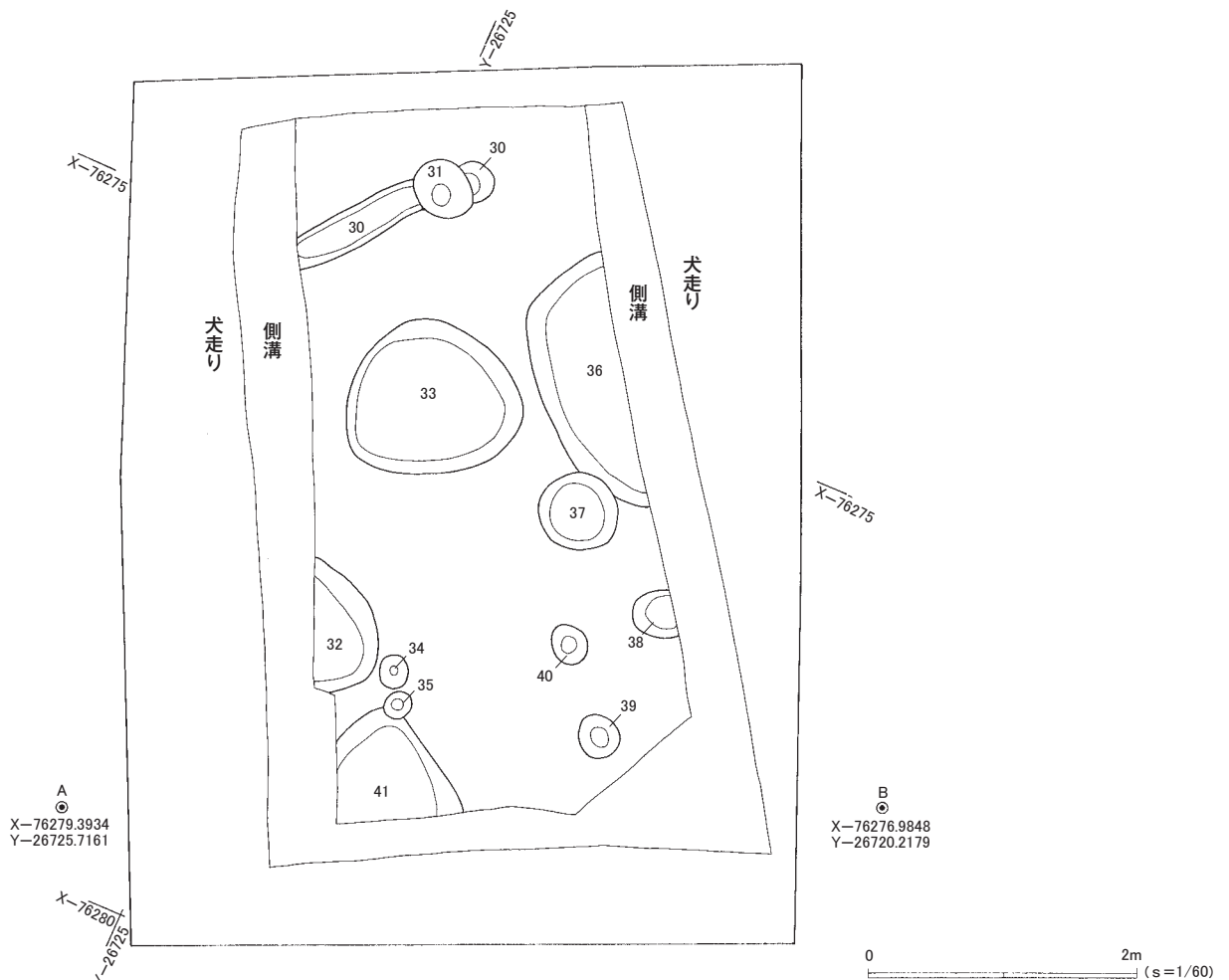


図8 第2面全測図

遺構 30 (図 8 ~ 9)

調査区北東部に検出された溝状土坑。西側は調査区外、中央部で遺構 31 に切られる。検出規模は長径 155cm 以上×短径 25cm、確認面からの深さ 30cm (海拔 4.95 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・かわらけ片少量・黄白砂ブロックを含む褐色砂質土。軸方位は N - 40° - E を示す。

出土遺物は図 9 - 1 は小型かわらけ。その他に破片でかわらけ、常滑甕、弥生式土器が出土している。

遺構 36 (図 8 ~ 9)

調査区東部に検出された楕円形状土坑。東側は調査区外、南東隅を遺構 37 に切られる。検出規模は長径 190cm × 短径 63cm 以上、確認面からの深さ 50cm (海拔 4.7 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・かわらけ片・黄白砂ブロックを含む褐色砂質土。軸方位は N - 30° - W を示す。

出土遺物は図 9 - 2 は土師器の比企型坏。内外面に丁寧なミガキと赤彩が施される。3 は土師器の相模型甕。その他に破片でかわらけ、青磁蓮弁文碗、チャートが出土している。

遺構 37 (図 8 ~ 9)

調査区東部に検出された円形状ピット。検出規模は長径 58cm × 短径 57cm、確認面からの深さ 5cm (海拔 5.1 m) 前後を測る。覆土は貝粒多量・炭化物・かわらけ片・褐鉄粒を含む青味かかった褐色砂質土。軸方位は N - 34° - W を示す。

出土遺物は図 9 - 4 は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗の小片。5 は鉄製品の鉾か。その他に破片でかわらけ、貝が出土している。

遺構 41 (図 8 ~ 9)

調査区東部に検出された楕円形状土坑。東側は調査区外、南東隅を遺構 37 に切られる。検出規模は長径 94cm 以上×短径 83cm 以上、確認面からの深さ 25cm (海拔 4.9 m) 前後を測る。覆土は貝粒・炭化物・灰色白砂を含む褐色砂質土。軸方位は N - 40° - E を示す。遺構底面で中世基盤層と思われる明黄褐色砂質土が確認できる。2つの遺構が絡む可能性もあったが、湧水のため確認することはできなかった。

出土遺物：図 9 - 6 は土師器の平底盤状坏。体部内面に放射状の暗文が微かに確認できる。その他に破片でかわらけ、土師器甕が出土している。

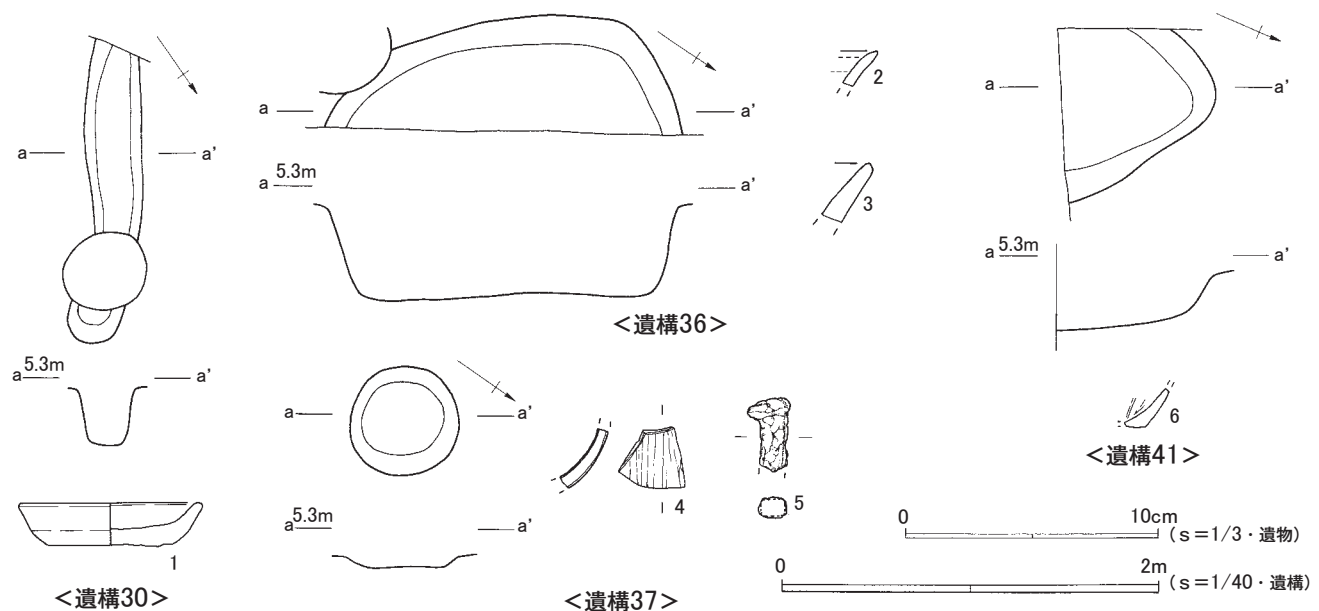


図 9 第 2 面各遺構・出土遺物

第2面面上・構成土・表土出土遺物 (図10)

図10 - 1～2は面上出土遺物。1は竜泉窯青磁鎗蓮弁文碗の体部片、2は青白磁碗の底部片。

図10 - 3～13は構成土出土遺物。3は小型かわらけ、4～6は尾張型山茶碗の口縁部片、7は常滑片口鉢Ⅰ類の口縁部片、8は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部片、9は須恵器坏蓋、10～12は土師器相模型甕の口縁部片、13は土師器台付甕の脚部片。

図10 - 14～17は表土。14は青白磁梅瓶の蓋。15は男瓦。小片の為判別が難しかったが、側縁をヘラケズリで2面の面取りをしていることから男瓦とした。16～17は鉄釘。

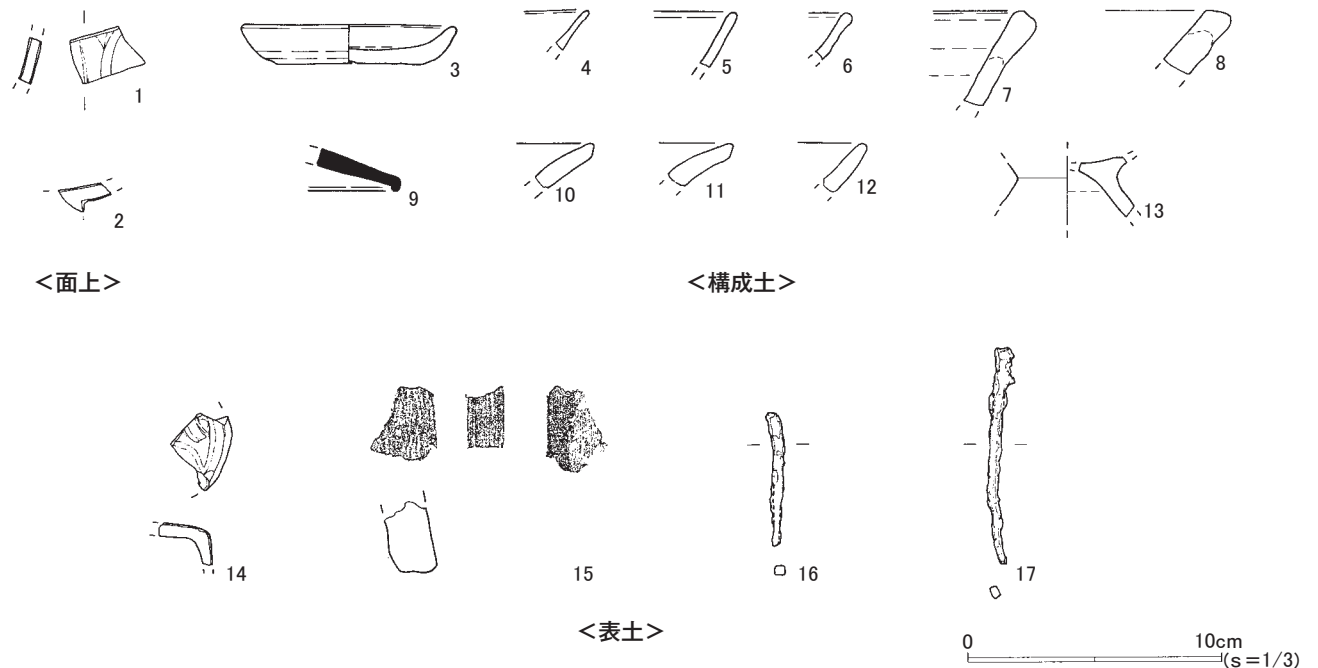


図10 第2面面上・構成土・表土・出土遺物

3. 第3面・最終トレンチ (図11)

第3面は東壁側溝で斜面堆積と思われる落ち込みを確認し、面としては捉え難いものの海拔5～5.05mで平面上にひろげた。湧水で全体的に掘下げることが困難な為、調査区南側に最終トレンチを設置。遺構の底面(海拔4.7m)が確認でき、斜面堆積が溝状遺構であることが判明した。

溝状遺構は調査区を東西に走るが、西壁は湧水の為に未確認である。検出規模は長径340cm以上×短径140cm以上、確認面からの深さ30～35cm(海拔4.7m前後)を測る。覆土は暗褐色砂質土・粗い白色貝砂を含む灰白色砂～黄茶褐色砂質土。軸方位はN-82°-Eを示す。海拔4.7m以下は貝粒多量・炭化物少量・褐鉄粒多量で締まりのある明黄褐色砂質土を呈し、それ以降は無遺物層となる。中世基盤層と思われる。掘り下げ時の堆積層からは、土師器・須恵器が多数出土している。

第三章 まとめ

今回の調査は大量の湧水で調査区を縮小したため、十分な成果が得られたとは言い難い。周辺の調査結果をふまえて、検出した遺構・遺物について簡単なまとめを行ないたい。

1. 検出された遺構と遺物

本報告では遺構検出面を3面に分けて報告しているが、本調査地は砂丘上に位置しており、基本的に客土を用いた地業面を検出することはなく、自然堆積の風成砂層上に生活面が構築されている。検出遺構は溝2条・土坑17基(内、溝状4基)・ピット24穴である。第1面～第2面で検出した遺構は深度や覆土の様相に大きな変化はなく、短期間で遺構の造り替えをしていると考えられる。建物を復元することは不可能だが、区画を示す場合が多い溝や溝状土坑の軸方位が概ねN-30°-W前後であった。第3面～最終トレンチで検出した溝の軸方位はN-82°-Eと様相が異なり、遺構の底面(海拔4.7m)以下では無遺物層を確認できた。

本調査地点の遺物層出土点数は、接合後の破片数で1,353点(遺物整理箱2箱)を数える。その大半は小破片や自然遺物であるため図示できた報告数は少ない。出土遺物の傾向としては、80%程度をかわらけ(内、手づくね0.4%)、10%程度を貝類、2%程度を骨角製品含む獣骨類が占める。大多数のかわらけが小片のため、明確な遺物分類が出来ていない可能性もあるが、所謂「薄手丸深」タイプや法量的な「中型」はみられなかった。「手づくね」は数点その他には舶載品、瀬戸窯や常滑窯の諸製品、火鉢や瓦など土器類や石製品、金属製品となる。瀬戸窯は中期の製品、常滑窯は5～7型式、瓦は永福寺Ⅲ期、かわらけや備前窯の出土もふまえて、本遺跡の年代は概ね13世紀中葉～14世紀中葉と考える。古代遺物は全体の2%程であった。

2. まとめ

特筆する点は、かわらけ・滑石鍋・硯・骨角製品の転用品や加工途中と思われる未製品の出土である。数的には僅かではあるが、周辺の調査同様に職能集団の存在を推察できる地域ということを示すことは出来たと思われる。また第2面以降の出土遺物は、全体的に磨滅が激しいものが多かった。「由比ヶ浜南遺跡(No.315)」の地点5では、北から南の海側に傾斜し、遺構の分布は北側海拔2m以上に占地。海拔1.5m以下の遺物は水流により表面磨滅したものが多く、海水によって磨滅を受けたものだと仮定して、当時の海岸線は海拔1.5m付近に存在していたことを推察している。地点4では方形竪穴建物・井戸・溝等が検出された居住区域とそれより低い平坦な海浜部を、海拔2.6m前後で形成されている溝状土坑で区分している。海浜部は荷重痕跡と呼ばれる地層変化が確認され、人工的な遺構は確認されていない。また地点2では海拔1.8m前後に、ほぼ平坦な「波蝕台」を検出している。但し、地点3においては砂丘の頂部に近い場所に営まれた遺跡と言えるため、海拔8.1m前後で古代遺構確認面を検出している。以上の点をふまえて、海外線から北に400m離れている本調査地点での海拔5.6m前後(現地地表下60cm)からの大量の湧水、海拔4.7m以下の無遺物層確認は、当時の海岸線は現在より北側で、本調査地点周辺にむかって内湾していたと推察できる。近年調査の地点46では古墳時代の石棺墓や古代末～中世初期と古墳時代初めの時期差の異なる2層の黒色砂層が確認されている。この発見は今後の浜一帯の古代から鎌倉時代初期にかけての地形復元の足掛かりになるであろう。本調査地点南側周辺を含めた今後の調査事例の成果が待ち遠しい。

<引用・参考文献>

高柳光寿 『鎌倉市史 総説編』1959年 吉川弘文館

高柳光寿・貫達人 『鎌倉市史 社寺編』1959年 吉川弘文館

貫達人・川副武胤 『鎌倉廃寺事典』1980年 有隣堂

白井英二 「鎌倉事典」1976年 東京堂出版

上本進二 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『東国歴史考古学研究所調査研究報告 第26集 神奈川県逗子市棧敷戸遺跡発掘調査報告書』2000年3月

表1 出土遺物観察表

図版番号	出土層位 出土遺構	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位:cm/():復元値]:残存値			
図5-1	第1面遺構1	かわらけ	(7.2)	(5.0)	2.3	a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:遺存値 g:備考 a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒多・黒色粒・海綿骨芯を含む粉質気味やや粗土 c:橙色 e:良好 f:1/4
	-2	常滑片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・長石・小石粒 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:5~6a型式
-3	第1面遺構2	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.6	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・黒色粒・海綿骨芯を含む粉質気味やや粗土 c:黄橙色 e:良好 f:1/5 g:器表面部分的に黒く変色
-4		常滑片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:6a型式
-5		瓦器質火鉢				a:輪積み技法 内外面共に縦位のミガキ・炭素吸着黒色処理 b:灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒を含む粗土 c:灰~黒灰色 e:良好 f:口縁部片 g:輪花状
-6		加工骨未製品	[4.9]	2.4	0.5	g:片端面2箇所切断痕あり 全体が薄らと黒く焼ける
-7		須器器				a:輪積み技法 外面平行状のタタキ・内面ヨコナデ b:明灰色 砂粒・黒色粒・白色粒を含む良土 c:灰色 e:良好・硬質 f:肩部片
-8	第1面遺構4	石製品滑石銅転用品	[3.1]	2.9	0.9~1.2	c:銀灰色 g:滑石銅転用スタンプか? モチーフは不明だが何らかの意匠を削り出そうとした痕跡あり 側面に煤付着
-9	第1面遺構5	かわらけ	(6.5)	(4.2)	2.0	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質良土 c:橙色 e:良好・硬質 f:1/5
-10		常滑片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・長石・小石粒 c:灰色 e:良好・硬質 f:底部片(高台は欠損)
-11		常滑片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:淡灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 c:淡灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:6a型式
-12		備前挿鉢				a:輪積み技法 b:赤灰色 砂粒・白色粒・やや粗土 c:灰褐色 e:良好・硬質 f:胴部小片 g:条線5本
-13		巴文鏡瓦	瓦当部分			b:灰白色 赤色粒・黒色粒・白色粒を含むやや粗土 c:灰褐色 e:軟質 f:瓦当部小片 g:外区内縁に珠文・圏線を伴う巴文 永福寺Ⅲ期?
-14	第1面遺構8	かわらけ	(7.5)	(5.2)	2.0	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質気味やや粗土 c:橙色 e:良好 f:1/5
-15	第1面遺構12	骨角製品筭転用品	[5.9]	[1.0]	0.1~0.3	a:片面溝をもつ薄板状で丁寧に研磨 b:鹿骨(四肢骨) f:片側面以外は欠損し、先端部2箇所再加工(研磨)
-16	第1面遺構15	鉄製品釘	[4.1]	0.4	0.3	a:断面形状に鑄造 f:片端部欠損 g:錆の付着激しい
-17	第1面遺構16	尾張型山茶碗土器質火鉢				a:ロクロ b:灰色 砂粒・黒色粒・白色粒を含むやや粗土 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:6~7型式
-18						a:輪積み技法 口縁部内外面ヨコナデ・内面斜位のハケ目・外面指頭痕 b:灰色微砂多・黒色粒・白色粒 c:灰色~灰褐色 e:軟質 f:口縁部片 g:1b類
図6-19	第1面遺構18	かわらけ	(8.0)	(4.3)	1.9	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒多・白色粒・黒色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質気味やや粗土 c:黄橙色 e:良好 f:2/3 g:口唇部に油煤痕(灯明皿)
-20		鉄製品釘	[3.1]	0.4	0.4	a:断面形状に鑄造 f:片端部欠損 g:錆の付着激しい
-21	第1面遺構25	鉄製品釘	[3.1]	0.4	0.3	a:断面形状に鑄造 f:先端部欠損 g:錆の付着激しい
-22	第1面遺構27	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.5	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂多・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土 c:橙色 e:良好 f:1/2
-23		かわらけ	(13.6)	(8.3)	3.3	a:ロクロ・外底回転系切(ナデ調整あり)・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む砂質気味やや粗土 c:橙色 e:良好 f:1/3 g:器表面部分的に黒く変色
-24		常滑器				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・長石・小石粒 c:茶褐色 e:硬質 f:縁部小片(縁部下端欠損) g:6b~7型式
-25		鉄製品釘	[4.7]	0.3	0.3	a:断面形状に鑄造 f:先端部欠損 g:錆の付着激しい
-26		石製品砥石	[4.3]	3.0	(1.2)	a:砥面は表面のみ、裏面剥離で不明 両側面切り出し痕 小口は生産地加工痕 b:流紋岩質細粒凝灰岩 c:淡褐色~灰色 g:鳴滝産(葛蒲ヶ谷?) 仕上砥
-27		加工骨用途不明品	(1.9)	(1.8)	(0.7)	a:断面U字形 両端面切断痕 b:鹿骨
-28	第1面遺構29	石製品碗転用不明品	[4.4]	[2.1]	[1.0]	c:灰黒色 g:鳴滝産 碗の内側を鬚状に削る
図7-1	第1面上	かわらけ	(7.7)	(6.1)	1.6	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質気味やや粗土 c:黄褐色 良好 f:1/4
-2		青磁鑄蓮弁文碗				a:ロクロ b:灰色 精良緻密土 d:緑灰色透明釉薬をやや薄く施釉 e:堅緻 f:口縁部小片 g:竜泉窯 大宰府樹Ⅱ-b類
-3		瀬戸入子		(4.0)		a:ロクロ 底部系切り痕 b:黄灰色 砂粒 c:淡黄灰色 e:硬質 f:底部片 g:中期前半
-4		瀬戸卸皿				a:ロクロ 外底部脇~底部にかけてへラケズリ調整 b:灰色 砂粒多 c:灰色 d:底部露胎の為不明 e:硬質 f:底部片 g:中期
-5		鉄製品釘	(3.8)	0.5	0.4	a:断面形状に鑄造 f:片端部欠損 g:錆の付着激しい
-6	第1面構成土	かわらけ	(6.8)	(5.6)	1.7	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・黒色粒・赤色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質やや粗土 c:淡黄褐色 e:良好 f:1/5
-7		かわらけ	7.7	5.1	2.1	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質やや粗土 c:淡黄褐色 e:良好 g:器表面は磨滅 口唇部に油煤痕(灯明皿)
-8		かわらけ転用円盤状土製品	径2.2×厚さ0.8			a:かわらけ底部を転用し、円盤状に削りを施す b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・白色粒を含む砂質土 c:橙色 e:良好
-9		常滑片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・小石粒 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:5型式
-10		常滑片口鉢				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・小石粒を多く含む粗土 c:灰~赤褐色 e:良好・硬質 f:口縁部小片 g:4型式?
-11		瓦器質火鉢				a:輪積み技法 b:灰褐色 微砂・赤色粒多・白色粒 c:灰~灰褐色 e:硬質 f:口縁部片 g:器表内外面共に部分的に剥離 Ⅲ類か?
-12		土器質火鉢				a:輪積み技法 b:橙色 砂粒・白色粒・黒色粒 c:暗灰色 e:硬質 f:口縁部小片 g:1b類

表 1 出土遺物観察表

図版 番号	出土層位 出土遺構	種別	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	観察内容
			単位:cm/():復元値 []:残存値			
図7-13	第1面 構成土	鉄製品 環状金具	3.5	0.4	0.4	a:断面方形形状に鑄造し、頂部は環状に接続 g:錆の付着激しい
		加工骨 用途不明品	[4.5]	[2.4]	0.4	a:断面U字形 先端部2箇所切断痕、表面上部は研磨、裏面は海綿質が残る
図9-1	第2面 遺構30	かわらけ	7.1	5.0	1.7	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母多・白色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質やや粗土 c:黄橙色 e:良好 f:ほぼ完形
-2	第2面 遺構36	土師器 坏				a:内外面横方向のミガキ・赤彩を施す b:微砂・赤色粒・白色粒 c:赤褐色 e:良好 f:口縁部小片 g:比企型
-3		土師器 壺				b:微砂多・黒色粒多・白色粒 c:橙色 e:良好 f:口縁部小片 g:相模型
-4	第2面 遺構37	青磁 鎗蓮弁文碗				a:ロクロ b:灰色 精良緻密土 d:不透明な灰黄緑色釉をやや厚く施釉 細かい貫入・気泡多い e:堅緻 f:胴部小片 g:竜泉窯系 大宰府碗Ⅱ-b類
-5		鉄製品 鉾か	[2.9]	1.1	0.8	a:断面長方形形状に鑄造し、頭頂部を鉾とする g:錆の付着激しい
-6	第2面 遺構41	土師器 盤状坏				a:体部外面下部～底部はヘラケズリ b:微砂・赤色粒 c:橙色 e:良好 f:底部小片 g:体部内面にかすかに放射状暗文あり
図10-1	第2面 面上	青磁 鎗蓮弁文碗				a:ロクロ b:灰色 精良緻密土 d:灰緑色不透明釉をやや薄く施釉 二次焼成の為失透・気泡有り f:胴部小片 g:竜泉窯 大宰府碗Ⅱ-b類
-2		青白磁 碗				a:ロクロ b:灰色 精良緻密土 d:灰緑色透明釉をやや薄く施釉 f:底部小片
-3	第2面 構成土	かわらけ	(8.3)	(5.8)	1.6	a:ロクロ・外底回転系切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む粉質気味やや粗土 c:橙色 e:良好 f:1/4
-4		尾張型 山茶碗				a:ロクロ b:灰色 砂粒・黒色粒・白色粒を含むやや粗土 c:灰色 e:硬質 f:口縁部片 g:第6～7型式
-5		尾張型 山茶碗				a:ロクロ b:灰色 砂粒・黒色粒・白色粒を含むやや粗土 c:灰色 e:硬質 f:口縁部片 g:第6～7型式
-6		尾張型 山茶碗				a:ロクロ b:灰色 砂粒・黒色粒・白色粒を含むやや粗土 c:灰色 e:硬質 f:口縁部片 g:6～7型式
-7		常滑 片口鉢Ⅰ類				a:輪積み技法 b:灰色 微砂・白色粒・黒色粒・長石 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:6a型式
-8		常滑 片口鉢Ⅱ類				a:輪積み技法 b:灰色 砂粒・白色粒・小石粒 c:灰色 e:良好・硬質 f:口縁部片 g:6a型式
-9		須恵器 蓋				a:ロクロ 体部内外面回転ナデ b:灰色 砂粒・白色粒を含むやや粗土 c:暗灰色 e:良好・硬質 f:器表内面はあれている
-10		土師器 壺				a:輪積み技法 内外面ヨコナデ b:微砂・黒色粒・白色粒・小石粒 c:橙色 e:良好 f:口縁部小片 g:相模型
-11		土師器 壺				a:輪積み技法 内外面ヨコナデ b:微砂・黒色粒・白色粒・小石粒 c:橙色 e:良好 f:口縁部小片 g:相模型
-12		土師器 壺				a:輪積み技法 内外面ヨコナデ b:微砂・黒色粒・白色粒・小石粒 c:橙色 e:良好 f:口縁部小片 g:相模型
-13		土師器 台付壺				a:輪積み技法 内外面ヨコナデ? b:微砂・黒色粒・白色粒・小石粒 c:灰褐色 e:良好 f:脚部片
-14	表土	青白磁 梅瓶蓋				a:型作り b:灰白色 精良緻密土 d:水色透明釉を薄く施釉 貫入有り e:堅緻 f:1/5 g:頂部の文様不明
-15		男瓦			1.8	a:凹面布目叩き 凸面縦位ナデ 側縁をヘラケズリで2面の面取り b:灰白色 砂粒・小石粒を含む粗土 c:灰白～灰黒色(凸面のみ炭素吸着?) e:硬質 f:側縁部小片 g:永福寺Ⅲ期?
-16		鉄製品 釘	5.3	0.4	0.3	a:断面方形形状に鑄造 f:先端部欠損 g:錆の付着激しい
-17		鉄製品 釘	8.5	0.5	0.3	a:断面方形形状に鑄造 f:先端部欠損 g:錆の付着激しい

表2 遺物破片数表

		第1面 遺構	第1面 遺構外	第2面 遺構	第2面 遺構外	表土 攪乱	合計	%		
かわらけ	糸・大	577	207	42	71	108	1005	74.3		
	糸・小	32	9	6	3	5	55	4.1		
	手・大	1	4				5	0.4		
	転用品 (磨り・円盤状)	2	1		1	1	5	0.4		
舶載陶磁器	青磁	蓮弁文碗	1	1	1	2	5	0.4		
		折腰鉢		1			1	0.1		
		器種不明				1	1	2	0.1	
	青白磁	碗			1		1	0.1		
	梅瓶・蓋					1	1	0.1		
国産陶器	瀬戸	瓶子	1				1	0.1		
		折縁皿	1	1			2	0.1		
		卸皿		1				1	0.1	
		皿		1				1	0.1	
	常滑	甕	24	5	1	1	10	41	3.0	
		壺	1					1	0.1	
		片口鉢Ⅰ類	3	1		1	1	6	0.4	
		片口鉢Ⅱ類	5			1		6	0.4	
		片口碗		1				1	0.1	
	山茶碗	1			6		7	0.5		
備前	擂鉢	1					1	0.1		
土器・ 土製品類	火鉢	土器質	1	2			3	0.2		
		瓦器質	3	1				4	0.3	
	瓦	男瓦					1	1	0.1	
		鏡瓦	1					1	0.1	
	不明土器	1	1				2	0.1		
石製品	滑石	鍋		1			1	0.1		
		転用途中品	1					1	0.1	
	砥石	仕上砥	1					1	0.1	
	硯	転用品	1					1	0.1	
	チャート			2	1		3	0.2		
金属製品	鉄釘	4	1			2	7	0.5		
	その他		1	1			2	0.1		
骨角製品	筭	1					1	0.1		
	用途不明加工骨	5	3				8	0.6		
自然遺物	獣骨		9	2		2	3	16	1.2	
	貝	巻貝	マダカアワビ	1				1	0.1	
			アワビ系	2			2		4	0.3
			イボキサゴ	3			1		4	0.3
			キサゴ	2	4				6	0.4
			ダンベイキサゴ	11	2		5	1	19	1.4
			サザエ	11	1	2	4		18	1.3
			サザエ蓋	4					4	0.3
			イボウミナ	1	2				3	0.2
			ツメタガイ	2	4		2		8	0.6
			アカニシ	5	3	1	1		10	0.7
	バイ	2	1		1		4	0.3		
	一枚貝	サトウガイ	1	1				2	0.1	
		サルボウガイ		1		1		2	0.1	
		マガキ	1	5		0		6	0.4	
		チョウセンハマグリ	12	2	1	9	1	25	1.8	
		ハマグリ	6		2	1		9	0.7	
		不明					1	1	0.1	
中世以前	土師器	甕	4	2	1	4	1	12	0.9	
		台付甕				1		1	0.1	
		杯	1		3			4	0.3	
	器種不明	1	4		1	1	7	0.5		
	須恵器	甕	1					1	0.1	
		蓋				1		1	0.1	
弥生式	台付甕			1			1	0.1		
合計	合計	749	277	65	124	138	1353	100.0		
%	%	55.4	20.5	4.8	9.2	10.2	100.0			

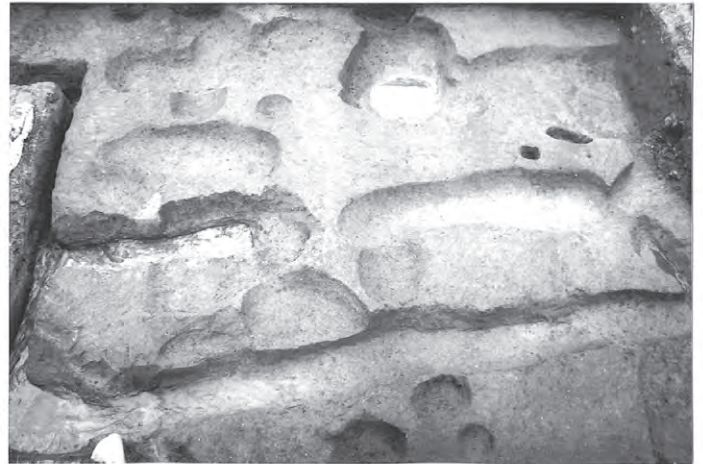
表 3 遺構計測表 (単位：cm)

遺構No.	長径	短径	深さ	遺構No.	長径	短径	深さ
1	(150)	136	20	22	164	(85)	14
2	153	116	28	23	(190)	50	43
3	(30)	(7)	—	24	158	(70)	15
4	247	50	11	25	(35)	(30)	20
5	115	(65)	22	26	(55)	42	15
6	42	35	27	27	(450)	45~55	15~25
7	(40)	45	12	28	45	30	12
8	70	52	23	29	75	(33)	25
9	(60)	70	20	30	(155)	25	30
10	83	74	17	31	45	38	7
11	(30)	32	5	32	(100)	48	20
12	70	(64)	18	33	130	114	23
13	50	(20)	9	34	25	20	—
14	(50)	53	16	35	20	20	—
15	32	28	10	36	190	(63)	50
16	(52)	50	13	37	58	57	5
17	58	37	11	38	(31)	36	8
18	125	95	20	39	32	30	18
19	(90)	(85)	10	40	31	25	9
20	(50)	70	20	41	(94)	(83)	24
21	24	24	5				

※調査区外に遺構が延びていたもの、他の遺構に切られていたものに関しては、遺存値を()で表記した。



第1面全景（西から）



第1面全景（東から）



第2面全景（西から）

第3面全景（西から）



図版2



調査区北壁（南から）



調査区西壁（東から）



調査区東壁（西から）

調査地点近景（南から）

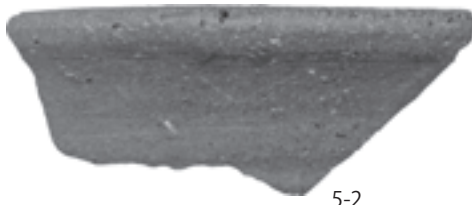


▼第1面



5-1

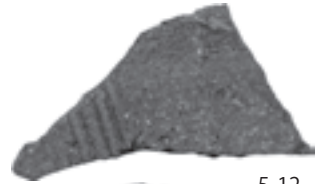
△遺構 1



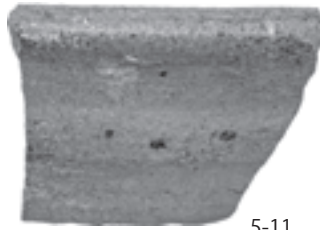
5-2



5-9



5-12



5-11



5-13

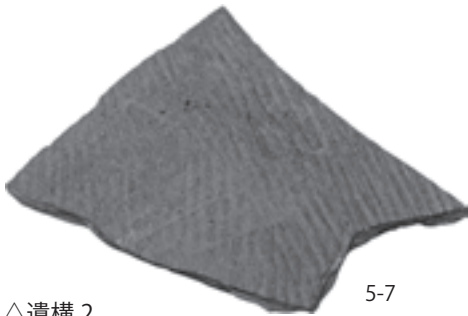


5-3



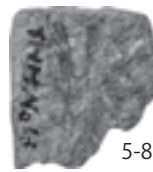
5-4

△遺構 5



5-7

△遺構 2



5-8

△遺構 4



5-15

△遺構 12



5-17

△遺構 16



5-18



5-14

△遺構 8



6-19

△遺構 18



6-22



6-23

△遺構 27



6-25



6-26



6-27



6-28

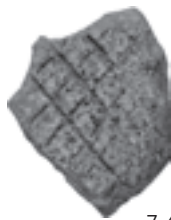


7-1

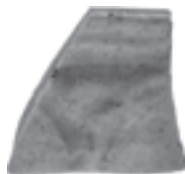


7-3

△面上



7-4



7-2



7-6



7-7



7-8



△骨 (写真のみ)



7-10

△構成土



7-11



7-13



7-14

図版4

▼第2面



9-1

△遺構 30



9-2

△遺構 36



9-3



9-5

△遺構 37



10-2

△面上



10-3



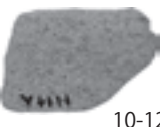
10-5



10-7



10-9



10-12



10-13

△構成土



10-14

△表土



10-15



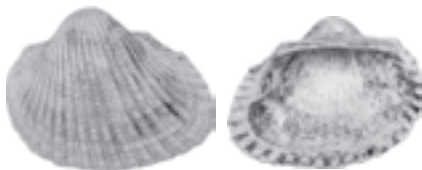
10-16

9-17

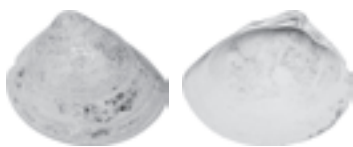
▼出土貝各種(一部)



サトウガイ



サルボウガイ



ハマグリ



チョウセンハマグリ



キサゴ



イボキサゴ



ダンベイキサゴ



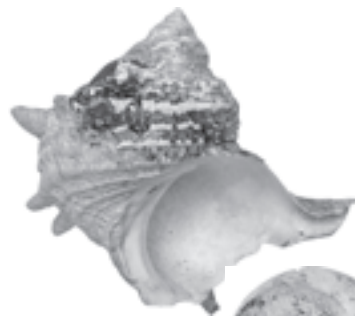
シメタガイ



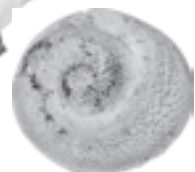
バイガイ



イボウミニナ



サザエ



今小路西遺跡 (No.201)

由比ガ浜一丁目 134 番 4 地点

例 言

1. 本報告は鎌倉市由比ガ浜一丁目 134 番 4 地点において実施した「今小路西遺跡（神奈川県遺跡台帳No. 201）」の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 20 年 10 月 17 日から同年 11 月 10 日にかけて、個人住宅建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は 48m²である。
3. 発掘調査体制は以下の通りである。

担当者	伊丹まどか
調査員	岡田慶子・吉田桂子
作業員	赤坂進・清水政利・中須洋二・沼上美代治
測量	須佐直子・須佐仁和

4. 本報作成体制は以下の通りである。

遺物実測	吉田桂子・渡邊美佐子
遺物図版	渡邊美佐子
遺構図版	吉田桂子
遺物観察表	吉田桂子
破片数表	清水由加里
遺構写真	伊丹まどか
遺物写真	須佐仁和
写真図版	榎岡ケイト
グリッド図	榎岡ケイト
執筆・編集	伊丹まどか・渡邊美佐子

5. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が管理・保存している。
6. 本報図版の遺構・遺物の縮尺は以下の通り。
遺構全測図：1/40 実測遺物：1/3 銭：1/1
7. ・実測遺物は可能な限り復元して実測したが、紙面の都合からすべての実測図を掲載していない。
また、遺物に関する詳細は観察表にまとめて掲載している。
 - ・ 復原して実測した遺物は、計測値に（ ）を付して表している。
 - ・ 文章中で「かわらけ」と記載したものはロクロ成形のかわらけを指し、手づくね成形のかわらけは「手づくね」と記載している。
 - ・ それぞれの陶磁器に関しては。生産地での編年を参考に観察表にその年代を示したが、破片の為に不安の残るものは割愛した。常滑は中野晴久氏、瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年に基づいて分類した。

目 次

第一章 遺跡の概要	201
1. 歴史的環境	
2. 遺跡位置とグリッド配置図	
3. 堆積土層	
第二章 発見された遺構と遺物	204
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
第三章 調査成果	209
遺物観察表	
破片遺物集計表	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	198
図2 グリッド設定図	202
図3 第1面・第2面全測図 調査区壁土層図	203
図4 第1面遺構2・遺構6・遺構7・8・第1面構成土出土遺物(1)	206
図5 第1面構成土(2)・第2面遺構9・第2面面上出土遺物	207
図6 表土出土遺物	208

図版目次

図版1 第1面・第2面全景 第1面遺構6かわらけ出土状況	215
図版2 第1面出土遺物	216
図版3 第2面・表土出土遺物	217
図版4 表土出土遺物	218

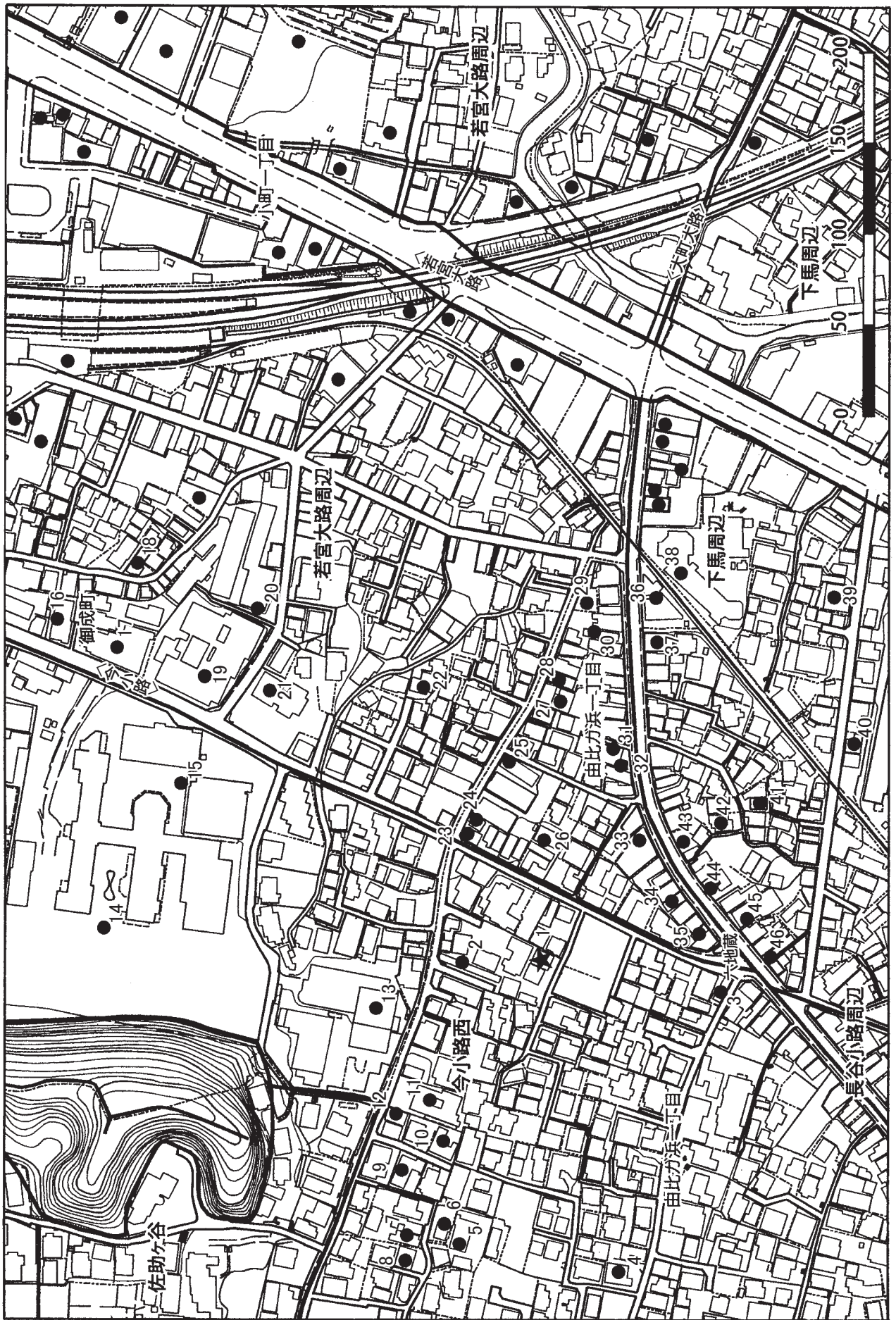


図1 調査地点と周辺の遺跡

一今小路西遺跡一①本調査地点 由比ガ浜一丁目 134 番 4 ②由比ガ浜一丁目 136 番 1[2008 宮田眞]2011 宮田・滝沢晶子【今小路西遺跡 (No. 201) 発掘調査報告書】(株)博通 ③由比ガ浜一丁目 183 番 1[2000 汐見一夫]2000 汐見【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-2】鎌倉市教育委員会 ④由比ガ浜一丁目 165 番 2[2008 齋木]2012 鯉淵義紀・降矢順子【鎌倉遺跡調査会調査報告書 74 集】(有)鎌倉遺跡調査会 ⑤由比ガ浜一丁目 147 番 1[2007 齋木]2012 齋木・鯉淵【神奈川県埋蔵文化財調査報告書 54】神奈川県教育委員会 ⑥由比ガ浜一丁目 147 番 2 外 [2007 原廣志]2009 原【神奈川県埋蔵文化財調査報告書 54】神奈川県教育委員会 ⑦由比ガ浜一丁目 151 番 1[2007 熊谷満]2011 熊谷・降矢【鎌倉遺跡調査会調査報告書 67】(有)鎌倉遺跡調査会 ⑧由比ガ浜一丁目 157 番 7 外 [2005・2006 馬淵和雄]2012 馬淵・沖本道・根元志保【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28-2】鎌倉市教育委員会 ⑨由比ガ浜一丁目 148 番 11[1983 赤星直忠]1984 赤星【神奈川県埋蔵文化財調査報告 26】神奈川県教育委員会 ⑩由比ガ浜一丁目 148 番 5[2001 宮田]宮田・滝沢【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20-1】鎌倉市教育委員会 ⑪由比ガ浜一丁目 141 番 5 外 [2006 小林義典]2007 香川達郎【今小路西遺跡発掘調査報告書】玉川文化財研究所 ⑫由比ガ浜一丁目 148 番 1[2000 野本賢二]2002 野本【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-1】鎌倉市教育委員会 ⑬御成町 625 番 2[1989 河野眞知郎]1993 河野・清水菜穂ほか【今小路西遺跡発掘調査報告書】鎌倉市教育委員会 ⑭御成町 625 番 3[1984・1985 河野]1990 河野・宮田ほか【今小路西遺跡 (御成小学校内) 発掘調査報告書】今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 ⑮御成町 625 番 3[1991・1992 河野・宮田]1993 河野【今小路西遺跡 (御成小学校内) 第 5 次発掘調査概報】今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会

一若宮大路周辺遺跡群一

⑯御成町 788 番 6[2013 齋木]2015 齋木【神奈川県埋蔵文化財調査報告書 60】神奈川県教育委員会 ⑰御成町 786 番 1[1999 齋木]2002 齋木・降矢順子【鎌倉遺跡調査会調査報告書 25】若宮大路周辺遺跡群発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 ⑱御成町 792 番 3・16[2011 齋木]2015 齋木【鎌倉遺跡調査会調査報告書 94】(有)鎌倉遺跡調査会 ⑲御成町 783 番 1 外 [2005 齋木]2009 齋木・降矢・押木弘己【鎌倉遺跡調査会調査報告書 59】(有)鎌倉遺跡調査会 ⑳御成町 778 番 1[1988 田代]1989 田代【神奈川県埋蔵文化財調査報告 31】神奈川県教育委員会 ㉑御成町 763 番 5[2007 齋木]2011 齋木・降矢【鎌倉遺跡調査会調査報告 68】(有)鎌倉遺跡調査会 ㉒御成町 727 番 12・19[1990 木村美代次]1992 木村【神奈川県埋蔵文化財調査報告 34】神奈川県教育委員会 ㉓由比ガ浜一丁目 126 番 1[2005 齋木]2009 熊谷満【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-2】鎌倉市教育委員会 ㉔由比ガ浜一丁目 126 番 11[2005 齋木]2009 熊谷【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-2】鎌倉市教育委員会 ㉕由比ガ浜一丁目 123 番 5[1994 馬淵]1995 馬淵【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11-1】鎌倉市教育委員会 ㉖由比ガ浜一丁目 127 番 1[2003 田代郁夫]2006 宗臺ほか【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22-2】鎌倉市教育委員会 ㉗由比ガ浜一丁目 118 番 [1987・1988 馬淵]1995 馬淵【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11-1】鎌倉市教育委員会 ㉘由比ガ浜一丁目 118 番 7[1995 田代]1997 遠藤雅一【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13-2】鎌倉市教育委員会 ㉙由比ガ浜一丁目 116 番 9[2011 齋木]2015 齋木【鎌倉遺跡調査会調査報告書 93】(有)鎌倉遺跡調査会 ㉚由比ガ浜一丁目 117 番 1[1988 齋木]1991 齋木・汐見【由比ガ浜 1-117-1 地点遺跡】若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 ㉛由比ガ浜一丁目 120 番 2・14[2008 齋木]2012 降矢・齋木【若宮大路周辺遺跡群遺跡調査会 81 集】(有)鎌倉遺跡調査会 ㉜由比ガ浜一丁目 120 番 6[1991・1992 原]1993 原【神奈川県埋蔵文化財調査報告 35】神奈川県教育委員会 ㉝由比ガ浜一丁目 128 番 7[1986 馬淵]1988 馬淵【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4-2】鎌倉市教育委員会 ㉞由比ガ浜一丁目 128 番 21[2013 宮田]2015 宮田・滝沢晶子【神奈川県埋蔵文化財調査報告 60】神奈川県教育委員会 ㉟由比ガ浜一丁目 129 番 5[1993 宮田]1995 清水菜穂【若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書】若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

一下馬周辺遺跡一⑳由比ガ浜二丁目 18 番 12[1990 宗臺秀明]1992 宗臺・宗臺富貴子【下馬周辺遺跡】下馬周辺遺跡発掘調査団 ㉑由比ガ浜二丁目 19 番 1[2006 馬淵]2013 馬淵・沖元・根本【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-1】鎌倉市教育委員会 ㉒由比ガ浜二丁目 18 番 1[2001 田代]2003 田代・汐見【神奈川県埋蔵文化財調査報告 45】神奈川県教育委員会 ㉓由比ガ浜二丁目 27 番 9[1988 田代]1990 田代【神奈川県埋蔵文化財調査報告 32】神奈川県教育委員会 ㉔由比ガ浜二丁目 39 番 14[2004 原]2010 原【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26-1】鎌倉市教育委員会 ㉕由比ガ浜二丁目 54 番 15[2008 伊丹まどか]2010 伊丹【神奈川県埋蔵文化財調査報告 55】神奈川県教育委員会 ㉖由比ガ浜二丁目 110 番 5[1999 菊川英政]2001 菊川・小林重子【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-1】鎌倉市教育委員会

⑬由比ガ浜二丁目 113 番 5 外 [2009 伊丹]2011 伊丹【神奈川県埋蔵文化財調査報告 56】神奈川県教育委員会 ⑭由比ガ浜二丁目 107 番 5[2007 福田誠]2009 鈴木絵美【神奈川県埋蔵文化財調査報告書 54】神奈川県教育委員会 ⑮由比ガ浜二丁目 107 番 1[1995 馬淵]1997 汐見・川又隆央ほか【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13-2】鎌倉市教育委員会 ⑯由比ガ浜二丁目 106 番 6・7[2000 汐見]2002 汐見・田畑衣理【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-1】鎌倉市教育委員会

註

・[]内の年号は調査年・氏名は担当者名。以下の年号は報告書刊行年・氏名は編・著者名。

第一章 遺跡の概要

1. 歴史的環境 (図 1)

本調査地が位置する今小路西遺跡は、JR 鎌倉駅西に南北に走る道路の西側に細長く広がる遺跡地である。この道路は鎌倉市街地の中心を南北に走る若宮大路と並行するように走り、北は寿福寺辺りから南は六地蔵の間が「今小路」と呼称する道であったと考えられ、この道路の西側に広がる遺跡地として「今小路西遺跡」の遺跡名が付された。今小路は寿福寺より北に進むと仮粧坂を通り武蔵の国へとつながる「武蔵大路」と名を変え。南限の六地蔵では現県道 311 号線にぶつかり、東西方向へと道が分かれ、東に進むと「大町大路」、西に進むと「長谷小路」と名を変える。本調査地は今小路西遺跡の南端に位置する。本報告の周辺の遺跡図 (図 1) には今小路西遺跡全範囲を掲載していないが、遺跡指定地北端には木組みの溝が発見され、今小路が側溝を持つ規模の大きな路だった事を裏付けている。また、今小路西遺跡のほぼ真ん中辺り、現御成小学校 (地点 14・15) の地には古代の鎌倉郡衙跡や中世の高級武家屋敷が発見され、その周辺の地点でも大型の武家屋敷群と竪穴建物を発見している。今小路西遺跡南限にある六地蔵の、やや北方右側に鎌倉時代の処刑場があり、長い間耕作もせず荒れていたで「飢渴畠 (けかちばた)」と呼ばれ、そこで処刑された罪人、および刑場跡を弔うために六地蔵が安置されたと伝承されるが、これまでの調査成果からは地点 34 で宝永 4 年 (1707) の富士山降灰層より新しい土坑墓群が発見されただけで、調査地を含む今小路西遺跡の南側は墓域というより町屋的な様相を示している。

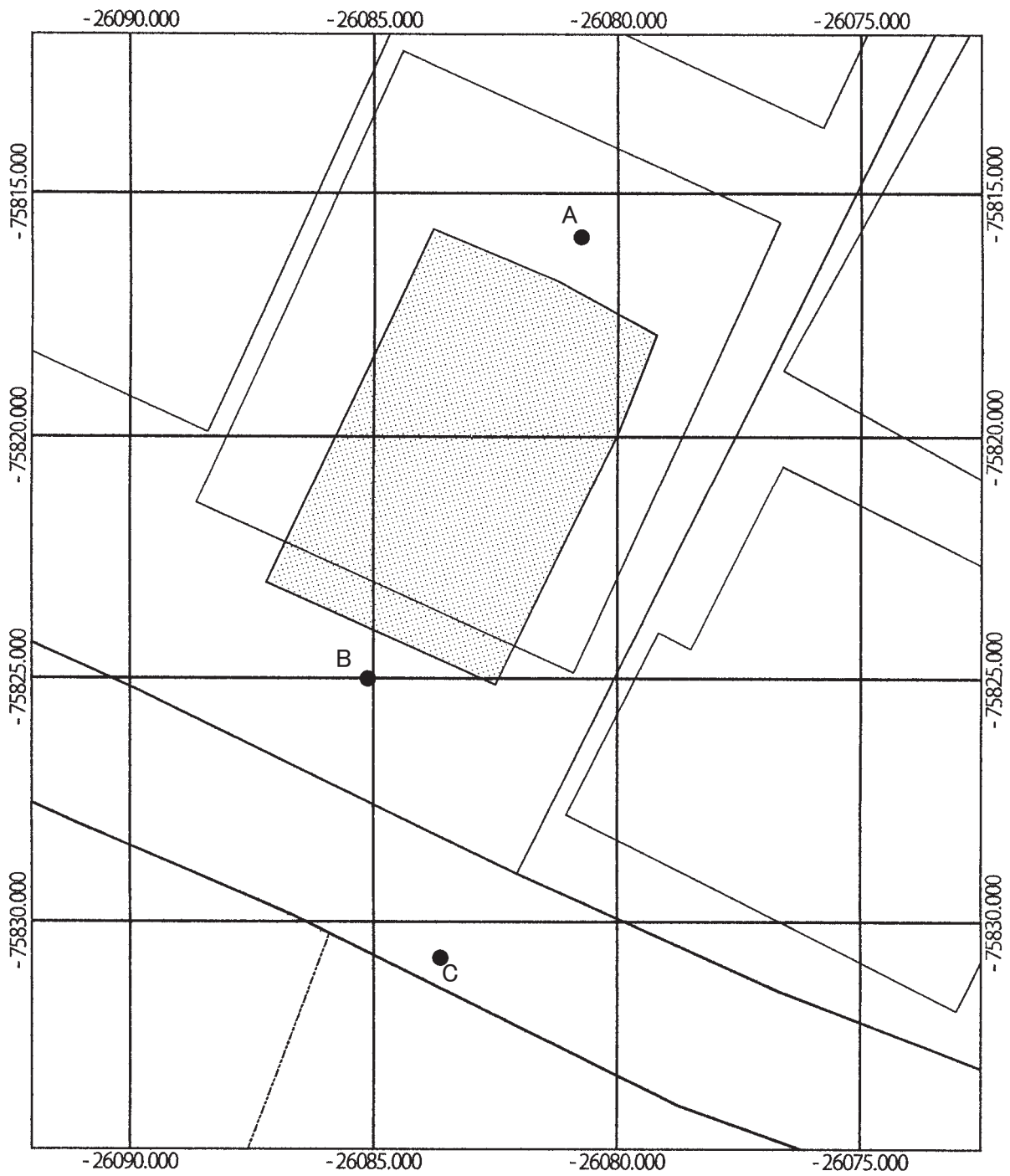
縄文時代前期の海進時、本調査地周辺は海中にあったとされ、縄文時代中期から弥生時代末期まで海退期となり、現在の一の鳥居付近に砂丘を形成していき、鎌倉市街地は約 1m 前後の厚さの泥炭、もしくは粘土層が堆積する後背湿地として陸化していき、調査地周辺は砂泥質平地となる。今小路をはさんで東に現地表の海拔高は下がり調査地周辺では 8.4m 近くの海拔高を示すが、東へ約 250m 行った地点 36 では約 5m の高低差を示し、それは中世基盤層の海拔高にも反映される。

2. 遺跡位置とグリッド配置図 (図 2)

調査開始にあたって調査区に任意の方眼軸を設け、基本点 A と、見返り点 B を設定し遺構の測量・図面作成に使用した。基本点 A と見返り点 B は鎌倉市 4 級基準点成果表に基づき国土座標に倣った座標値の移設を行ったが、調査時の成果表は日本測地系 (座標 AREA9) の国土座標値を使用したため、本報告作成に際しては国土地理院が公開する座標変換ソフト「WEB 版 TKY2JGD」で世界測地系第 IX 形に変換し、図 2 に座標値を表記した。

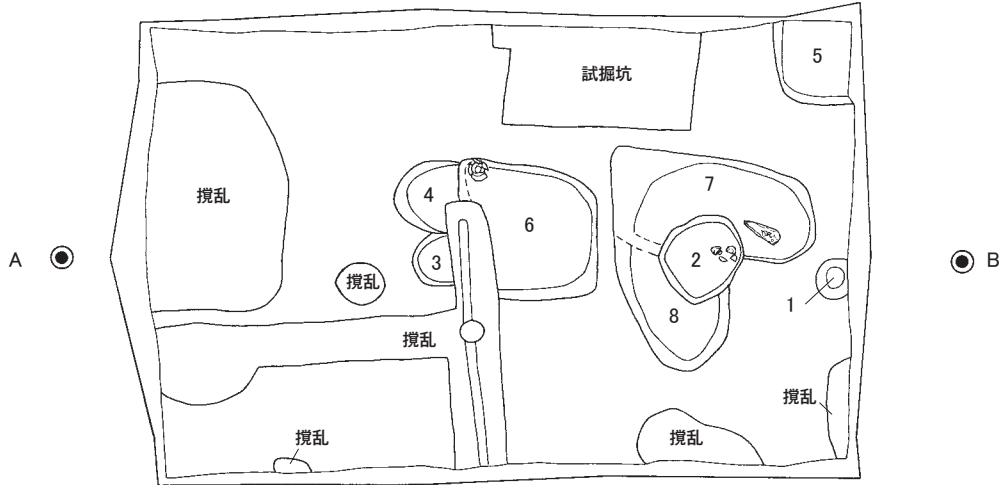
3. 堆積土層 (図 3)

現地表から 60cm～70cm 掘り下げて暗褐色砂質土上で第 1 面を検出したが、上層の近・現代埋土によって第 1 面の遺構上層は大きく削平をうけていた。第 1 面は遺構覆土、構成土ともに炭化物を多く含む。第 2 面は第 1 面の約 20cm 下で確認しているが、掘削深度に制限があり、遺構プランを確認・記録して終了した。



地点	日本測地系		世界測地系	
	X	Y	X	Y
A	-76172.587	-25787.321	-75815.8792	-26080.7509
B	-76181.684	-25791.693	-75824.9757	-26085.1234
C	-76187.475	-25790.192	-75830.7666	-26083.6226

図2 グリッド設定図

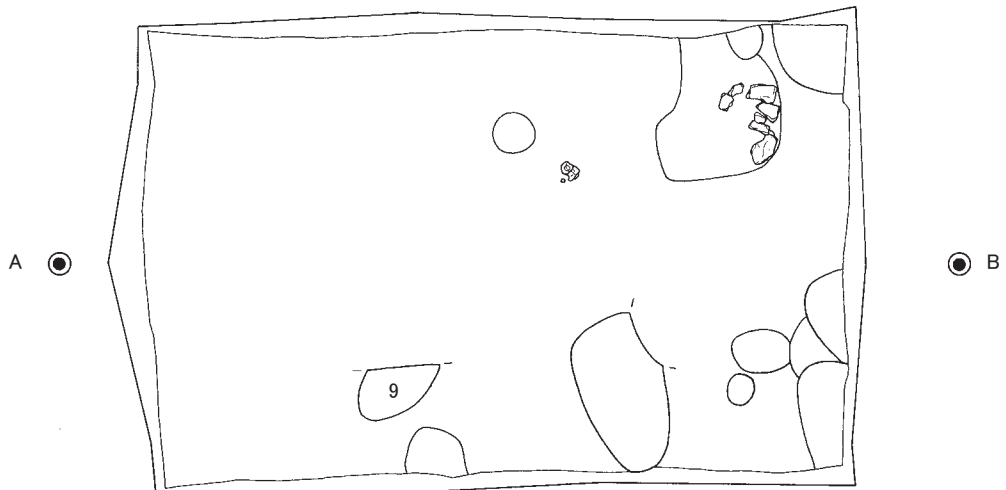


A X-75824.9757
Y-26085.1234

B X-75815.8792
Y-26080.7509

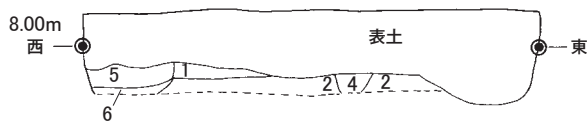
(世界測地系)

第1面全測図



第2面全測図

東壁土層堆積図



1. 暗褐色砂質土 炭化物・泥岩粒・茶褐色砂質土
 2. 暗褐色砂質土 炭化物・泥岩粒・泥岩
 3. 茶褐色砂質土 炭化物・泥岩・茶褐色砂
 4. 暗褐色砂質土 炭化物・泥岩粒・土泥（現代攪乱）
 5. 茶褐色砂質土 炭化物・泥岩粒・焼痕のある泥岩
 6. 明茶褐色砂質土 泥岩粒・灰褐色砂・層状に炭化物が堆積
- <土層注記>



図3 第1面・第2面全測図. 調査区壁土層図

第二章 発見された遺構と遺物

1. 第1面の遺構と遺物（図3～図5）

表土から約70cmを重機によって掘り下げると、本報告で第1面とした暗褐色砂質土層が現れるが、客土を使用した地業層ではなく、近・現代の埋土によって削平を受けた中世生活面の堆積層下層であるため、発見した遺構も遺構底面が残るのみで正確な規模・形状は不明となった。

第1面で発見した遺構は土坑6基・ピット1穴である。個別に遺構図面は掲載していない。

・遺構1（図3）

円形を呈するピットである。長軸45cm・単軸（37cm）・深さ14cmを測る。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物を含む。遺物はかわらけ・鉄製品釘が破片で出土している。

・遺構2（図3）

円形を呈する土坑である。長軸96cm・短軸90cm・深さ（21）cmを測る。遺構覆土は暗褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・泥岩を含む。

・出土遺物（図4）

1～5はかわらけ。6は常滑片口鉢Ⅱ類。7は銭。8は鉄製品釘。9は骨製品筭。その他に常滑甕・土師器甕・獣骨・貝が破片で出土している。

・遺構3（図3）

現代の下水管跡に切られ規模は不明。土坑である。長軸（60）cm・単軸（43）cm・深さ14.5cmを測る。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

・遺構4（図3）

現代の攪乱に切られ規模は不明。土坑である。長軸81cm・単軸（70）cm・深さ13cmを測る。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。遺物はかわらけ・瀬戸壺・常滑甕が破片で出土している。

・遺構5（図3）

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明。土坑である。長軸（94）cm・単軸（84）cm・深さ20cmを測る。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

・遺構6（図3）

現代の下水管跡に切られる。方形を呈する土坑である。長軸（151）cm・短軸152cm・深さ15cmを測る。遺構覆土は暗褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・泥岩を含む。遺構隅でほぼ完形のかわらけ2枚を伏せた状態で発見した（図4-11・12）。

・出土遺物（図4）

10～12はかわらけ。13は青白磁合子。14～15は鉄製品釘・16は鉄製品用途不明。その他に常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・瓦器質火鉢・獣骨・貝が破片で出土している。

・遺構7（図3）

楕円形を呈する土坑である。遺構2に切られる。長軸200cm・単軸（107）cm・深さ26cmを測る。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・黄褐色砂を含む。遺構7と遺構8は遺構掘り上げの際、遺物採集が混乱してしまい両遺構の出土遺物を合わせて採集している。

・遺構8（図3）

楕円形を呈する土坑である。遺構2・遺構7に切られる。長軸（129）cm・短軸111cm・深さ18cmを測る。

遺構覆土は暗褐色砂質土・泥岩粒・炭化物・泥岩を含む。

・遺構 7・8 出土遺物 (図 4)

17 はかわらけ。18・19 は常滑片口鉢Ⅱ類。20 は備前播鉢。21・22 は鉄製品釘。その他に白磁壺・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑加工品・瓦器質火鉢・土師器甕・獣骨・貝が破片で出土している。

・第 1 面構成土出土遺物 (図 4・図 5)

23～29 はかわらけ。29 は口縁部に工具による刻みをいれている・用途不明。30 は青磁鎬蓮弁文碗。31 は白磁口元皿。32 は瀬戸仏華瓶。33 は常滑片口碗。34～39 は常滑甕。40～41 は常滑片口鉢Ⅰ類。42～44 は常滑片口鉢Ⅱ類。45・46 は常滑転用品。47 は瓦器質火鉢。48 は火鉢・胎土不明。49 は伊勢系土鍋。50 は土製品壺。51～54 は砥石。55～57 は鉄製品釘。58 は鉄製品用途不明。59 は骨製品筭。

2. 第 2 面の遺構と遺物 (図 3・図 5)

本調査での掘削深度は現地表から 90cm までと制限があり、第 1 面検出後は深度制限まで掘り下げて下層を確認したが、地業面とは言えず、遺構プランとおぼしきものの輪郭を観察・記録するにとどまった。

・遺構 9 (図 3)

上層の攪乱に切られる。規模・形状は不明。長軸 (73) cm・単軸 (55) cm を確認した。遺構覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。かわらけを 3 点報告しているが、遺構プラン上層で発見しており、第 1 面構成土出土の遺物であった可能性もある。

・出土遺物 (図 5)

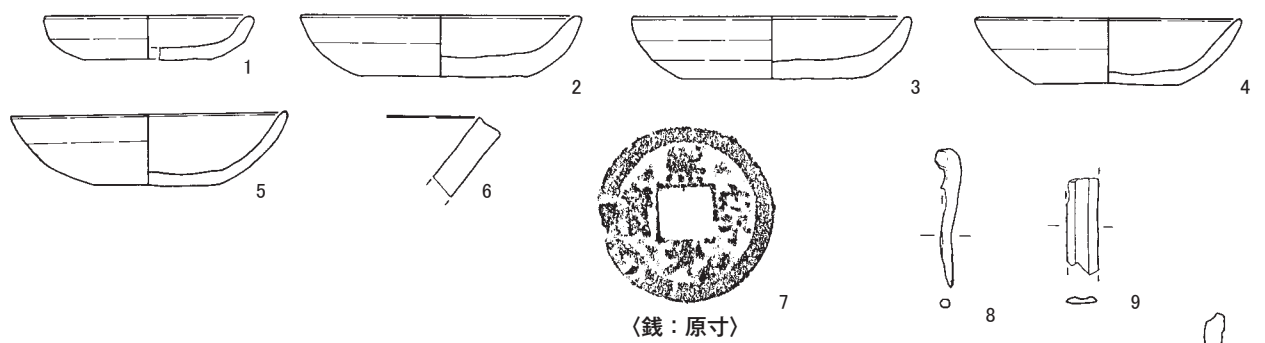
60～62 はかわらけ。

・第 2 面面上出土遺物 (図 5)

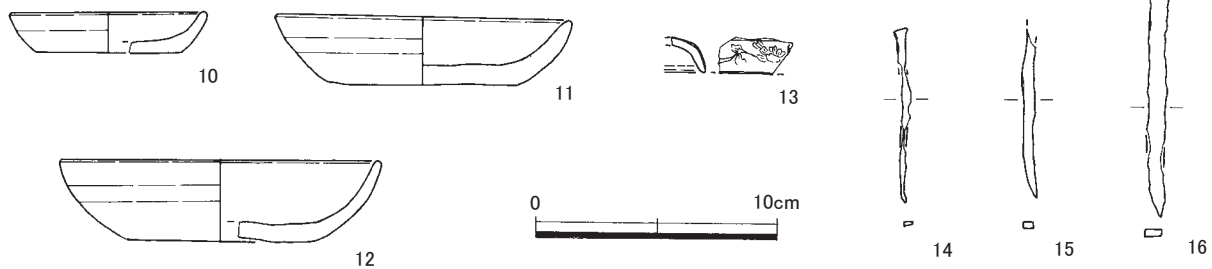
63～70 はかわらけ。71 は白磁口元皿。72 は瀬戸卸皿。73 は瓦器質火鉢。74～77 は鉄製品釘。78 は鉄製品刀子。

・表土出土遺物 (図 6)

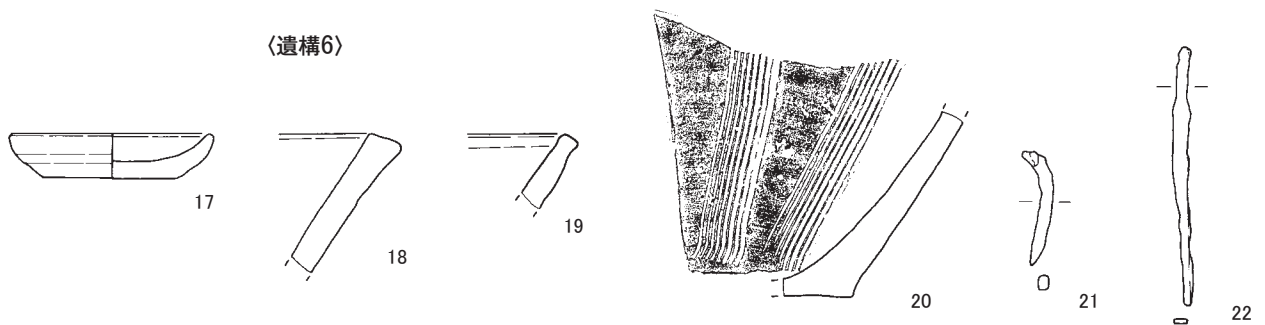
79～88 はかわらけ。89 は青磁劃花文碗。90 は白磁口元皿。91 は青白磁梅瓶。92 は瀬戸折縁皿。93～97 は常滑甕。98～103 は常滑片口鉢Ⅰ類。104～109 は常滑片口鉢Ⅱ類。110～112 は瓦器質火鉢。113 は羽釜。114～116 は石製品砥石。117～119 は鉄製品釘。120 は鉄滓。121 は骨製品筭。122 は須恵器蓋。



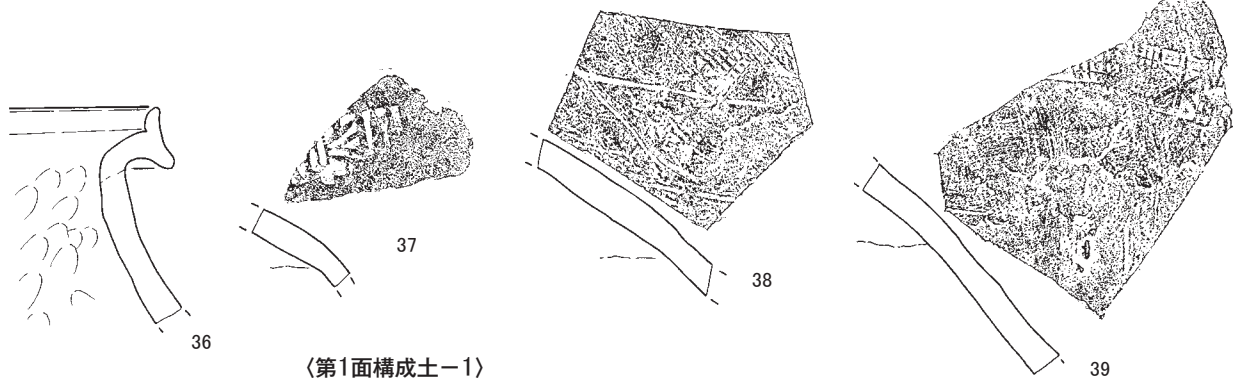
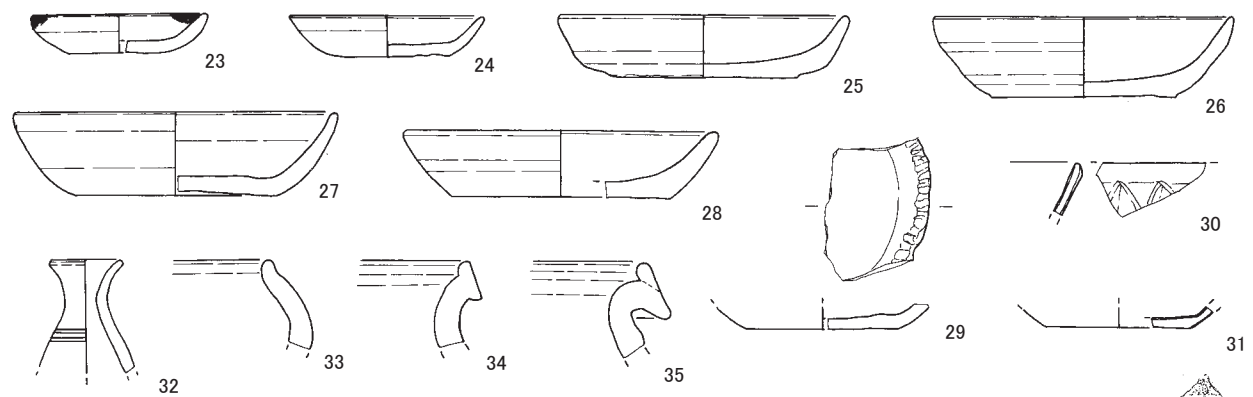
〈遺構2〉



〈遺構6〉

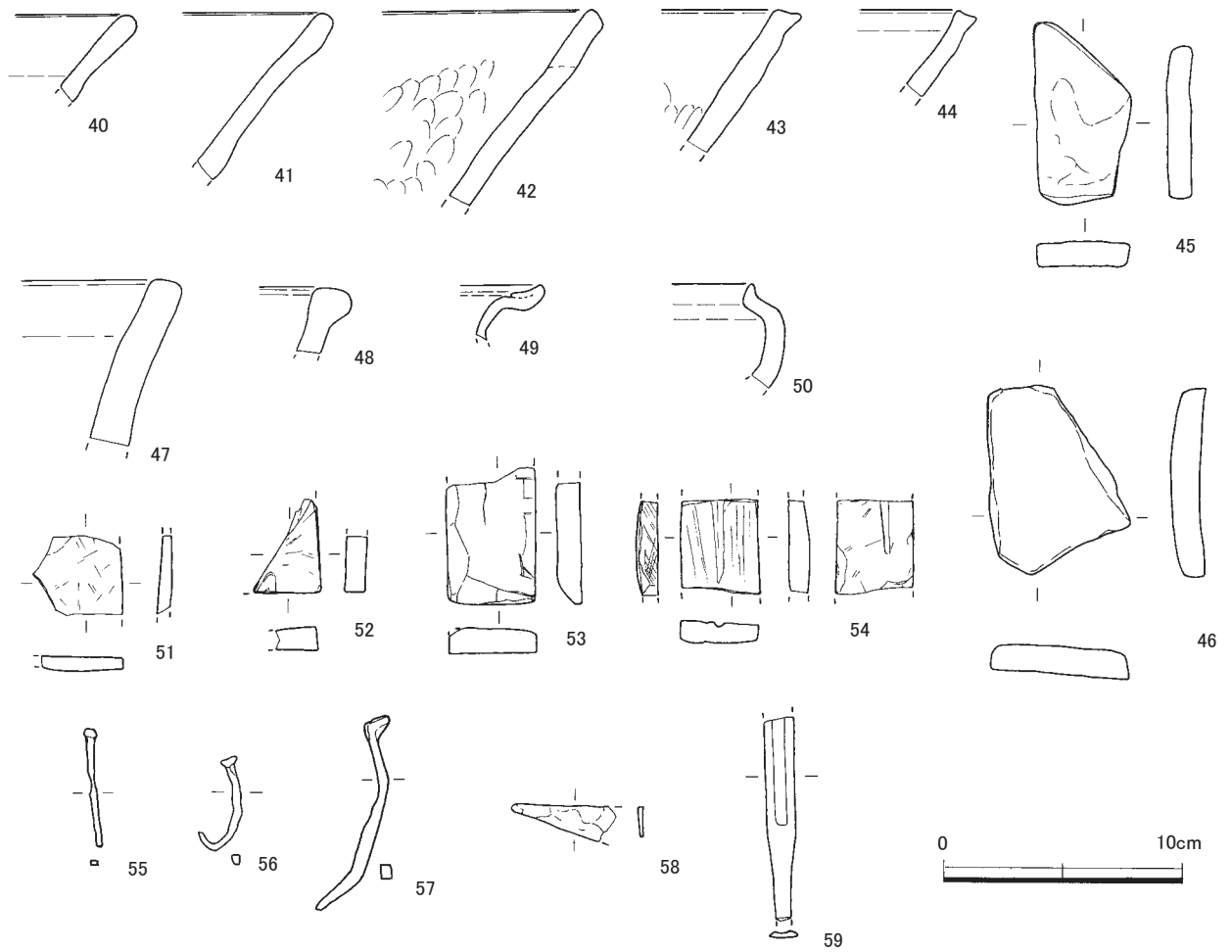


〈遺構7.8〉

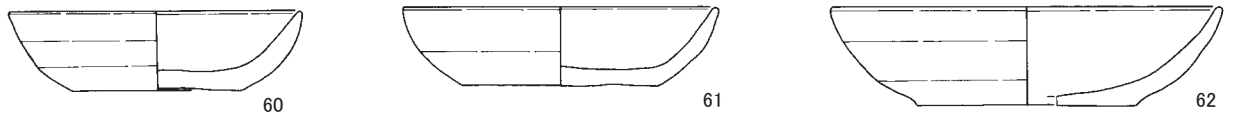


〈第1面構成土-1〉

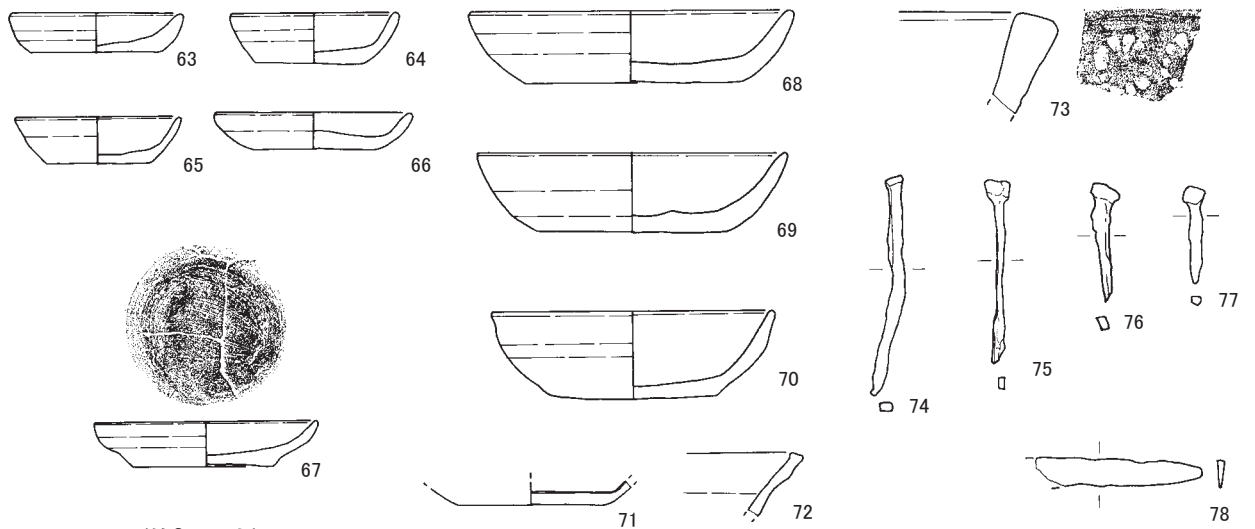
図4 第1面遺構2・遺構6・遺構7・8・第1面構成土出土遺物(1)



〈第1面構成土-2〉



〈遺構9〉



〈第2面面上〉

图5 第1面構成土(2)・第2面遺構9・第2面面上出土遺物

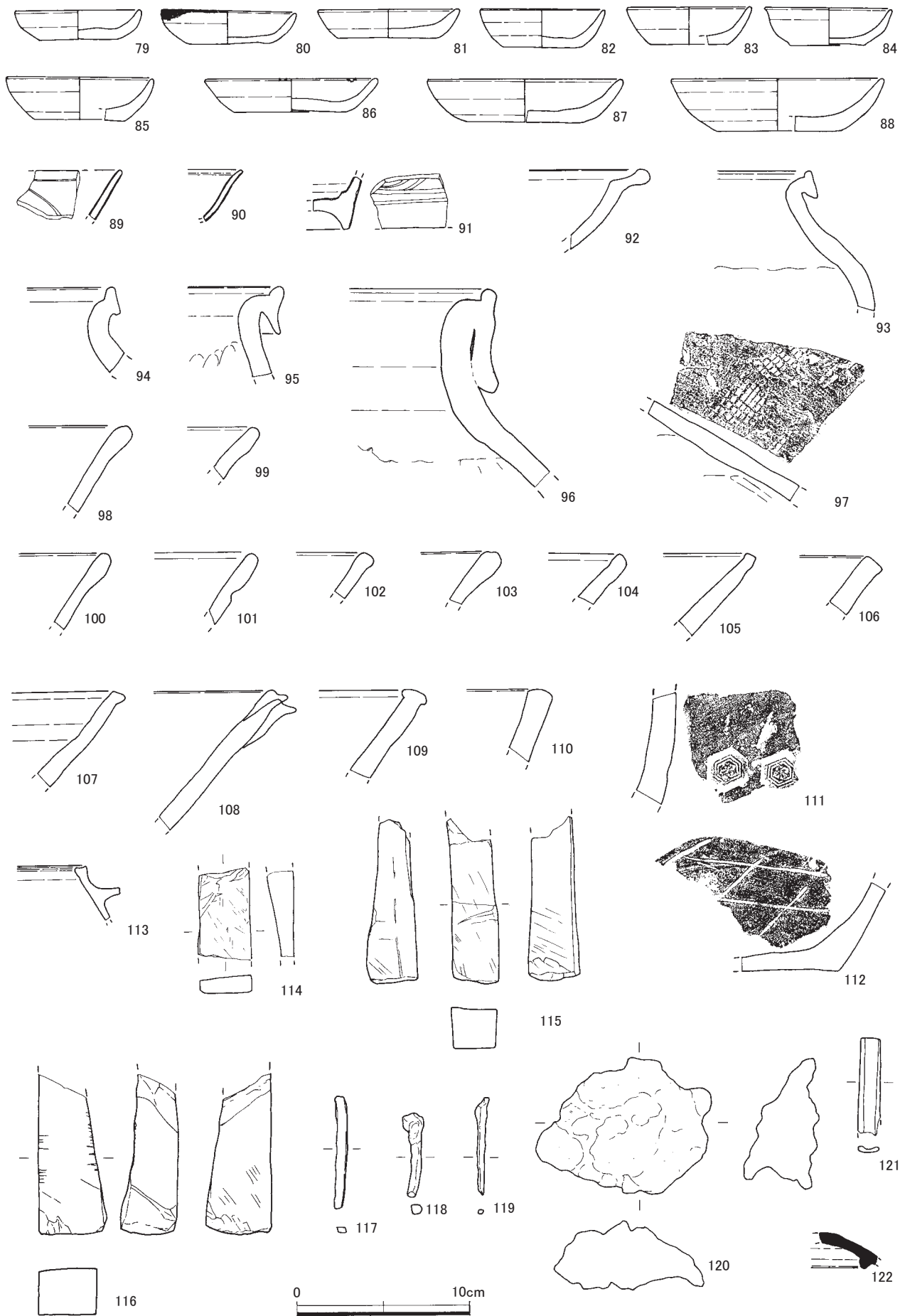


图6 表土出土遺物

第三章 調査成果

前文で述べたように、第1面・第2面共に地業層上で発見した遺構面ではない。第1面は近・現代の埋土を取り除いた遺物包含層上で発見した遺構と遺物であり、第2面は掘削深度制限まで掘り下げた時点で発見した遺構と遺物でありともに調査成果は少ない。調査地東に南北に走る今小路を挟んだ東側辺には鎌倉時代に処刑場があったとされ、本調査地でもそれを裏付ける遺構・遺物の発見を期待したが、処刑場あるいは墓域といった様相は想定できず、発見した遺構は土坑が中心であり、遺物からも調査地の性格を想定することはできなかった。

出土遺物は概ね14世紀から15世紀前半の遺物が出土し、破片ではあるが第1面構成土と、表土から古代遺物が出土している。

<引用・参考文献> (本報分に共通する)

- ・『日本歴史大系 14 巻』 「神奈川県地名」 平凡社 1984 年
- ・『鎌倉市史 総説編』 吉川弘文館 1956 年
- ・『鎌倉市史 考古編』 吉川弘文館 1967 年
- ・『鎌倉事典』 東京堂出版 平成 4 年 白井永二
- ・『中世瀬戸窯の研究』 高志書院 藤澤良祐 2008 年
- ・『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』 愛知県 常滑・中野晴久 2012 年

出土遺物観察表

図版	No.	出土面	遺構No.	器種	口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉調 e. 焼成 f. 遺存値 g. 備考
4	1	1面	遺構2	かわらけ	(8.4)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	2	1面	遺構2	かわらけ	11.3	7.4	3.5	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. ほぼ完形
4	3	1面	遺構2	かわらけ	11.3	7.8	2.5	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 5/6
4	4	1面	遺構2	かわらけ	(10.7)	(6.0)	2.7	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 1/3
4	5	1面	遺構2	かわらけ	11.2	5.4	2.9	a. ロクロ 内底ナデ 回転ナデした後、横ナデ b. 外底部板状圧痕・糸切り痕 c. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 5/6
4	6	1面	遺構2	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 赤褐色 砂粒・白色粒・長石 c. 赤褐色 f. 口縁部小片
4	7	1面	遺構2	銭	外径2.4	孔径0.6		熙寧元寶 初铸年1068年 北宋 真書
4	8	1面	遺構2	鉄製品釘	5.6	0.3	0.3	g. 断面方形
4	9	1面	遺構2	骨製品筭	(3.8)	1.3	0.2	f. 両端部欠損
4	10	1面	遺構6	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.7	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	11	1面	遺構6	かわらけ	12.0	7.8	2.8	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 3/4
4	12	1面	遺構6	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 1/2
4	13	1面	遺構6	青白磁合子	—	—	—	a. 型作り b. 灰白色 精良堅緻密 d. 青白色 f. 蓋部小片
4	14	1面	遺構6	鉄製品釘	7.2	0.3	0.2	g. 断面方形
4	15	1面	遺構6	鉄製品釘	(6.8)	0.4	0.3	f. 上部欠損 g. 断面方形
4	16	1面	遺構6	鉄製品用途不明	12.3	0.7	0.3	g. 断面方形 工具か?
4	17	1面	遺構7.8	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.9	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	18	1面	遺構7.8	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・長石・石英 c. 灰褐色 f. 口縁部片
4	19	1面	遺構7.8	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・白色粒・長石 c. 褐色 f. 口縁部片
4	20	1面	遺構7.8	備前揃鉢	—	—	—	a. 輪積み b. 褐色 砂粒・白色粒・小石粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 7条の条線
4	21	1面	遺構7.8	鉄製品釘	4.9	0.5	0.6	g. 断面方形
4	22	1面	遺構7.8	鉄製品釘	10.6	0.5	0.2	g. 断面方形
4	23	1面構成土	かわらけ	(7.0)	(4.2)	1.6		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4 g. 内外面一部、黒色に変色
4	24	1面構成土	かわらけ	7.9	5.0	1.7		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・白色粒粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 5/6
4	25	1面構成土	かわらけ	(11.8)	(7.8)	2.6		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 4/5
4	26	1面構成土	かわらけ	(12.2)	(7.6)	3.3		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	27	1面構成土	かわらけ	(13.2)	(8.0)	3.4		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	28	1面構成土	かわらけ	(12.6)	(9.0)	2.7		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 1/4
4	29	1面構成土	かわらけ用途不明品	—	(6.2)	—		a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・泥岩粗土 c. 黄橙色 e. 良好 g. 口縁部に工具により刻みをつけている
4	30	1面構成土	青磁鎚蓮弁文碗	—	—	—		a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 不透明 青緑色 厚い f. 口縁部片
4	31	1面構成土	白磁口元皿	—	(6.0)	—		a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 透明 乳白色 薄い f. 底部片
4	32	1面構成土	瀬戸仏華瓶	(2.8)	—	—		a. ロクロ b. 灰白色 砂粒・白色粒 良土 d. 灰緑色 ハケ塗り e. 良好 f. 口縁部～頸部片
4	33	1面構成土	常滑片口碗	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 c. 褐色 f. 口縁部片
4	34	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 褐色 砂粒・小石粒・長石 c. 褐色 f. 口縁部片
4	35	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・黒色粒・長石・石英 c. 黒. 灰色 f. 口縁部片
4	36	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・長石 c. 褐色 f. 口縁部片
4	37	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・・黒色粒・長石・c. 黒褐色 f. 体部片
4	38	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・・黒色粒・長石・石英 c. 褐色 f. 体部片
4	39	1面構成土	常滑壺	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・・黒色粒・長石・石英 c. 褐色 f. 体部片
5	40	1面構成土	常滑片口鉢Ⅰ類	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・黒色粒・長石・石英 c. 灰色 f. 口縁部片
5	41	1面構成土	常滑片口鉢Ⅰ類	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・長石・石英 c. 灰色 f. 口縁部片
5	42	1面構成土	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・長石・石英 c. 褐色 f. 口縁部片
5	43	1面構成土	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒・石英 c. 褐色 f. 口縁部片
5	44	1面構成土	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	—		a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・小石粒・長石・石英 c. 褐色 f. 口縁部片

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版	No.	出土面	遺構No.	器種	口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉調 e. 焼成 f. 遺存値 g. 備考
5	45	1面構成土		常滑 転用品	6.5	3.8	1.0	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石 c. 灰褐色 g. 断面摩耗・平面部分的に摩耗
5	46	1面構成土		常滑 転用品	7.8	5.9	1.2	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石 c. 灰褐色 g. 断面摩耗・平面部分的に摩耗
5	47	1面構成土		瓦器質 火鉢	—	—	—	a. 輪積みロクロ整形 内面 横位ミガキ 内面 口縁部片黒色処理 b. 灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 c. 灰黒色 e. 良好 f. 口縁部片 g. 河野編年Ⅲ類 輪花型
5	48	1面構成土		火鉢	—	—	—	a. 輪積みロクロ整形 b. 褐色 砂粒・白色粒・泥岩 c. 赤褐色 f. 口縁部片 g. 内外面 火熱を受けて器壁剥離 河野編年Ⅱ類に似ているが、胎土は、土器質に似る
5	49	1面構成土		伊勢系 土鍋	—	—	—	b. 灰黒色 雲母・白色粒 c. 黄灰色
5	50	1面構成土		土製品 壺	—	—	—	b. 微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒やや粗土 c. 橙色 e. 良好
5	51	1面構成土		石製品 砥石	(3.3)	3.7	0.5	a. 砥面1面 小口切り出し痕 裏面剥離 c. 黄灰色 g. 仕上砥 鳴滝産
5	52	1面構成土		石製品 砥石	(3.8)	2.8	1.0	a. 砥面1面 側面・小口切り出し痕 c. 黄灰色 g. 仕上砥 鳴滝産
5	53	1面構成土		石製品 砥石	(5.2)	3.7	1.0	a. 砥面1面 側面切り出し痕 c. 黄灰色 g. 仕上砥 鳴滝産
5	54	1面構成土		石製品 砥石	(3.8)	3.3	0.8	a. 砥面2面 側面切り出し痕 c. 黄灰色 g. 仕上砥 鳴滝産
5	55	1面構成土		鉄製品 釘	5.0	0.3	0.2	g. 断面方形
5	56	1面構成土		鉄製品 釘	5.1	0.3	0.3	g. 断面方形
5	57	1面構成土		鉄製品 釘	9.1	0.4	0.6	g. 断面方形
5	58	1面構成土		鉄製品 用途不明	(4.2)	1.2	0.2	f. 残存率不明 g. 工具か?
5	59	1面構成土		骨製品 筭	(8.3)	1.3	0.3	f. 両端部欠損 残存率不明
5	60	2面	遺構9	かわらけ	11.9	7.0	3.2	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 完形
5	61	2面	遺構9	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.2	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 4/5
5	62	2面	遺構9	かわらけ	(15.8)	(9.0)	4.0	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 3/5
5	63	2面	面上	かわらけ	(6.8)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い f. 1/3
5	64	2面	面上	かわらけ	6.8	4.5	2.1	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 5/6
5	65	2面	面上	かわらけ	6.7	4.3	1.9	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. ほぼ完形
5	66	2面	面上	かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.5	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 1/3
5	67	2面	面上	かわらけ	9.0	5.7	1.9	a. ロクロ 内底部 横ナデ、へら状工具によるナデか? 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. ほぼ完形
5	68	2面	面上	かわらけ	(13.1)	(9.0)	2.9	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 4/5
5	69	2面	面上	かわらけ	(12.6)	(8.0)	3.2	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 4/5
5	70	2面	面上	かわらけ	(11.4)	(7.0)	3.6	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 3/5
5	71	2面	面上	白磁 口元皿	—	(6.0)	—	a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 透明 g. 底部露胎
5	72	2面	面上	瀬戸 煎戸	—	—	—	a. ロクロ b. 黄灰色 砂粒・白色粒 良土 d. 灰白色 漬けがけ e. 良好 f. 口縁部 g. 藤澤編年 中期Ⅱ
5	73	2面	面上	瓦器質 火鉢	—	—	—	a. 輪積み ロクロ整形 内面横位のへら磨き b. 灰褐色 砂粒・白色粒・海綿骨芯 c. 黒色に処理 e. 良好 f. 口縁部片 g. 河野編年Ⅲ類 外面に菊花文スタンプあり
5	74	2面	面上	鉄製品 釘	10.2	0.5	0.3	g. 断面方形
5	75	2面	面上	鉄製品 釘	7.4	0.3	0.5	g. 断面方形
5	76	2面	面上	鉄製品 釘	4.9	0.4	0.5	g. 断面方形
5	77	2面	面上	鉄製品 釘	4.0	0.4	0.4	g. 断面方形
5	78	2面	面上	鉄製品 刀子	(6.8)	1.2	0.1~0.3	f. 刀身部
6	79	表土	かわらけ	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.8	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母 やや粗土 f. 1/4 g. 内面と外側面一部が黒色に変色
6	80	表土	かわらけ	かわらけ	7.7	4.8	1.9	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 5/6 g. 口唇部全体に油煤痕あり
6	81	表土	かわらけ	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 1/4
6	82	表土	かわらけ	かわらけ	(7.0)	(4.6)	2.2	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 2/3
6	83	表土	かわらけ	かわらけ	(7.0)	4.4	2.1	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 1/4 g. 口唇部一部 黒色に変色
6	84	表土	かわらけ	かわらけ	7.2	4.3	2.2	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・小石粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 5/6
6	85	表土	かわらけ	かわらけ	(8.4)	(5.3)	2.4	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨芯・泥岩粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 1/4

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版	No.	出土面	遺構No.	器種	口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉調 e. 焼成 f. 遺存値 g. 備考
6	86		表土	かわらけ	9.8	6.3	1.9	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨心・泥岩粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 完形 口唇部一部油煤痕
6	87		表土	かわらけ	(11.1)	(6.6)	2.5	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨心・泥岩粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 1/3
6	88		表土	かわらけ	(12.2)	(6.9)	3.0	a. ロクロ 内底ナデ 外底部板状圧痕・糸切り痕 b. 微砂・雲母・海綿骨心・泥岩粒 やや粗土 c. 褐色 e. 良好 f. 2/3
6	89		表土	青磁 劃花文碗	—	—	—	a. ロクロ b. 暗灰白色 精良堅緻 d. 透明 灰緑色 薄い貫入あり f. 口縁部片
6	90		表土	白磁 口元皿	—	—	—	a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 透明 乳白色 薄い f. 口縁部片
6	91		表土	青白磁 梅瓶	—	—	—	a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 透明 青白色 薄い f. 底部片 g. 高台底部に釉がガラス化して黒色に変色
6	92		表土	瀬戸 折縁皿	—	—	—	a. ロクロ b. 黄灰白色 砂粒・白色粒 良土 d. 灰緑色 ハケ塗り 漬けがけ e. 良好 f. 口縁部 g. 藤澤編年中期Ⅲ
6	93		表土	常滑 壺	—	—	—	a. 輪積み b. 暗褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 暗褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	94		表土	常滑 壺	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 暗褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年5
6	95		表土	常滑 壺	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・長石・黒色粒 c. 暗褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年7
6	96		表土	常滑 壺	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 暗褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年9
6	97		表土	常滑 壺	—	—	—	a. 輪積み b. 褐色 砂粒・長石・石英 c. 褐色 f. 胴部片 g. 内面摩耗
6	98		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石・石英 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	99		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石 c. 灰褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	100		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・黒色粒・小石粒・長石・石英 c. 灰褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	101		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石・石英 c. 灰色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	102		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・長石・石英 c. 灰褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	103		表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・黒色粒・長石・石英 c. 灰色 f. 口縁部片 g. 中野編年6a
6	104		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 褐色 砂粒・長石・石英 c. 褐色 f. 口縁部片
6	105		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年8型式以降
6	106		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g.
6	107		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 暗茶褐色 砂粒・長石・黒色粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年8型式以降
6	108		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 灰色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年8型式以降
6	109		表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	a. 輪積み b. 褐色 砂粒・長石・石英・黒色粒 c. 褐色 f. 口縁部片 g. 中野編年8型式以降
6	110		表土	瓦器質 火鉢	—	—	—	a. 輪積みロクロ整形 b. 灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒 c. 灰褐色 e. 良好 f. 口縁部片 g. 河野編年Ⅰ類B
6	111		表土	瓦器質 火鉢	—	—	—	a. 輪積みロクロ整形 b. 灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 c. 赤褐色 e. 良好 f. 口縁部片 g. 河野編年Ⅲ類 外面に亀甲花文スタンプ
6	112		表土	瓦器質 火鉢	—	—	—	a. 輪積みロクロ整形 外側面 細かい横位ミガキ b. 灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒 c. 灰褐色 e. 良好 f. 底部片 g. 内底部に格子状の線刻あり、外底部 砂底
6	113		表土	羽釜	—	—	—	b. 灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 f. 口縁部片 g. 口縁部～鏝にかけて黒色に変色
6	114		表土	石製品 砥石	(5.0)	3.0	1.0	a. 砥面2面 側面切り出し痕 c. 灰黒色 g. 仕上砥
6	115		表土	石製品 砥石	—	—	—	a. 砥面3面 c. 灰緑色 g. 中砥 上野
6	116		表土	石製品 砥石	—	—	—	a. 砥面4面 c. 灰黄色 g. 中砥 伊予
6	117		表土	鉄製品 釘	6.5	0.5	0.3	g. 断面方形
6	118		表土	鉄製品 釘	4.8	0.6	0.5	g. 断面方形
6	119		表土	鉄製品 釘	5.5	0.4	0.2	g. 断面方形
6	120		表土	鉄製品 鉄滓	8.5	7.5	3.3	g. 人為的に溶解した痕跡あり 用途不明
6	121		表土	骨製品 筭	(5.5)	1.2	0.3	f. 端部欠損
6	122		表土	須恵器 蓋	—	—	—	a. ロクロ b. 灰色 砂粒・雲母・白色粒 c. 灰色 e. 良好

単位 (cm)

破片遺物集計表

	産地等	器種	表土遺物	1面遺物	2面遺物	合計	%
かわらけ		糸(大)	268	475	63	806	55.6
		糸(小)	50	36	11	97	6.7
		手(大)	2		1	3	0.2
		手白かわらけ	1			1	0.1
		加工品		2		2	0.1
舶載陶磁器	青磁	蓮弁文碗		3		3	0.2
		劃華文碗	3			3	0.2
		碗	1			1	0.1
	青白磁	梅瓶 蓋	1			1	0.1
	白磁	碗	3			3	0.2
		皿		2	2	4	0.3
		壺		1		1	0.1
		合子		2		2	0.1
	彩釉陶磁器	黄釉盤			2	2	0.1
国産陶器	瀬戸	折縁皿	1			1	0.1
		仏華瓶		2		2	0.1
		壺	1	1		2	0.1
	常滑	甕	96	180	4	280	19.3
		壺		2		2	0.1
		片口鉢Ⅰ類	24	11	1	36	2.5
		片口鉢Ⅱ類	12	13		25	1.7
		鉢		1		1	0.1
		磨り		6		6	0.4
	渥美	甕		1		1	0.1
	備前	搦鉢	1	3		4	0.3
土製品		ほうろく		2		2	0.1
		土鍋	2	3		5	0.3
瓦質製品		火鉢	9	9	3	21	1.4
石製品		砥石(仕上げ)	6	9		15	1
金属製品		銅銭		1		1	0.1
		鉄釘	20	28	8	56	3.9
		刀子		2	2	4	0.3
		鉄滓	2	1		3	0.2
		不明鉄製品		1		1	0.1
骨角製品		筭	2	3		5	0.3
自然遺物		玉石		2		2	0.1
		骨	13	12		25	1.7
		獣歯		1		1	0.1
		貝	1	6	2	9	0.6
土師器		甕	3	7		10	0.7
須恵器		蓋	1			1	0.1
合計		合計	523	828	99	1450	100
%		%	36.1	57.1	6.8	100	



第1面全景（西から）



第1面・遺構6 かわらけ出土状況（東から）



第2面・遺構プラン確認状況

第2面全景（北から）



图版2



4-6 4-7 4-9

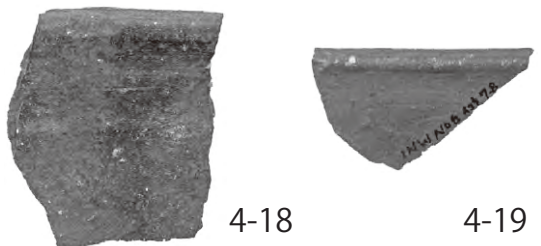
▲第1面 遺構2



4-11

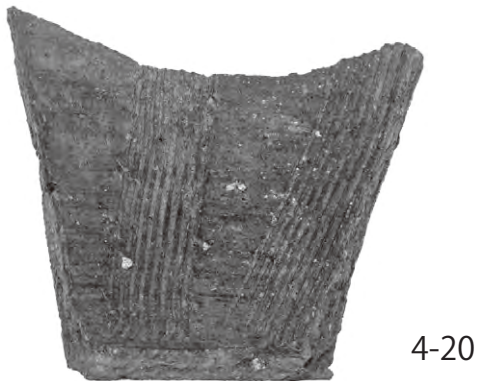
4-13

▲第1面 遺構6



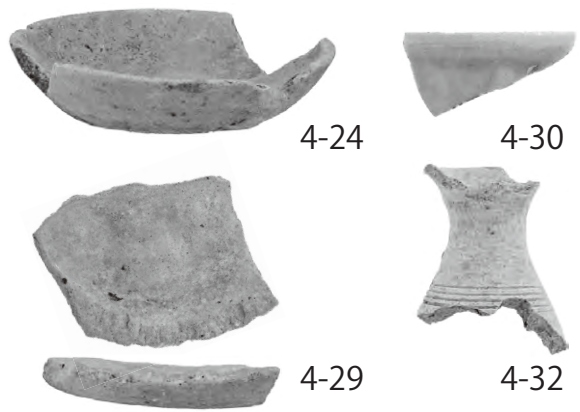
4-18

4-19



4-20

▲第1面 遺構7・8

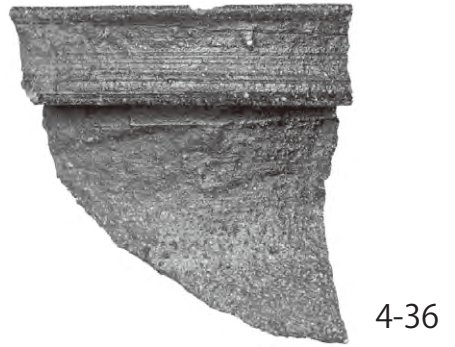


4-24

4-30

4-29

4-32



4-36



5-41



5-42



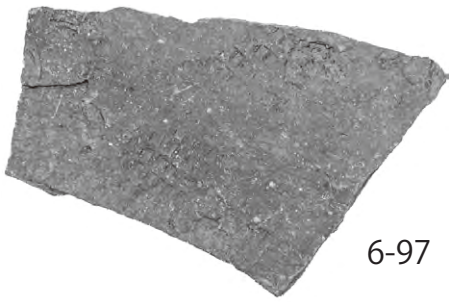
5-45

5-46

▲第1面 構成土



图版4



6-97



6-98



6-107



6-108



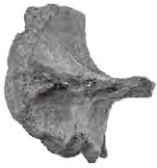
6-110



6-111



6-112



6-113



6-115



6-116



6-120



6-121



6-122

▲表土

極楽寺旧境内遺跡 (No.291)

極楽寺四丁目 923 番 2 の一部地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市極楽寺四丁目 923 番 2 の一部で実施した極楽寺旧境内遺跡（鎌倉市 No.291）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 23 年 1 月 31 日から同年 3 月 29 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業国庫補助業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、59.98㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調 査 員 岡田慶子、高橋江奈（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作 業 員 安藤宗幸、小口照男、金丸義一、鈴木啓之
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 押木弘己、岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
4. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
5. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
6. 本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前の測量基準点データを基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「G T 1 0 1 1」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。
 - ◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
 - ◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編一』
 - ◆瀬戸窯製品：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - ◆常滑・渥美窯製品：愛知県 2012『愛知県史』別編窯業 3 中世・近世常滑系

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	222
第1節 遺跡の立地	
第2節 歴史的環境	
第3節 周辺の調査成果	
第二章 調査の方法と経過	225
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	226
第四章 発見された遺構と遺物	228
第五章 調査成果のまとめ	237

挿図目次

図1 調査地点位置図	223	図9 3面遺構1・4面下遺構2立面図	232
図2 調査区配置図	225	図10 出土遺物(1)	233
図3 調査区壁断面図	227	図11 出土遺物(2)	234
図4 1面全体図	228	図12 出土遺物(3)	235
図5 2面全体図	229	図13 出土遺物(4)	236
図6 3面全体図	230	図14 出土遺物(5)	237
図7 4面全体図	231	図15 出土遺物(6)	238
図8 4面下全体図	232	図16 出土遺物(7)	239

表 目 次

表1 出土遺物カウント表	240	表2 出土遺物観察表	242
--------------	-----	------------	-----

図版目次

図版1	249	図版2	250
1. 現地調査前(南東から)		1. I区冠水状況(南東から)	
2. I区表土掘削(南東から)		2. I区4面(北から)	
3. I区1面(南から)		3. I区4面下(北から)	
4. I区2面(南から)		4. I区柱材(攪乱)検出状況(北から)	
5. I区3面(北から)		5. II区3面(北から)	
6. I区3面(南から)		6. II区3面 遺構1(北から)	
7. I区3面 遺物出土状況		7. II区3面 遺構1(北東から)	
8. I区4面(東から)		8. II区3面 遺構1西護岸材(東から)	
図版3 I区出土遺物	251	図版4・5 II区出土遺物	252

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

極楽寺旧境内遺跡 (No.291) は鎌倉市の南西部に位置し、旧市街域の低地部を取り巻く丘陵地形のうち、樹枝状に幾筋も開かれた谷戸内に占地する。現在、極楽寺や市立稲村ヶ崎小学校が立地する主谷部分は極楽寺中心伽藍跡 (No.290) として登録されており、ここを除いた谷戸内低地の大部分が旧境内遺跡の範囲となっている。主谷の北方には大きく4筋の支谷が入り、西から西ヶ谷・なし・馬場ヶ谷・新宮谷と呼ばれる。今回の調査地点は西ヶ谷の開口部に位置し、現地表面の標高は27.2 m弱を測る。

第2節 歴史的環境

霊鷲山感応院極楽寺は鎌倉で現存する唯一の真言律宗寺院で、奈良西大寺末。通説では正元元年(1259)の創建で開山は良観房忍性、開基は六波羅探題や連署を歴任した北条重時とされる。ただ、忍性の入寺は文永四年(1267)のことで重時没後から6年を経ていることから、実際のところは彼が生前に構えた仏堂などから出発し、死後に彼の子息らによって伽藍の整備が進められたのだろう。「極楽寺境内絵図」(極楽寺蔵)二幅は江戸時代の作である可能性が高く、このうちの一幅は盛時である14世紀頃の寺容を偲んで描かれたようだ。主要伽藍に加え49の子院が在ったといい、前者が「極楽寺中心伽藍跡」に、後者が「極楽寺旧境内遺跡」に所在したと考えられる。鎌倉幕府の滅亡後も後醍醐天皇の勅願寺として寺領を安堵され、鎌倉府下でも絵図が示す寺容を誇ったようであるが、応永三十二年(1425)の火災や永享五年(1433)の地震などに伴い衰退して行った。その後、かつての寺勢を取り戻せなかったのは、康正元年(1455)に鎌倉公方足利成氏が下総古河に逐われるなど鎌倉が政權都市としての地位を失ったこととも関係しているだろう。

本地点の南には月影地藏堂が建つ。江戸時代の作とされる木造地藏立像が安置され、いつの頃か主谷南西側の月影ヶ谷から移されたという。

第3節 周辺の調査成果

これまで、極楽寺旧境内遺跡ではやぐらも含め24地点で発掘調査が実施されている。ただ、広域におよぶ遺跡範囲のなか、小規模面積の調査が中心であるため遺跡全体の様相を窺える段階には至っていない。隣接する遺跡での調査は、極楽寺中心伽藍跡で7地点、真言院北やぐら群で2地点、月影ヶ谷北やぐら群で1地点などの事例がある。極楽寺中心伽藍跡では稲村ヶ崎小学校の校舎建て替えに伴い4回、延べ900㎡強の範囲が調査されている(図1-地点2)。前出の古絵図に見える方丈華嚴院に比定可能な地点では、凝灰岩の切石を用いた壇正積基壇や石列が検出され、これらで区画された内部に14～15世紀以降の礎石建物や掘立柱建物が遺存していた。基壇自体は創建期頃まで、石列は13世紀後葉～14世紀前葉頃まで遡る。

中心伽藍跡では、江ノ島電鉄関連施設の工事に伴う2地点でも比較的まとまった面積の発掘が行われている。車両修理施設(仮設)の建設に伴う調査面積は170㎡で、中世では3枚の遺構面が検出され、いずれの面でも小規模なピットが点在してただけで明確な建物遺構は確認されていない。各面とも、出土遺物は13世紀後葉～14世紀前葉に位置付けられる。また、中世から近世にかけて存続した井戸も検出され、戦国期頃に木組みから石組みの井戸枠に改変されたようである(継1999)。操車場の改築に伴う調査は600㎡を対象とし、中世では13世紀後半(後葉)～14世紀前半の間に2時期の

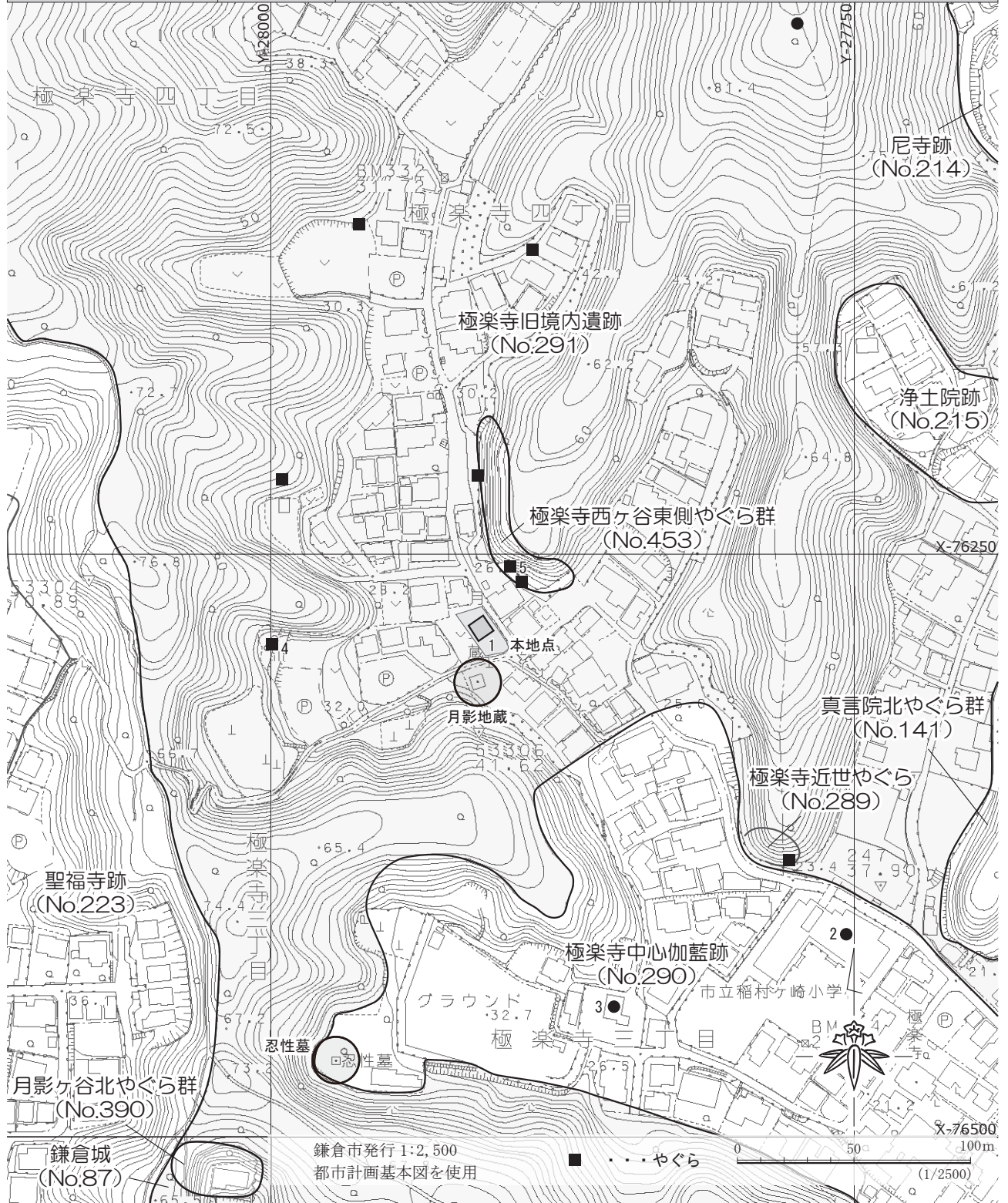
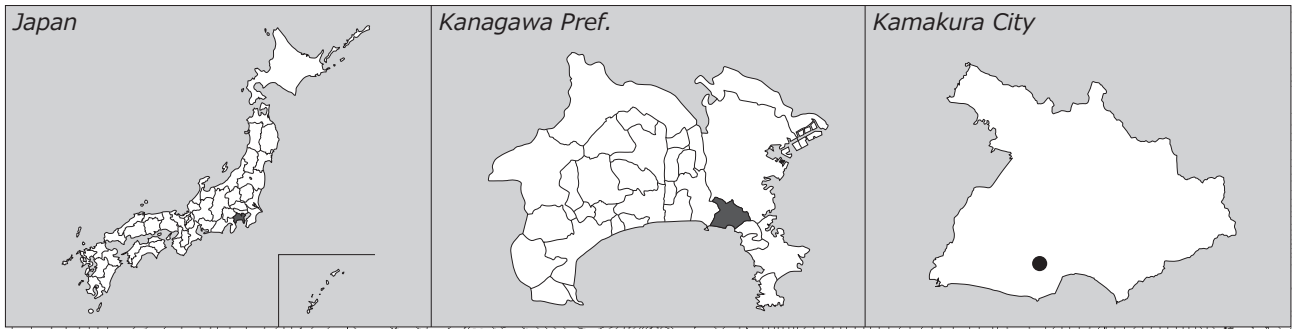


図1 調査地点位置図

遺構変遷が把握されている。13世紀後葉には掘立柱建物や竪穴建物が、13世紀末～14世紀前半には礎石の形跡を残す基壇状遺構や泥岩ブロックを用いた区画施設、小ピットが確認されている。基壇西脇では瓦が集積しており、瓦葺きの礎石建物が存在したのであろう。報告では絵図との比較検討から、薬師堂もしくは築地で囲まれた宝蔵・経蔵・地蔵院といった瓦葺き建物に比定する所見が示されている（齋木 1998）。図1-地点3では個人専用住宅の建設に伴い43㎡が調査され、削平岩盤面に始まる計5枚の中世遺構面が確認されている。下層の4面～2面までは南北方向に溝が走り、少ない出土遺物からは13世紀後葉～14世紀前葉という年代的位置付けができそうである。1面はa・bの2枚に分かれ、上層の1a面では凝灰岩切石や泥岩塊を据え置いた礎石建物が確認されている。出土かわらけには外傾する器形の個体が多く、西暦1400年を前後する年代に位置付けられそうである。なお、3面上堆積土からは多量の水晶片が出土している点、特筆できる（汐見・小泉 2007）。

極楽寺旧境内遺跡のうち、今回の調査地点に近いところでは西方100mの谷戸奥部で25㎡を対象に調査が行われている（図1-地点4）。標高52mほどの丘陵中腹部で、岩盤を削平した平坦面上に柱穴や束柱を支えた小穴が穿たれ、柱穴より浅い播鉢状のピットなども検出されている。山裾側にはL字状に屈曲する小溝があり、これらの痕跡から、やぐらの底面施設だけが遺存したものと考えられている。かわらけや常滑などの出土遺物は、15世紀前後の様相を備えている（鎌倉市教育委員会 1999）。また、本地点北東の丘陵突端部には極楽寺西ヶ谷東側やぐら群（No.453）が所在し、急傾斜地崩壊対策工事に伴い2基のやぐらが調査されている（図1-地点5、「一升枡遺跡（No.293）所在やぐら群」として報告）。出土遺物から、15世紀後半～16世紀に二次的改変を受けたとされる（長谷川・大塚 1999）。

参考文献

- 大三輪龍彦・玉林美男ほか 1980 『極楽寺旧境内遺跡』 極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
三浦勝男編 1992 『鎌倉の古絵図Ⅰ』 鎌倉国宝館
白井永二編 1992 『新装普及版 鎌倉事典』 東京堂出版
齋木秀雄 1998 『極楽寺旧境内遺跡』 極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団
鎌倉市教育委員会 1999 「6, 極楽寺旧境内遺跡」『鎌倉の埋蔵文化財3』（図1-地点4）
継 実 1999 『極楽寺中心伽藍跡群遺跡』 極楽寺中心伽藍跡群遺跡発掘調査団・東国歴史考古学研究所
長谷川 厚・大塚健一 1999 『一升枡遺跡（No.293）所在やぐら群』 財団法人かながわ考古学財団（図1-地点5）
汐見一夫・小泉衣里 2007 「極楽寺中心伽藍跡（No.290）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23（第2分冊）』 鎌倉市教育委員会（図1-地点3）
秋山哲雄 2010 『都市鎌倉の中世史』 吉川弘文館

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では基礎工事として最大深度 7.275 m の杭を打設することから、市教委では平成 22 年 8 月 31 日から 9 月 2 日までの三日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下 110cm で中世の遺物包含層が検出され、地表下 140cm ではやや多くの中世遺物を伴う遺構面（河川跡の可能性も示されている）が確認されたことから、建築工事の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

現地調査は平成 23 年 1 月 31 日～3 月 29 日の約二ヶ月間をかけて実施した。調査範囲は当初 65 m² を予定していたが安全面を考慮した結果 59.98 m² に狭まった。また、調査期間中に発生した東日本大震災に伴う計画停電のため調査後半には十分な排水ができなかったこともあり、最終的には I 区 32.16 m²、II 区 3.66 m² の計 35.82 m² が調査対象となった。

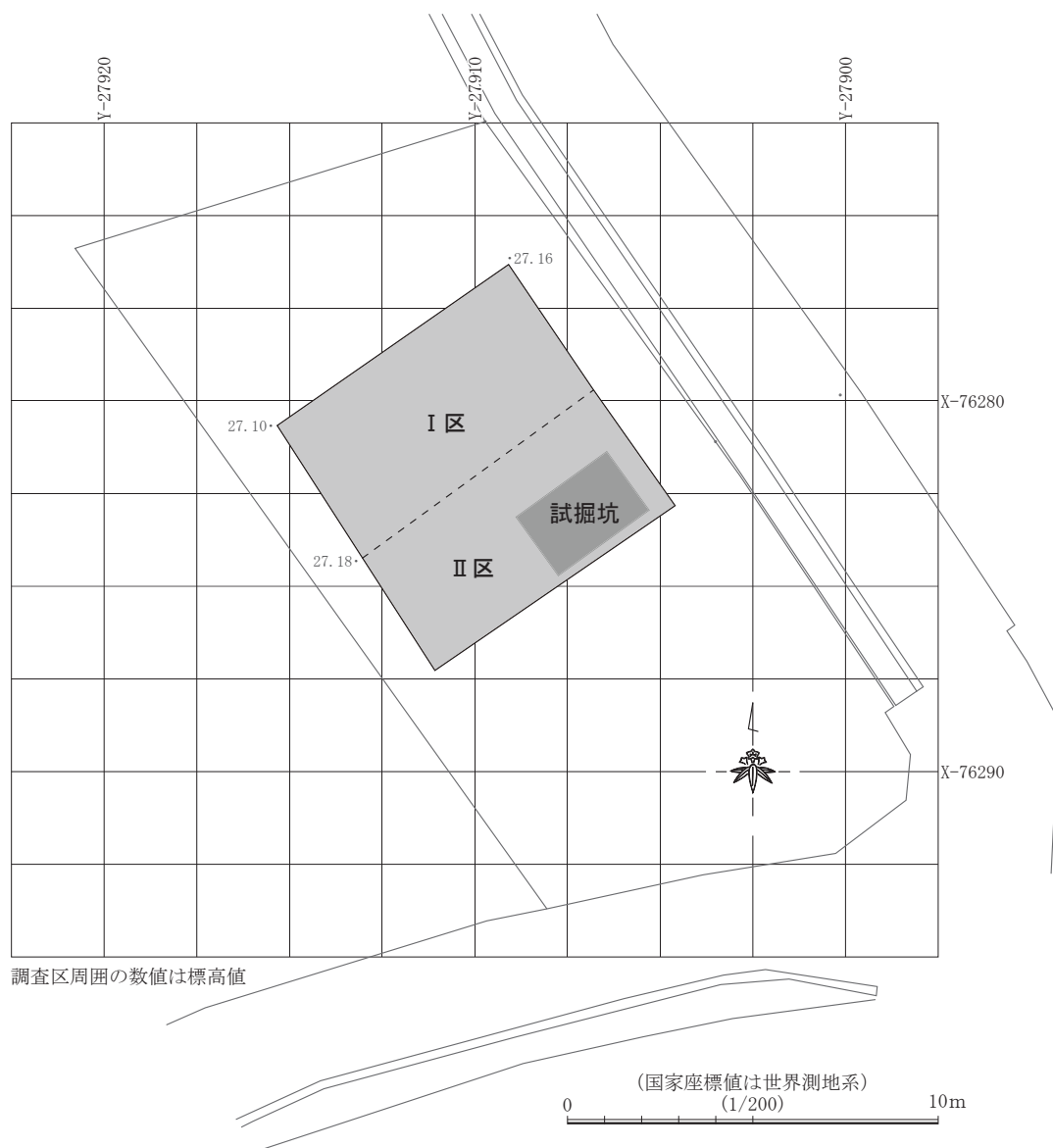


図2 調査区配置図

第2節 調査の方法

調査区は、掘削に伴う残土置き場を確保する必要から北半部のⅠ区と南半部のⅡ区とに分割し、Ⅰ区→Ⅱ区の順に調査を進めた。確認調査の結果を受け、地表下100cmまでを重機で掘削し、以下は人力での掘削に移行した。本地点では表土上位にあった泥岩埋め立て層を除去した地表下80cmで西側の谷戸上方から流下する帯水層に達したため、調査区の西側壁から水が流れ落ちる状況下で作業を進めることになった。調査区壁に沿って排水溝を巡らせて対応したが、出水量が夥しいなか、2月下旬までは小型発電機で揚水せざるを得ず、また3月11日以降には計画停電も重なったため作業は中断を繰り返した。

今回の調査では中世に帰属する1～4面+4面下の計5面を確認し、順次、写真撮影と測量図の作成を行った。測量に当たっては国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、主に光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は市道上の鎌倉市4級基準点「H112」と「H113」の二点間関係をもとに開放トラバース法によって行った。標高は鎌倉市3級基準点「53306」(41.620 m)を起点に、光波測距儀で高低差を測定する方法により敷地内の測量杭に移設した。

一連の移設作業は平成23年2月初旬に行ったため、同年3月11日に発生した東日本大震災に伴う地殻変動を受け座標値補正が必要である。本報告では、未補正の座標値を提示している。

第3節 調査の経過

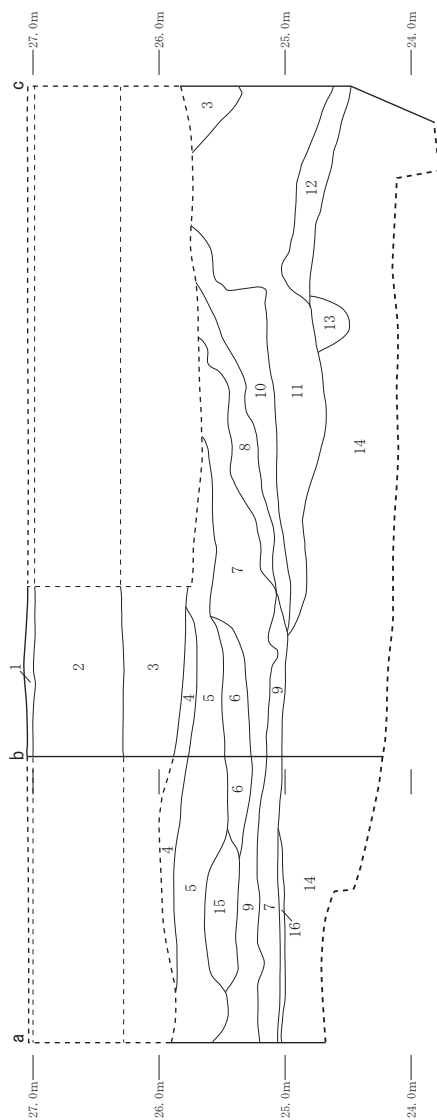
前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。Ⅰ区の表土掘削は平成23年1月31日に実施し、翌2月1日に調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。遺構の確認と掘削、図面の作成および写真撮影などの記録作業を進め、3月10日には重機によるⅠ区埋め戻しとⅡ区表土掘削を行った。この際、前述のような出水状況であったため重機が立ち往生する場面があり、Ⅱ区の表土掘削は予定の1/3程度に留まる結果となった。翌3月11日からⅡ区の人掘削と土留め養生に着手したところ大きな揺れに見舞われ、これ以後は計画停電の合間を縫って排水・調査を進めるしかなかった。この時点で、Ⅱ区の表土未掘削部分については止むを得ず調査対象から除外することとした。

この後はⅡ区を下層まで順次掘り下げ、3月29日には調査用具を撤収して現地での調査工程を全て終了した。なお、確認調査の結果からは中世で3枚の遺構面が想定されており、調査期間もこの想定に基づいて設定されていた。加えて前述した出水・通電の事情もあり、期間・安全面の制約から4面下の下位については掘削・確認には及ばなかった。4面下までに中世基盤層は確認できなかったことから、さらに下位にも中世面が遺存していることが予測できる。

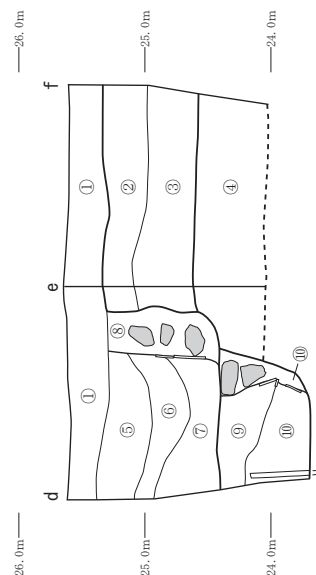
出土品等の整理および本報告の作成は平成25年度から28年度にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課分室において断続的に行った。

第三章 基本土層

本地点は極楽寺西ヶ谷の内にあり、西に延びる支谷の開口部に位置する。このため基盤層は暗褐色～黒褐色の粘質土層かと思われるが、調査で掘削し得た深さ(地表下3.4 m前後)までは泥岩塊が主体、もしくは泥岩粒を交えた中世の造成土が占め、中世基盤層以下、自然作用の堆積は確認できなかった。自然に考えれば、基盤層は南と東に下がって行くだろう。各土層の様相については、図3を参照されたい。



- 1 褐色土 耕作土。現代。
- 2 泥岩ブロック
- 3 黒灰色土 粘質土。水田の耕土と床土。近世～現代。
- 4 黒灰色土 1 cm大の泥岩粒少量。
- 5 黒灰色土 1～10 cmの泥岩粒少量。
- 6 黒灰色土 1～3 cmの泥岩粒とかわらかけ片多い。
- 7 泥岩ブロック 人頭大のブロックが主体。
- 8 黒灰色土 1～3 cmの泥岩粒多い。
- 9 黒灰色土 粘質土。締まり弱い。きめ細かく混入物ない。
- 10 黒灰色土 3～5 cmの泥岩粒多い。
- 11 泥岩ブロック 人頭大のブロックが主体。
- 12 黒灰色土 粘性あり。砂粒、貝殻片少量。
- 13 黒灰色土 粘性あり。砂粒、貝殻片多量。
- 14 泥岩ブロック 5 cm～人頭大の泥岩粒多量。
- 15 黒灰色土 締まりあり。3～5 cmの泥岩粒多い。
- 16 黒灰色砂 締まり弱い。貝殻粒多量。



- ① 黒灰色土 粘性あり。泥岩ブロック多量。
 - ② 黒灰色土 締まりあり。泥岩粒と砂質土が主体。
 - ③ 黒灰色土 締まりあり。拳～人頭大の泥岩ブロック多量。
 - ④ 黒灰色土 締まりあり。人頭大の泥岩ブロックやや多い。砂質土含む。
- 遺構1埋土**
- ⑤ 暗灰色土 粘性ややあり。拳大の泥岩ブロックやや多い。
 - ⑥ 黒灰色土 拳大の泥岩ブロック少量。砂質土含む。
 - ⑦ 黒褐色土 腐植土。粘性あり。締まり弱い。木片多量。
 - ⑧ 黒褐色土 粘性あり。締まり弱い。拳～人頭大の泥岩ブロック少量。
- 遺構2埋土**
- ⑨ 黒褐色土 腐植土。粘性あり。締まり弱い。木片、貝殻片多量。
 - ⑩ 黒褐色土 砂礫と泥岩粒が主体。貝殻粒多量。底面付近に玉石多い。
 - ⑪ 黒褐色土 粘性あり。人頭大の泥岩ブロック多量。

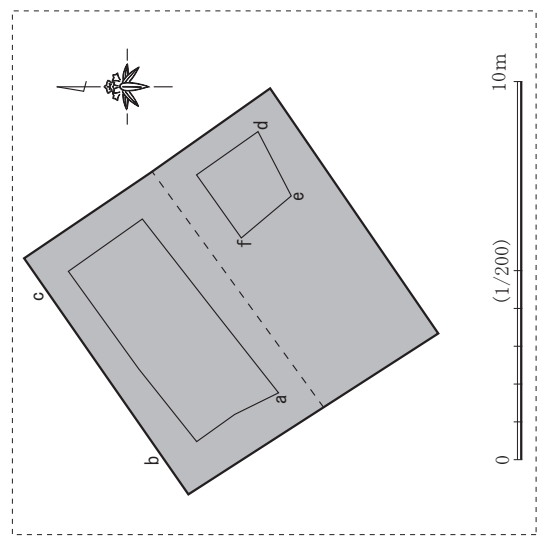


図3 調査区壁断面図

第四章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、地表下 140cm 以下で計 5 枚の遺構面を確認した。谷戸内という不安定な立地条件であるためか、人頭大ほどもある大ぶりの泥岩塊を乱雑に積み上げた造成土と黒灰色土ベースの間層から成る堆積が目立ち、細かな泥岩粒を用いての丁寧な整地面は確認できなかった。図 3 から分かるように水平を意識して整えられた形跡が希薄であり、また、特に I 区においては各面で明瞭な掘り込みが確認できなかったことから、調査で認識した遺構面 = 生活面としての実態を有していたのか、不確実な部分が残る。3 面と 4 面下の 2 枚については、南北溝や礎板の存在から生活面としての可能性は高いと考える。

以下、各面の状況と検出された遺構について説明する。

1 面 (図 4)

I 区では標高 25.7 ~ 25.8 m、II 区では 25.5 m で検出された。I 区では東に向けて緩やかに下がり、

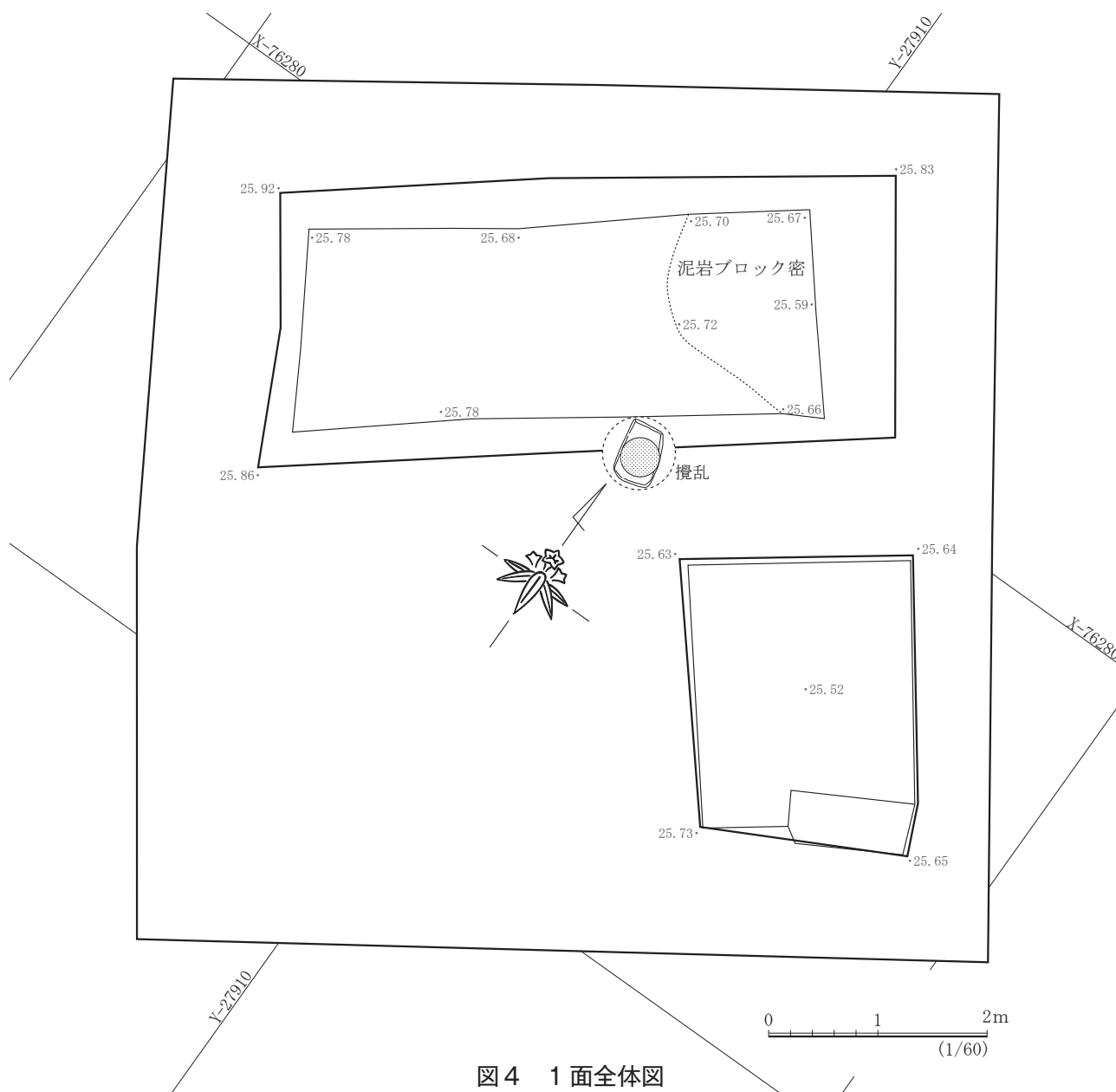


図 4 1 面全体図

東端部近くでは泥岩ブロックが密になる状況が見て取れた。Ⅰ・Ⅱ区ともに掘り込みを伴う遺構は確認できなかった。

上述の如く遺構が確認できなかったこともあり、1面に帰属する出土遺物は抽出できなかった。1面を挟む上下の層序から出土した遺物については、図10にⅠ区出土分を、図13にⅡ区出土分を掲げた。

主体となるかわらけを一見すると、1面より上位の資料に大・中・小という法量差を見て取れるものの器形だけを見ると1面の上下で明瞭な差異は見出せない。各法量とも、身深で内湾基調の器形を呈す。

2面 (図5)

Ⅰ区では標高25.5～25.6m、Ⅱ区では25.4mで検出された。Ⅰ区では南東に向けて緩やかに下る傾向があり、Ⅰ区内でも造成土中の泥岩ブロックに粗密が見て取れた。1面と同様、Ⅰ・Ⅱ区とも掘り込みを伴う遺構は確認できなかった。

2面に帰属する遺物は抽出できず、上下に挟む層序から出土した遺物について、図10・11(Ⅰ区)と図13(Ⅱ区)に掲げた。Ⅱ区の2面下ではかわらけに大・中・小の法量分化が認められ、各法量と

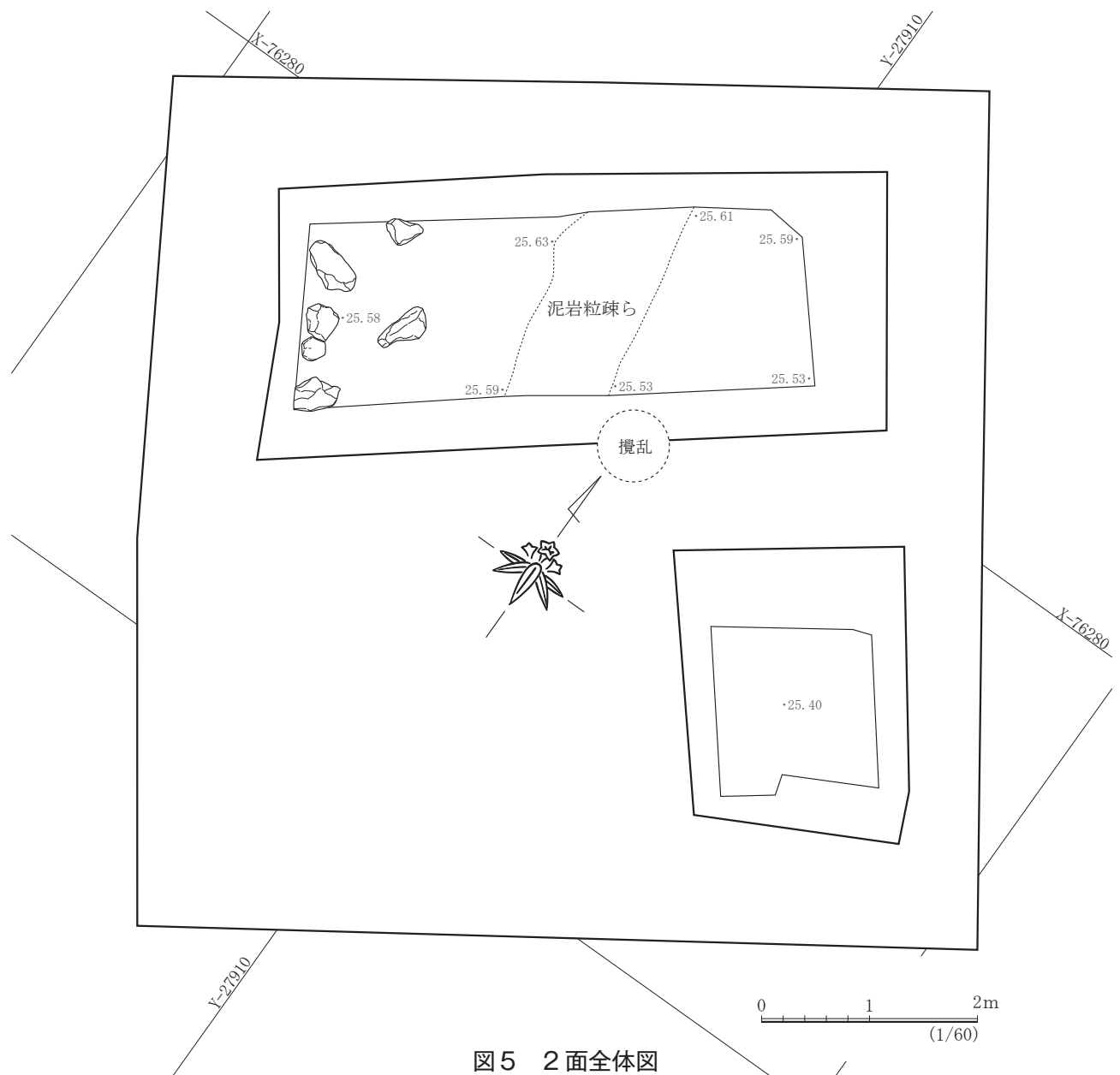


図5 2面全体図

も身深で内湾基調の器形を呈する。全体としては、1面下と2面下のかわらけに明確な器形差は見出せない。常滑製品は小片のみの提示となったが、Ⅱ区2面下では6a・6b型式が最新段階の資料となろう。

3面 (図6)

Ⅰ区では標高 25.3 ~ 25.45 m、Ⅱ区では標高 25.3 m 前後で検出され、Ⅰ区では西半域がなだらかな落ち込みとなっていた。Ⅱ区では南北方向に走る溝 (遺構 1) を確認した。

遺構 1 Ⅱ区の東部で検出された。南北方向の溝で、確認できたのは西辺のみで幅と長さは把握できなかった。断面観察では 99cm の深さを計測し、底面の標高は 24.5 m を測った。検出範囲が限定的であるため明確な流下方向は掴めなかったが、谷戸の地形を考えれば南へ流れていたと見るのが自然であろう。西辺には二段分の横板を縦杭で抑えた護岸を設けており、掘り方の裏込め土には多量の泥岩ブロックが投入されていた。

3面の出土遺物として、図 12-45 ~ 54 にⅠ区西側落ち込みの出土資料を、図 14 にはⅡ区遺構 1 から出土した資料を掲げた。

Ⅰ区の資料のうち、かわらけには大・中・小の三法量が認められるが、大皿と中皿の法量差が顕著

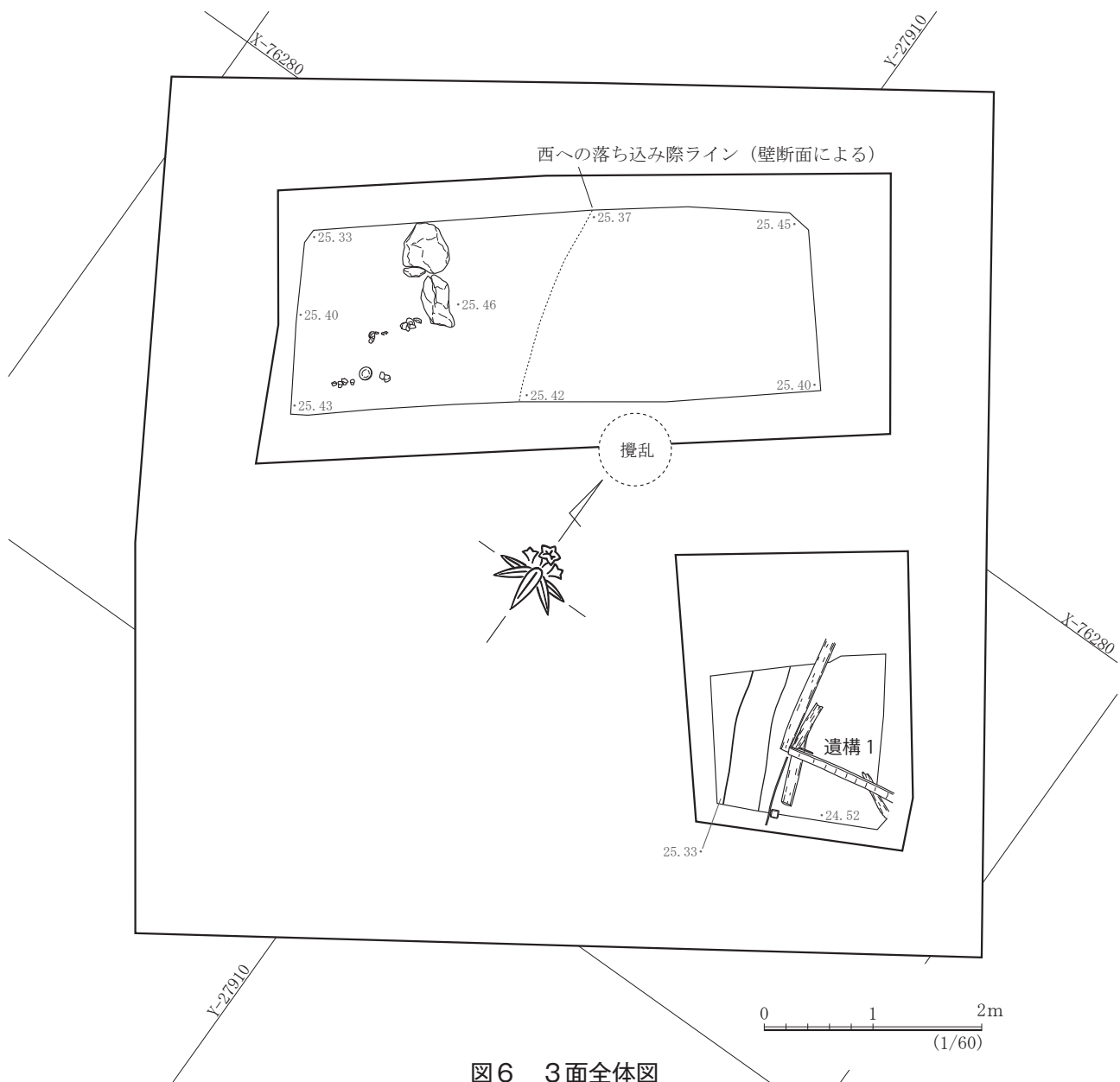


図6 3面全体図

でなく、48などは大皿のうちの小振りな個体という見方もできるかもしれない。三法量とも身深で内湾基調の器形を呈する。

遺構1出土のかわらけについては資料数が少なく、法量・器形上の特徴は見出し難い。

4面 (図7)

I区では標高24.85～25.0m前後で確認したが、II区では近似するレベルで対応する面を把握することはできなかった。I区は全体的に東へ向けて緩やかに下がり、東側1/4付近でやや顕著な落ち方となる。泥岩ブロックが目立つことから面と認識したが、1・2面同様、確実な遺構面とは言い切れない。

3面下～4面の出土遺物のうち、I区出土分は図12-56～69に、II区出土分は図16-164～186に示した。かわらけは大皿の資料数が乏しいが、大・中・小の三法量が存在したことを窺わせる。3面の出土資料と同様、各法量とも身深で内湾基調の器形を呈する資料が主体となるが、小皿には60のように低平で外開きに立ち上がる器形のものも含まれている。

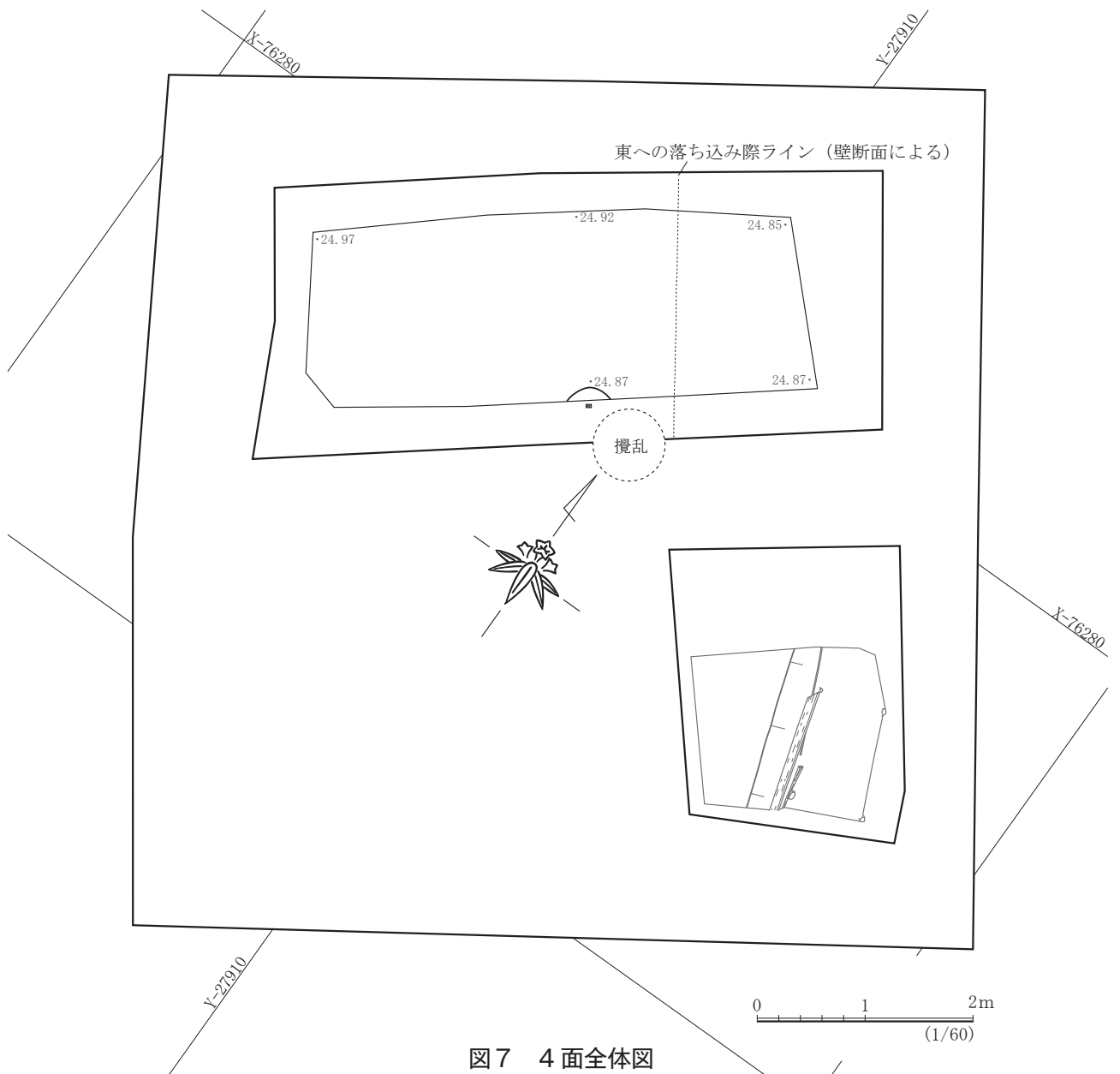


図7 4面全体図

4面下 (図8)

I区では標高24.3～24.4mで確認した。II区は24.4m付近での南北溝(遺構2)の検出を以って面と認識したが、南壁断面の観察によって、遺構2の掘り込み面は24.6m付近にあることが把握できた。I区の方が20cmほど低いことになり、自然地形とは反対の傾斜方向となることから、I区においても24.5～24.6m前後に生活面があったと考えるのが自然であろう。I区で散見された杭の上端が大よそこのレベルとなるので、これらが打ち込み(または切断)された高さが本来の生活面であったと考えておく。ただ、このレベルでは堆積層の明確な差異は認識できなかった。

遺構2 II区東部で検出された南北溝で、西辺のみの確認であったため幅と長さは把握できなかった。断面観察では深さ75cmまでを計測し、推定される掘り込み面からは90cm以上の深さがあったと

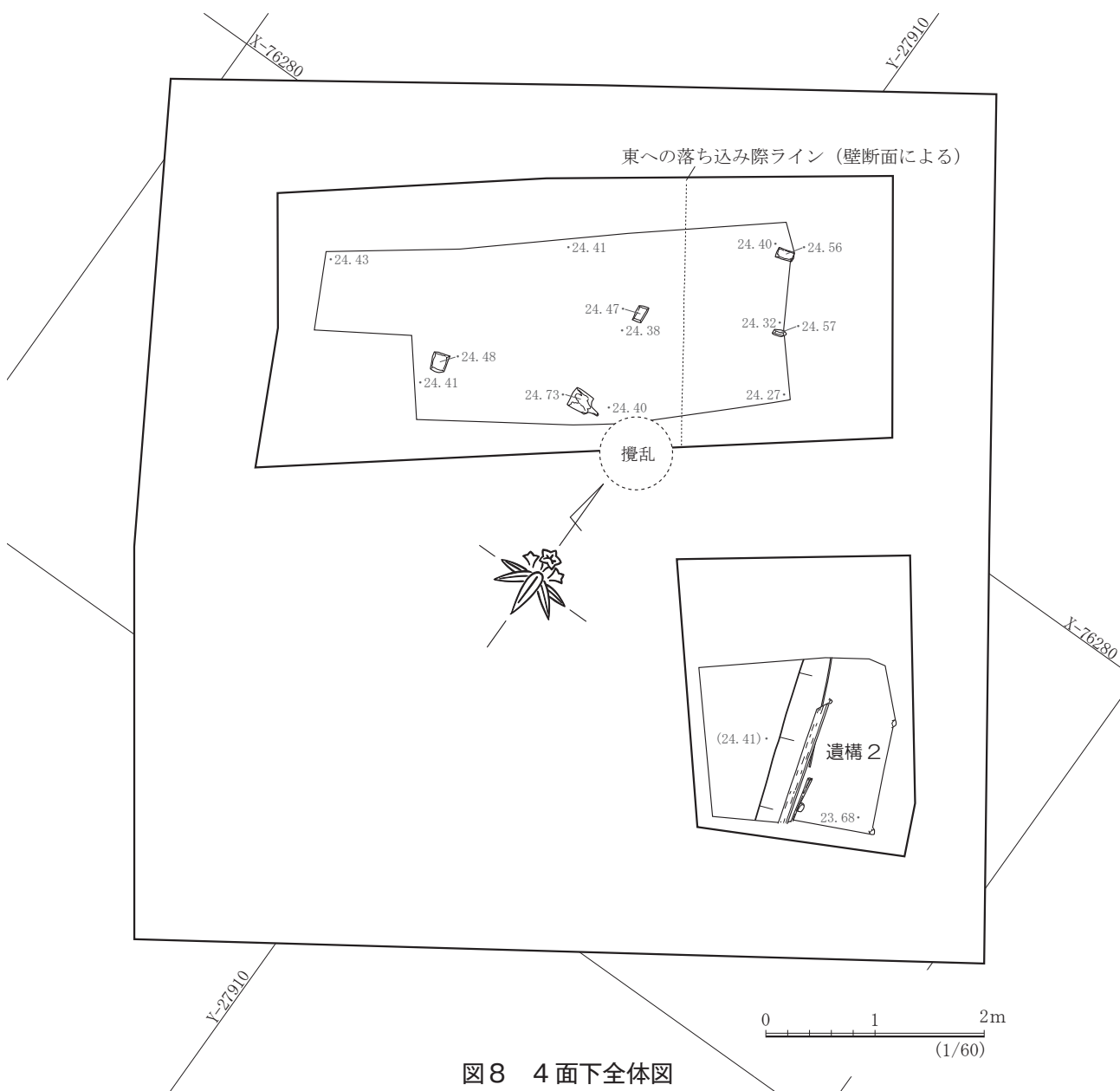


図8 4面下全体図



図9 3面 遺構1・4面下 遺構2 立面図

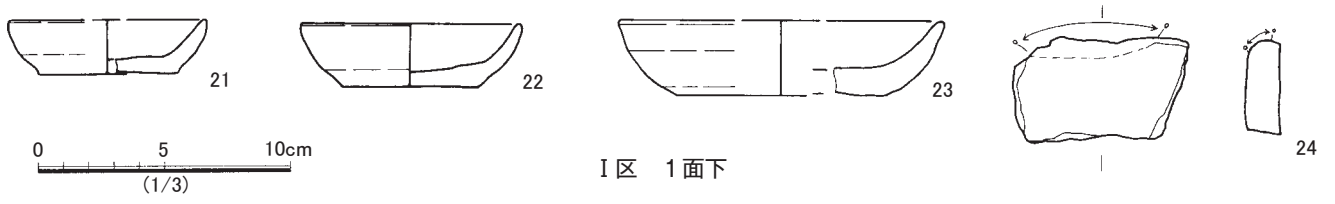
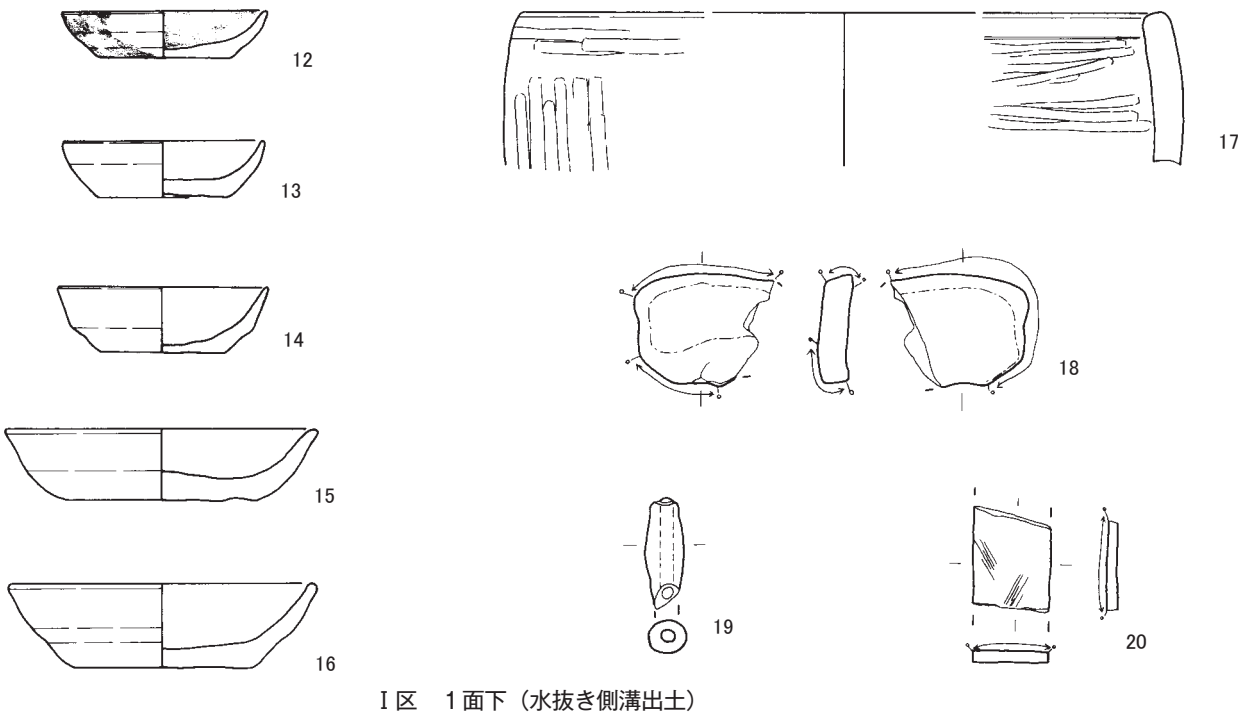
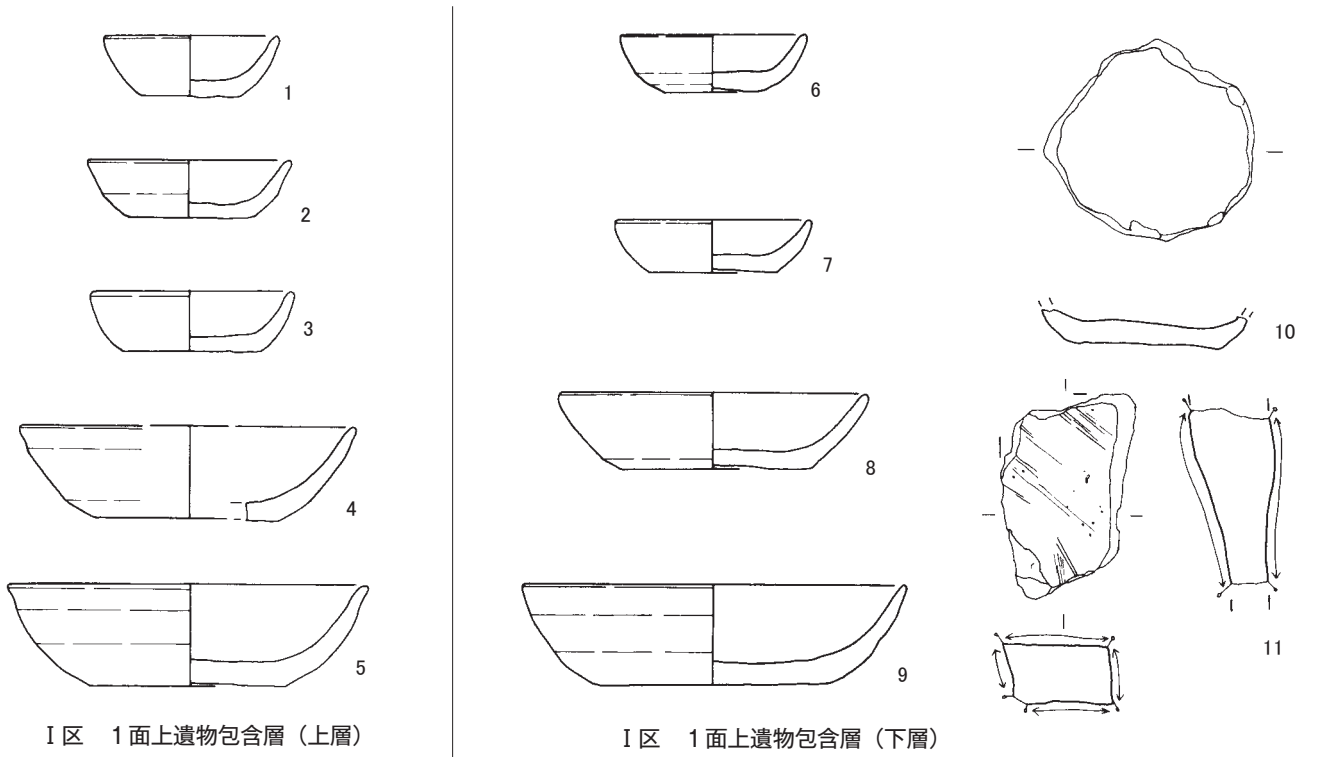


图 10 出土遺物(1)

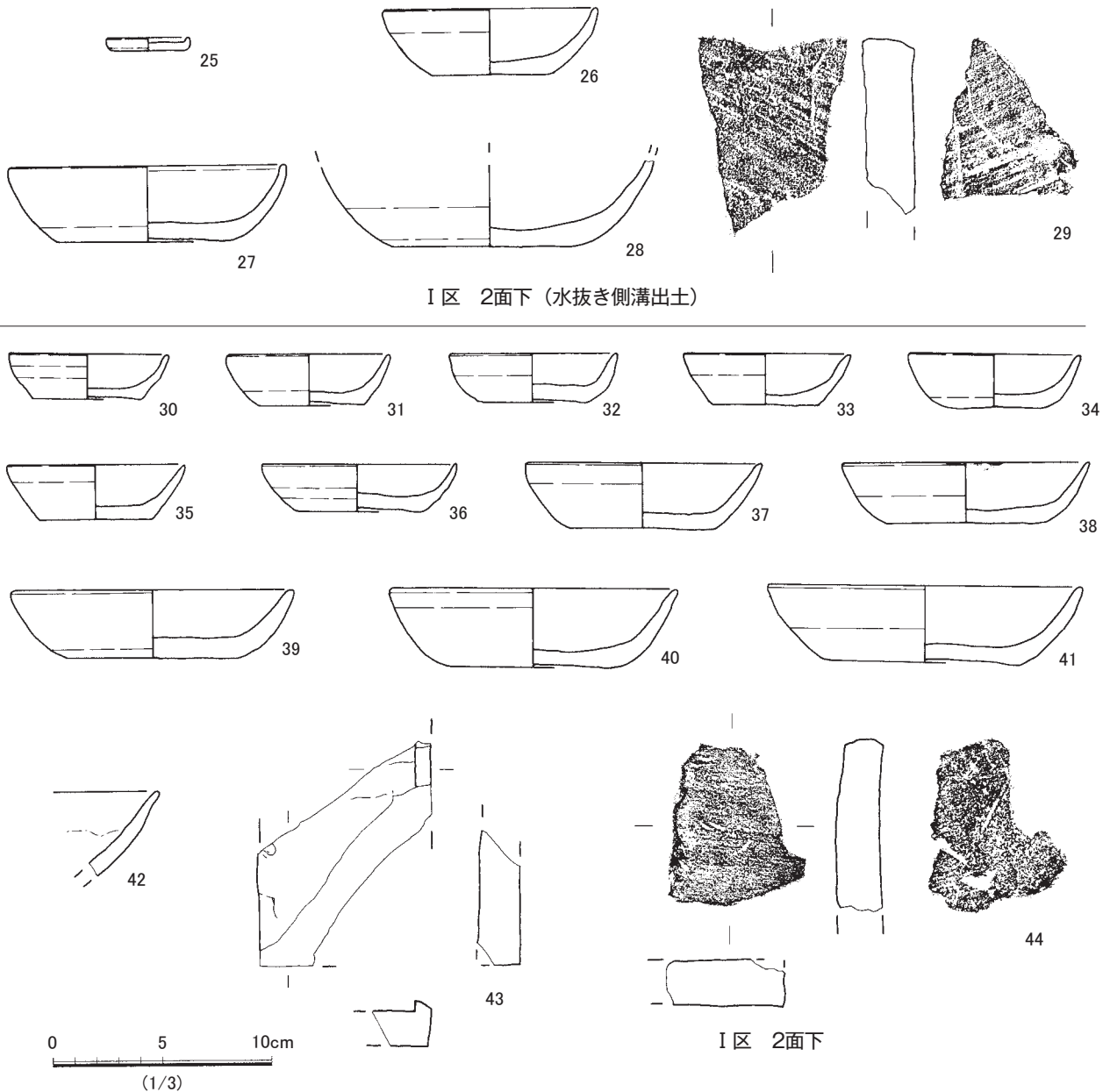


図 11 出土遺物 (2)

考えられる。底面標高は 23.7 m 前後で、上層の遺構 1 と同様、自然地形からは南へ向けて流下していたことが推測できる。西辺には二段分の横板を縦杭で抑えた護岸を設けており、掘り方の裏込め土には多量の泥岩ブロックが投入されていた。

図 12-70～75 は I 区 4 面下、図 15 は II 区遺構 2 の出土遺物である。かわらけには大・中・小の三法量が存在する。図 15-148 は器種不明の石製品で、遺存する 2 面に黒色系漆が塗られ、側面には金蒔絵による唐草文が施されている。152 は鉄板を山形に折り曲げた製品で、平面形は剣形を呈する。中央部に貫通孔があり、飾り釘といった使用方法が推定される。154～163 は遺構 2 の覆土下層から出土した。

かわらけは小皿のみ (154～156) の提示となったため傾向を捉えづらいが、覆土全体の出土品と同様、身深な資料が含まれない点を指摘できる。

遺構 2 の他には、I 区において木杭 5 本を確認している。前述のように、標高 24.5～24.6 m に上端

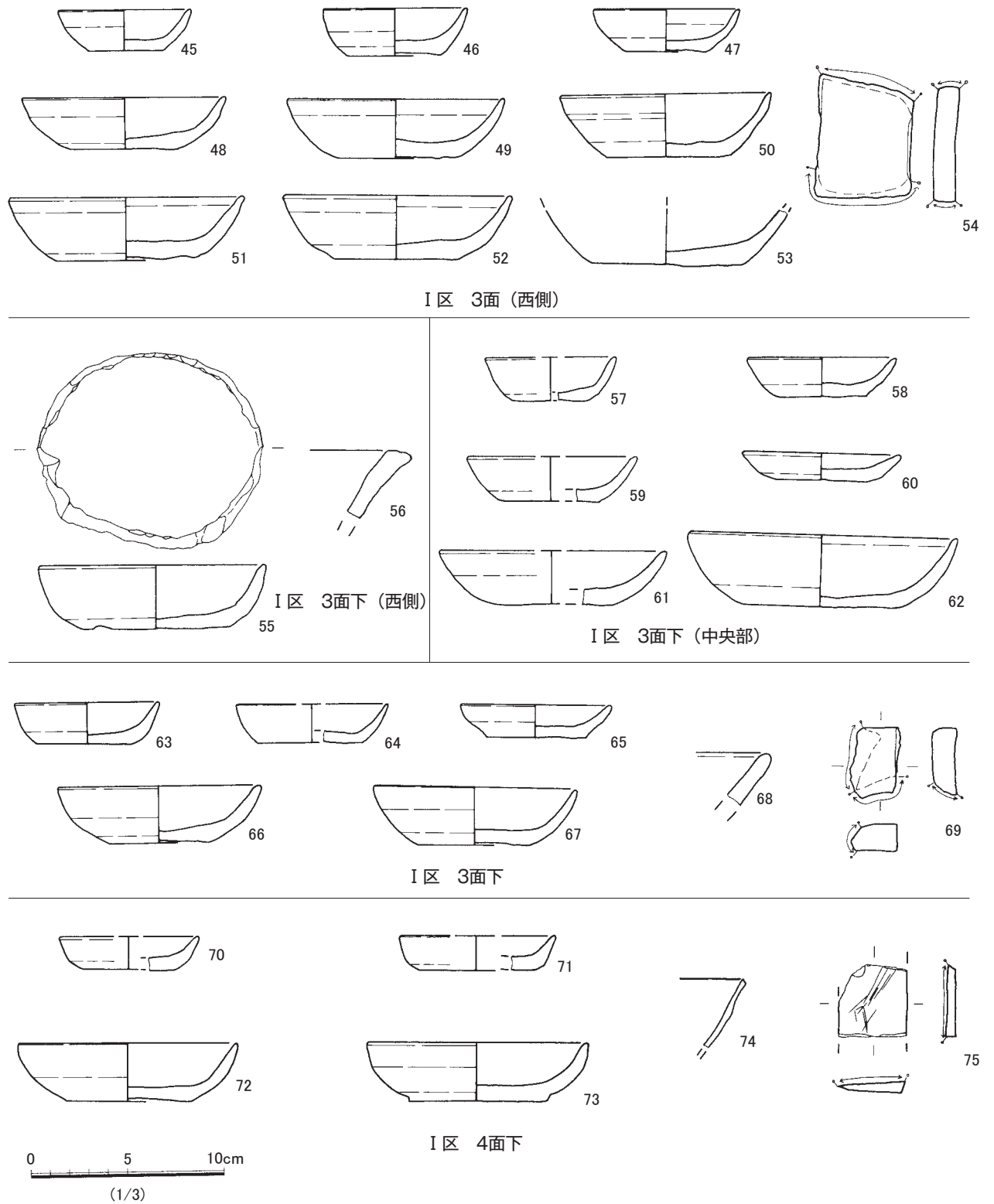


図 12 出土遺物 (3)

のレベルが集中することから、この付近に杭を打ち込む（または切断する）際の生活面があったと考えられる。検出された5本は太さに規格性がなく、調査範囲も狭小であるため杭列をなしていたかは分からないが、杭側面の向きやⅡ区の溝（遺構2）の走方向から判断すれば、概ね真北に近い軸線の構造物をなしていたことが推測できる。

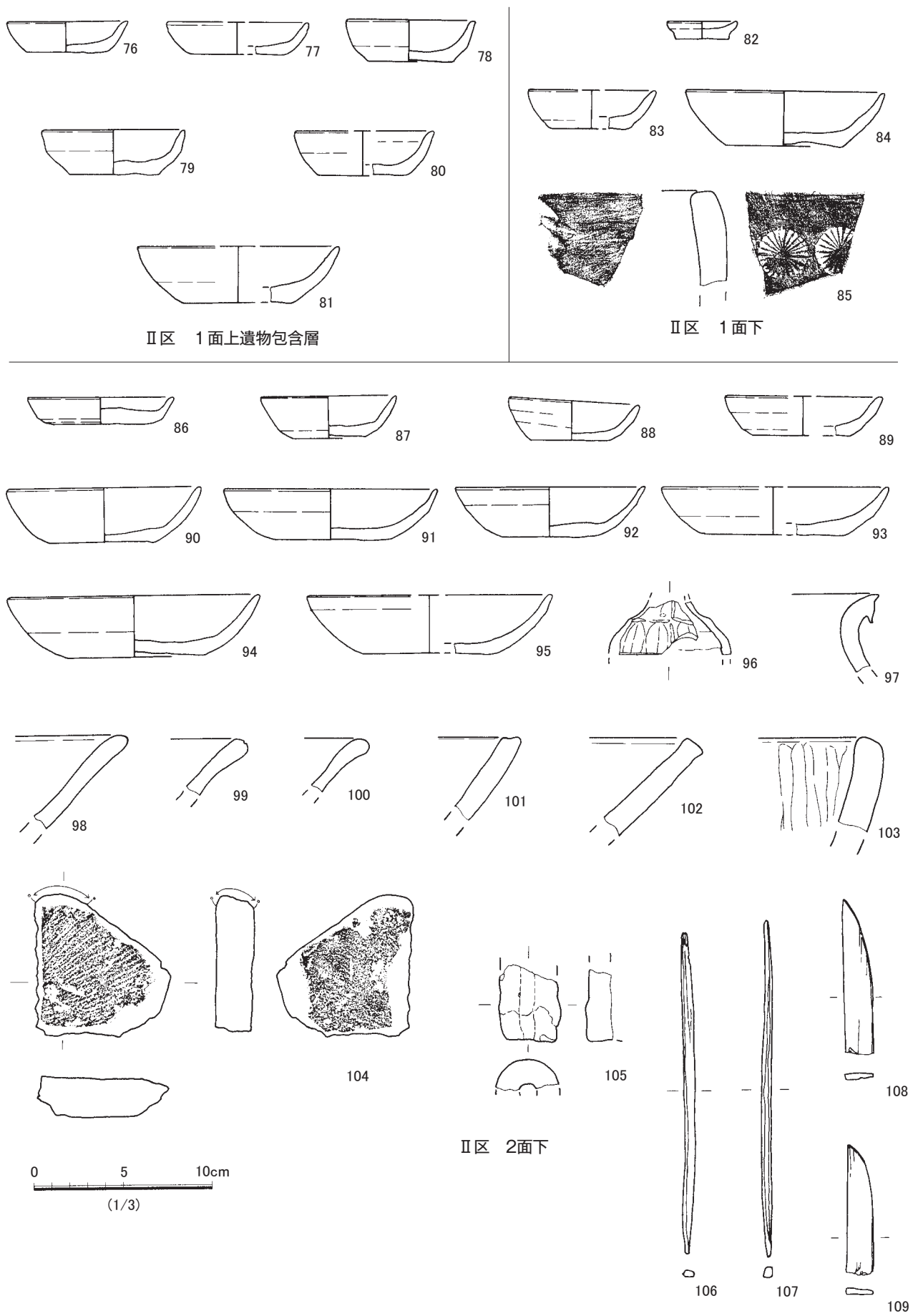
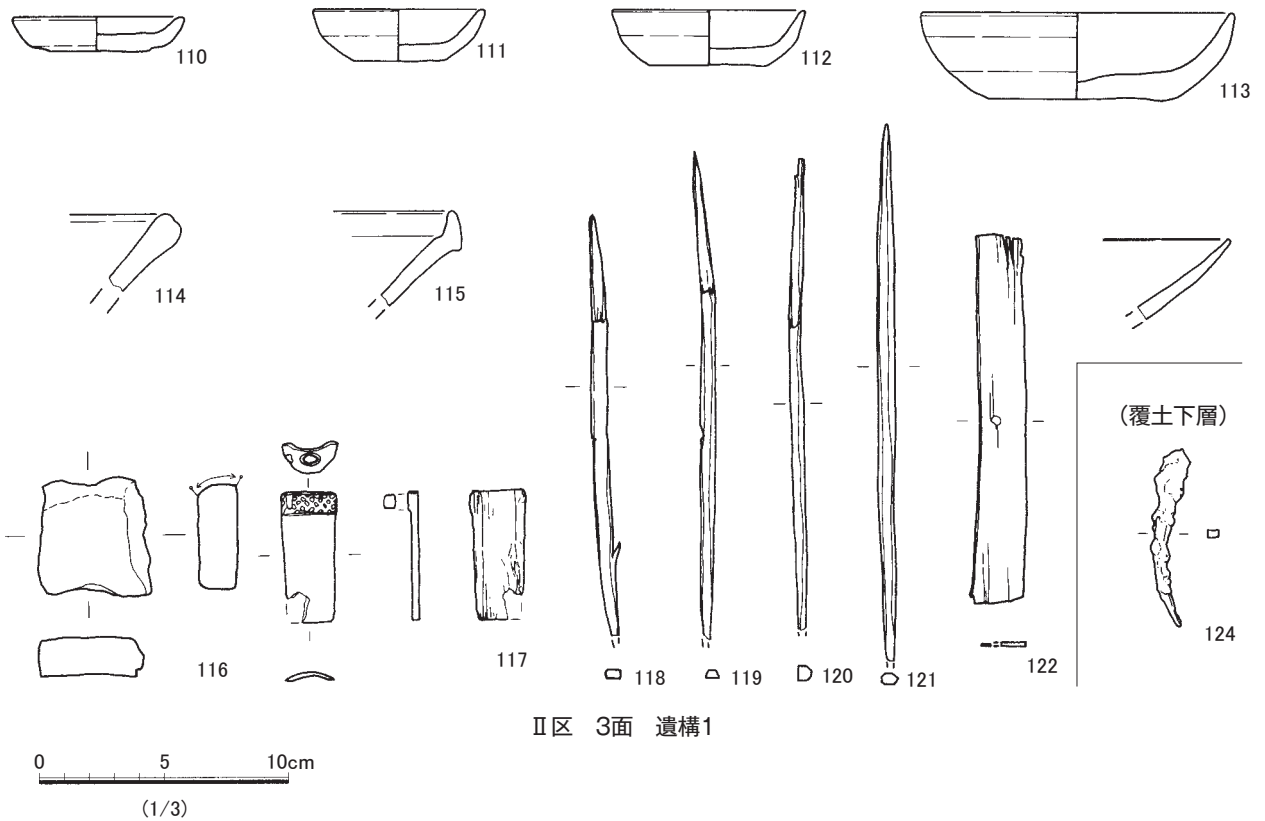


图 13 出土遺物 (4)



Ⅱ区 3面 遺構1

図 14 出土遺物 (5)

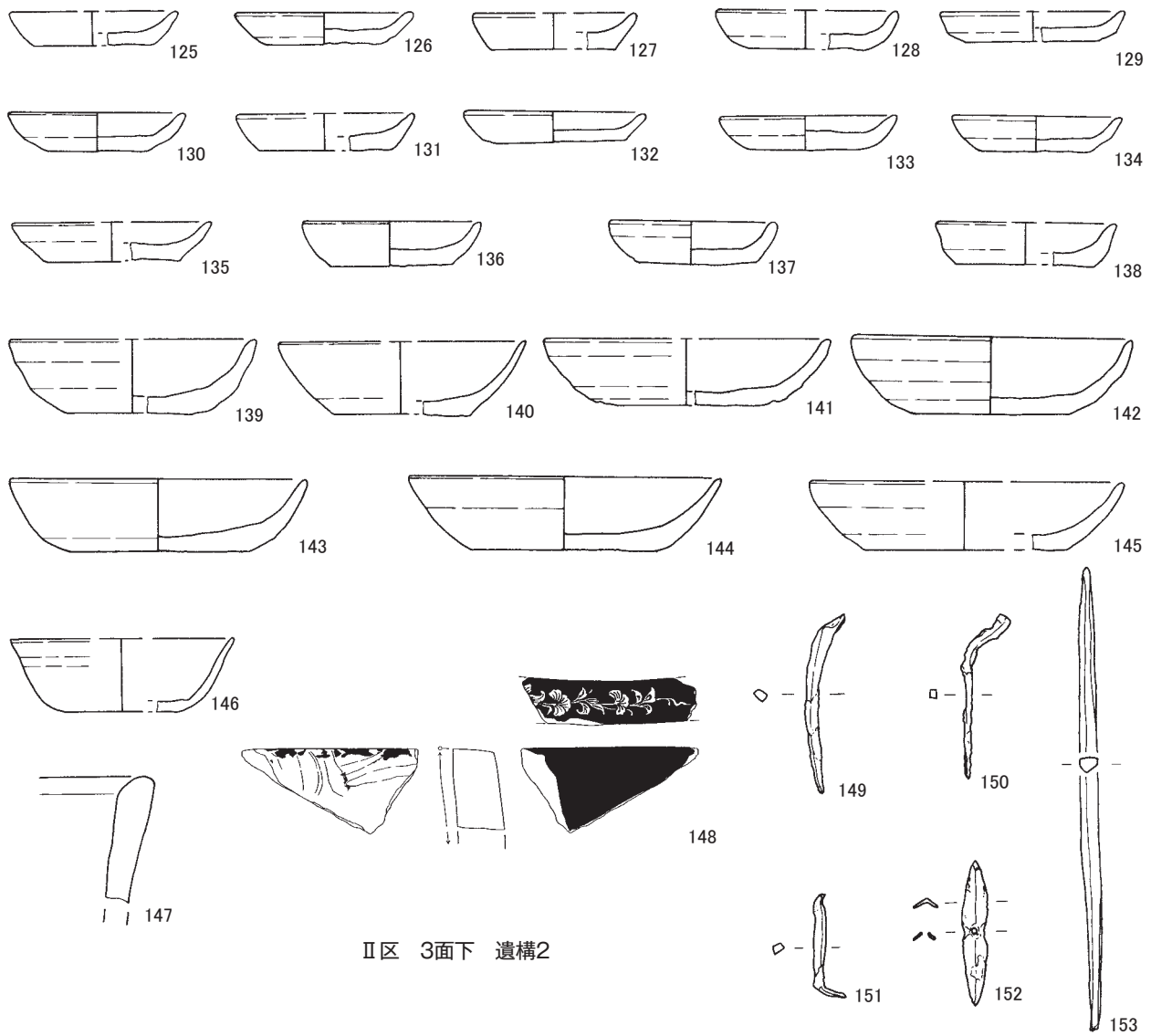
第五章 調査成果のまとめ

以上、雑駁な報告に終始してきた。

調査中、東日本大震災という不測の事態が起こったとはいえ、中途半端な形で調査を終わらせざるを得なかった点は担当者の力不足であり、責任を感じている。本調査に伴う掘削は中世層の中で留まっており、中世における土地利用の開始時期を把握することはできなかった。そうした中でも中世の所産となる5枚の遺構面を確認し、泥岩ブロックを積み重ねた土地造成・利用の痕を記録することができた。

上位の1面と2面はそれぞれ泥岩盛土層の上面を以て把握したが、生活面を精緻に整えた痕は窺えず、同一レベルで確認できる泥岩のブロック・粒の大きさには粗密が見られた。明確な遺構もなく、両面を生活面と判断した妥当性は、今後、近隣での発掘調査に際して検証されるべきであろう。1・2面ともに出土遺物の主体が在地産土器のロクロかわらけであり、搬入された窯産品に良好な資料がなく実年代の特定に難はあるが、かわらけは大・小とも体部の内湾具合が弱い製品が多く、概ね14世紀後半頃の傾向と捉えられる。I区の2面下で出土した灰釉平碗は古瀬戸中期様式の後半以降に比定できそうので、2面から1面にかけての造成は、概ね南北朝期の14世紀後半に進んだものと理解したい。

下位の3～4面下でも出土かわらけの特徴に顕著な差異はなく、窯産資料の伴出例も変わらず乏しい。4面下までを通じてかわらけには手づくね成形品が1破片も含まれていないことから、鎌倉で手づくねかわらけの使用が終焉を迎える13世紀後半(後葉)が4面下造成の上限年代といえよう。4面下より下位の層序にも手づくね製品が含まれていないのであれば、本地点の開発開始期を13世紀後半と推測することもできよう。この段階のかわらけには良好なセット資料はなかったものの大・中・小へ



II区 3面下 遺構2

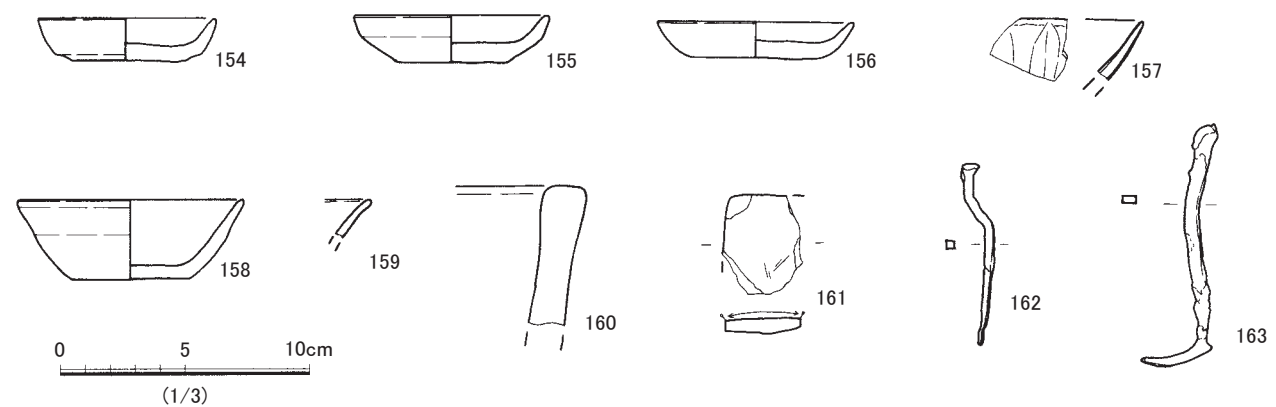


図 15 出土遺物 (6)

の法量分化を窺わせる。大・中の資料に身深で内湾気味の形態が多く、小は浅手が中心となる印象を持つ。積極的な根拠はないが、以上の傾向から3・4面の構築・使用は鎌倉後期の13世紀末～14世紀前半頃に進んだものと推測する。I区の3面下では古瀬戸の灰釉平碗が出土しているので、13世紀末を大きく遡ることはないと思われる。II区で検出された新旧2段階の南北溝は、谷戸内の排水を目的

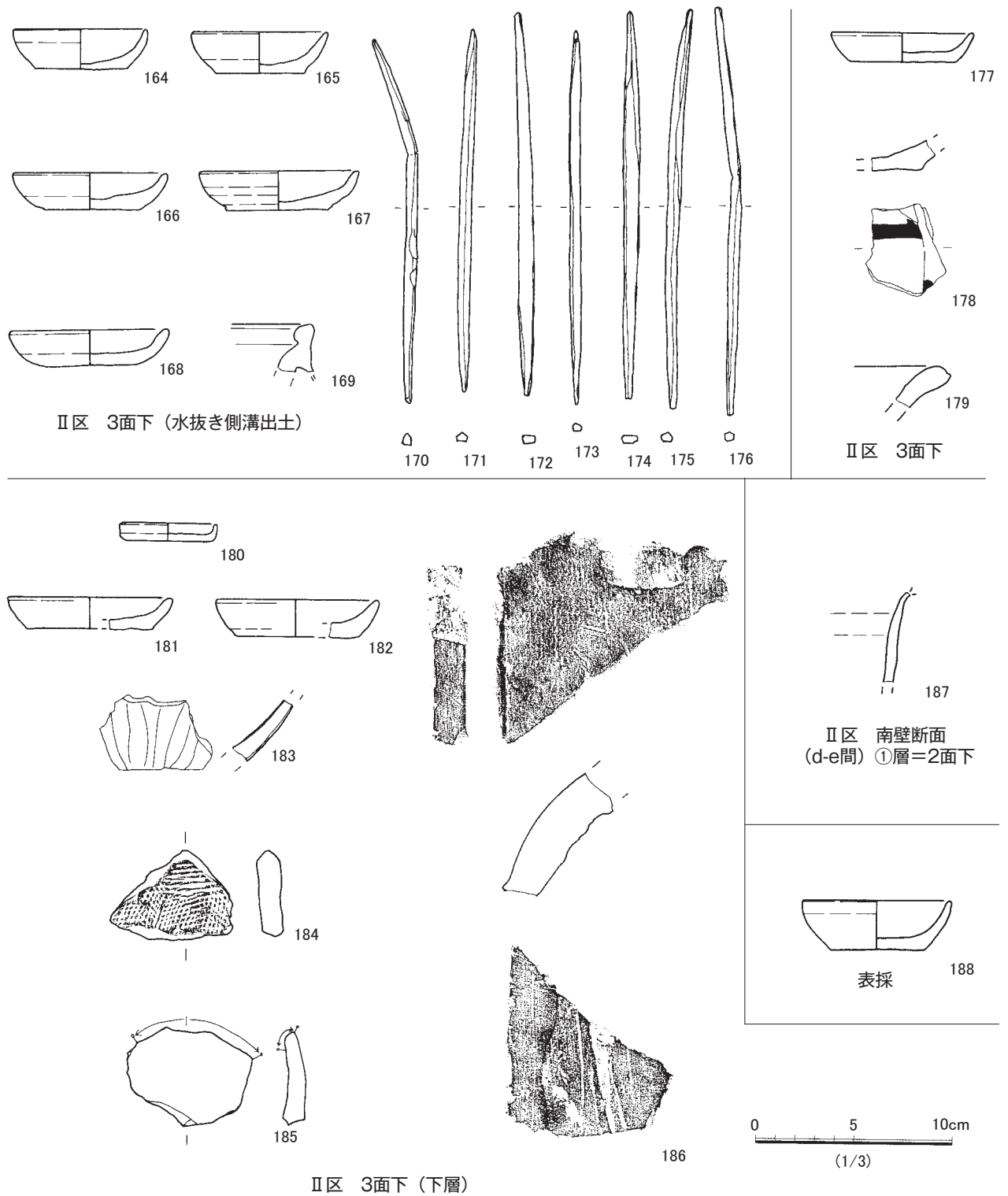


図 16 出土遺物 (7)

に構築されたものであろう。同時に土地区画の機能を併せ持っていたことも考えられるが、調査面積が狭く、また周辺の調査事例も少ないため可能性の提示に留めておく。

表 1 出土遺物カウント表

地区	面	遺構	かわらけ			吉備系 土師器	青白磁		青磁 (龍泉窯系)				瀬戸					
			ロクロ				碗	梅瓶	瓶類	劃花文 碗	蓮弁文 碗	碗・皿	瓶類	平碗	香炉	入子	瓶類	不明
			大	小	極小													
I	表採		8	2														
	0		247	22														
	0下	側溝	193	29							1							
	0-1		29	4														
	1-2		440	32											1			
	2-3		767	50	1								1					
	3		215	14														
	3-4		279	53							1		1					
4-5		208	15							1								
II	0		177	9		1												
	0-1		151	17				1										
	1-2		265	10	1													
	2-3		779	43			1	1		1	1		1	2			2	1
	3	1	275	38														
	3-4		222	21	1					1								
	4	2	335	67		1				2						2		

地区	面	遺構	尾張 ・常滑					東濃	東播 ・龜山		瓦質 土器	瓦	土製品	鉄製品		石製品	
			甗	転用片	壺	片口鉢			山茶碗	鉢				甗	火鉢	不明	管状 土錘
						I類	II類										
I	表採										1						
	0		3														
	0下	側溝	6			1											1
	0-1																
	1-2		1	1		1				2		1					1
	2-3		6														1
	3		3	1													
	3-4		9			2				3							
4-5		1					1				2						3
II	0		2		3	1											
	0-1		1														
	1-2									1							
	2-3		23			3	5	1		2	2	1					
	3	1	6			1			1	1			1				
	3-4		6	1		1				1							
	4	2	8			1		1		2	2		5	1	1	1	1

凡例
 点数 = 破片数
 重量単位 = g

地区	面	遺構	骨角製品	木製品・木材			漆器	種子	人骨	獣骨		土器(古代)	近世磁器
			栗形	草履芯	箸	折敷	椀	桃核	部位不明	ウシ・ウマ	不明	甕	碗
I	表採												
	0												
	0下	側溝											1
	0-1												
	1-2												
	2-3											1	
	3								1				
	3-4									1	4		
4-5													
II	0												
	0-1												
	1-2												
	2-3			3	8			1			7		
	3	1	1	2	35	1	1	1			5		
	3-4			3	4						1		
	4	2		1	6	3		2			1		

地区	面	遺構	貝											
			アカニシ	ササエ	ハイ	キサコ	タンペイキサコ	アワビ	カキ	ハマグリ	チョウセンハマグリ	カラスガイ	不明	
I	表採													
	0													
	0下	側溝												
	0-1													
	1-2													
	2-3							2						1
	3													
	3-4			1							4			
4-5			1		1		1							
II	0													
	0-1													
	1-2													
	2-3													
	3	1	6	1	1	1				2				
	3-4			2	1	1		7	1		1	1		
	4	2	1	4	3	2		4		6		6		

表2 出土遺物観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1)(図10)						
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.4	3.8	2.3	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.8	2.2	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	2.3	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(7.0)	3.5	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
5	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.4	3.9	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(3.8)	2.2	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.8	2.0	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
8	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	7.0	2.9	略完形 [103]g 胎土:白色針状物質、胎土、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
9	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.4)	(8.4)	3.8	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロ かわらけ・大	—	5.6	[1.3]	口～体部打ち欠き 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
11	石製品	砥石	長さ [7.0]	幅 4.7	厚さ 3.0	中砥 凝灰岩 四面を使用
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	1.8	完形 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	5.1	2.2	完形 43g 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.9)	2.5	1/4 41g 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
15	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.1)	2.7	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
16	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.5)	(6.3)	3.2	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
17	瓦質土器	火鉢	(24.3)	—	[5.8]	Ⅲ類か 口1/8
18	陶器	常滑 (転用研磨具)	長さ 4.6	幅 4.3	厚さ 1.0	割れ口周辺が磨耗
19	土製品	管状土錘	長さ [4.3]	外径 1.5	孔径 0.5	2/3 [6]g
20	石製品	砥石	長さ [3.5]	幅 2.9	厚さ 0.4	仕上げ砥 一面を使用
21	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.2)	2.1	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
22	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.3)	5.1	2.4	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
23	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.3)	2.9	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
24	瓦質土器	火鉢 (転用研磨具)	長さ 3.6	幅 6.4	厚さ 1.4	割れ口の一辺が磨耗
出土遺物(2)(図11)						
25	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.2	3.0	0.6	1/2 内折れ 胎土:角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
26	土器	ロクロ かわらけ・中	(9.8)	(5.4)	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
27	土器	ロクロ かわらけ・大	12.5	8.0	3.3	完形 168g 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
28	土器	ロクロ かわらけ・特大	—	(8.3)	[3.8]	底1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
29	瓦	平瓦	長さ [9.0]	幅 [6.8]	厚さ 2.4	小片
30	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	2.1	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
31	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.9	2.3	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
32	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.8	2.2	4/5 [49]g 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
33	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.9	2.3	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
34	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	4.0	2.5	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
35	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.0	2.5	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
36	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	5.5	2.2	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
37	土器	ロクロ かわらけ・中	10.5	6.5	3.0	4/5 [94]g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	7.0	2.8	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕 口縁部に煤付着
39	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(7.6)	3.1	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
40	土器	ロクロ かわらけ・大	12.9	7.7	3.6	1/2 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
41	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.3)	(8.7)	3.6	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
42	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[3.8]	口小片
43	石製品	硯	長さ [10.2]	幅 [8.0]	厚さ 1.8	黒色粘板岩
44	瓦	平瓦	長さ [8.2]	幅 [7.1]	厚さ 2.0	小片

出土遺物(3)(図12)

45	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	3.7	2.1	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
46	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.0	2.5	3/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
47	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.2	2.3	4/5 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
48	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(5.4)	2.7	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
49	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	6.2	3.1	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
50	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	6.4	3.2	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
51	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.0	3.3	完形 156g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
52	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.6)	6.4	3.3	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
53	土器	ロクロ かわらけ・大	—	7.5	[2.9]	体・底部 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
54	陶器	常滑 (転用研磨具)	長さ 6.5	幅 5.0	厚さ 1.1	割れ口の三辺が磨耗
55	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.4	3.3	口縁欠損 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
56	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.5]	口小片
57	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7)	(4.0)	2.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
58	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	2.0	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
59	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(5.0)	2.3	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
60	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	4.6	1.3	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
61	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.6)	(6.0)	2.7	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
62	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.2)	3.7	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
63	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.0)	2.1	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
64	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	2.0	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
65	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	5.0	1.7	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
66	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(5.2)	3.0	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
67	土器	ロクロ かわらけ・中	10.1	5.5	2.9	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
68	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[2.8]	口小片
69	瓦質土器	火鉢 (転用研磨具)	長さ 3.7	幅 2.4	厚さ 1.3	割れ口の三辺が磨耗

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
70	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(4.8)	1.7	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
71	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.0)	1.8	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
72	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.1)	6.0	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
73	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	7.1	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
74	陶器	東濃 山茶碗	—	—	[3.6]	口小片
75	石製品	砥石	長さ [3.8]	幅 [3.1]	厚さ 0.4	仕上げ砥 頁岩 両端欠損 一面を使用
出土遺物(4)(図13)						
76	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	4.5	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
77	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	5.4	1.8	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
78	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.2	2.4	3/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
79	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	5.0	2.5	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
80	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.1)	2.5	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
81	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(6.2)	2.6	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
82	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.7	3.0	1.0	3/4 胎土:白色針状物質、砂粒
83	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	(4.5)	2.1	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
84	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.5)	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
85	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.3]	Ⅲ類 口小片
86	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.0	1.5	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
87	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	4.0	2.4	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄色橙色 外底面に板状圧痕
88	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	2.4	略完形 [40]g 橙色 外底面に板状圧痕
89	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.5)	5.5	2.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
90	土器	ロクロ かわらけ・中	10.7	6.0	3.0	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
91	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.6)	(5.6)	2.8	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
92	土器	ロクロ かわらけ・中	10.5	5.3	2.8	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
93	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.5)	(7.6)	2.7	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
94	土器	ロクロ かわらけ・大	13.9	7.7	3.4	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
95	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	(7.1)	3.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
96	鉄製品	瓜形水注	—	—	[3.0]	胴部復元径は曖昧 内面無軸
97	陶器	常滑 甕	—	—	[4.5]	6a型式 口小片
98	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[5.1]	口小片
99	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.0]	口小片
100	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.1]	口小片
101	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[4.7]	口小片
102	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[5.4]	口小片
103	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.3]	Ⅲ類 口小片
104	瓦	平瓦 (転用研磨具)	長さ [7.7]	幅 [7.6]	厚さ 2.2	割れ口の一边が磨耗

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
105	土製品	用途不明	長さ [4.3]	径 [3.5]	孔径 0.8	管状製品
106	木製品	箸	長さ 18.0	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
107	木製品	箸	長さ 18.7	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
108	木製品	草履芯	長さ [8.5]	幅 [1.7]	厚さ 0.3	小片
109	木製品	草履芯	長さ [7.0]	幅 [1.5]	厚さ 0.3	小片

出土遺物(5)(図14)

110	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.1)	4.0	1.4	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
111	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7)	3.6	2.1	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色
112	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(4.6)	2.2	1/3 胎土:白色針状物質 灰褐色 外底面に板状圧痕
113	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	6.9	3.5	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色
114	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.0]	口小片
115	須恵器	東播系 鉢	—	—	[3.7]	口小片
116	瓦質土器	火鉢 (転用研磨具)	長さ 4.1	幅 4.2	厚さ 1.6	割れ口の一辺が磨耗
117	骨製品	刀装具	長さ 5.2	幅 2.2	高さ 1.4	栗形? 略完形 [5]g 一部に黒色系漆が付着
118	木製品	箸	長さ [16.6]	幅 0.6	厚さ 0.6	一部欠損
119	木製品	箸	長さ [19.5]	幅 0.5	厚さ 0.6	一部欠損
120	木製品	箸	長さ [18.5]	幅 0.5	厚さ 0.5	一部欠損
121	木製品	箸	長さ [21.3]	幅 0.6	厚さ 0.6	一部欠損
122	木製品	折敷	長さ [14.7]	幅 [1.9]	厚さ 0.2	小片
123	土器	吉備系 碗	—	—	[3.5]	口小片
124	鉄製品	釘	長さ 7.2	幅 0.5	厚さ 0.4	完形

出土遺物(6)(図15)

125	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.1)	1.5	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
126	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	1.4	1/2 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
127	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(5.5)	1.6	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
128	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.7	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
129	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.8)	1.3	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰褐色 外底面に板状圧痕
130	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(4.2)	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
131	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.7)	1.6	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
132	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.5	完形 51g 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
133	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	4.9	1.5	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰褐色 外底面に板状圧痕
134	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.7	1.5	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
135	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(6.0)	1.7	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
136	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.2	2.0	1/2 胎土:白色針状物質、角閃石 灰褐色 外底面に板状圧痕
137	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.3	1.9	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 明褐色 外底面に板状圧痕
138	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.0)	1.8	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
139	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(5.6)	3.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
140	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.2)	(6.0)	3.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
141	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(6.7)	2.9	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
142	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.1)	6.7	3.4	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
143	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.3)	7.6	3.2	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
144	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	8.0	3.2	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
145	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.9)	3.0	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
146	陶器	瀬戸 入子	(9.8)	(5.0)	3.2	1/8
147	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.5]	Ⅲ類か 口小片
148	石製品	器種不明	—	—	[2.2]	小片 [17]g 残存部に黒色系漆塗り、端面に金蒔絵による唐草文
149	鉄製品	釘	長さ [7.8]	幅 0.5	厚さ 0.3	完形 11g
150	鉄製品	釘	長さ 7.2	幅 0.3	厚さ 0.4	完形 3g
151	鉄製品	釘	長さ 4.5	幅 0.5	厚さ 0.5	完形 4g
152	鉄製品	飾り紙?	長さ 6.3	幅 1.1	高さ 0.4	中央部に直径2mmの貫通孔あり
153	木製品	箸	長さ 20.3	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
154	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.4	1.6	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
155	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.3	1.9	1/2 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
156	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	4.8	1.5	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
157	磁器	青磁 蓮弁文碗	—	—	[2.4]	龍泉窯系Ⅲ-2c類か 口小片
158	陶器	瀬戸 入子	(9.0)	(4.6)	3.2	1/3
159	陶器	瀬戸 入子	—	—	[1.5]	口小片
160	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.5]	Ⅲ類か 口小片
161	石製品	砥石	長さ [4.1]	幅 3.1	厚さ 0.7	仕上げ砥
162	鉄製品	釘	長さ 7.3	幅 0.4	厚さ 0.4	完形 3g
163	鉄製品	釘	長さ [9.5]	幅 0.6	厚さ 0.3	完形 (折れ曲がり) 12g

出土遺物(7)(図16)

164	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.5	2.0	略完形 [39]g 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
165	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.5	2.1	3/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
166	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	4.9	1.9	略完形 [52]g 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
167	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	5.3	2.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰橙色 外底面に板状圧痕
168	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	4.5	1.8	完形 60g 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
169	陶器	常滑 甕	—	—	[2.5]	6a型式 口小片
170	木製品	箸	長さ 18.5	幅 0.4	厚さ 0.6	完形
171	木製品	箸	長さ 18.5	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
172	木製品	箸	長さ 19.8	幅 0.7	厚さ 0.4	完形
173	木製品	箸	長さ 19.1	幅 0.5	厚さ 0.4	完形

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
174	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.5	厚さ 0.4	完形
175	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
176	木製品	箸	長さ 20.8	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
177	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.4	1.5	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙灰色
178	土器	ロクロ かわらけ・大	—	—	[1.4]	底部片 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に墨書(判読不明)
179	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[2.1]	口小片
180	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.9	4.4	0.9	1/2 胎土:角閃石 橙色
181	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.2)	1.6	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
182	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.2)	1.9	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
183	磁器	青磁 蓮弁文碗	—	—	—	龍泉窯系Ⅱ-b類か 体小片
184	陶器	東播系? 転用研磨具	長さ 4.5	幅 6.0	厚さ 1.2	
185	陶器	常滑? 転用研磨具	長さ 4.7	幅 6.4	厚さ 0.8	割れ口の一辺が磨耗
186	瓦	丸瓦	長さ 9.5	—	—	小片
187	陶器	瀬戸 柄付片口?	—	—	[4.7]	口小片
188	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.5	2.5	完形 49g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕



1. 現地調査前（南東から）



5. I区3面（北から）



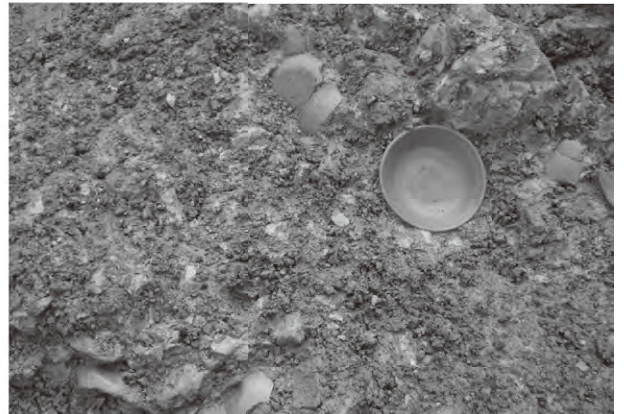
2. I区表土掘削（南東から）



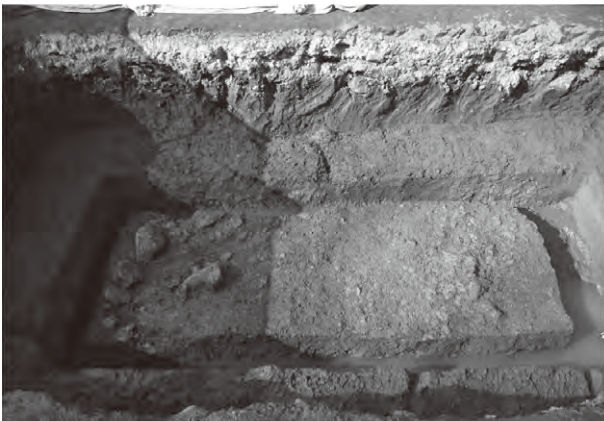
6. I区3面（南から）



3. I区1面（南から）



7. I区3面 遺物出土状況



4. I区2面（南から）



8. I区4面（東から）

図版2



1. I区冠水状況（南東から）



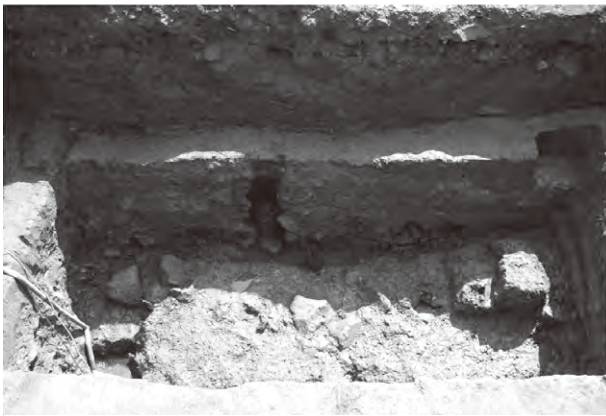
5. II区3面（北から）



2. I区4面（北から）



6. II区3面 遺構1（北から）



3. I区4面下（北から）



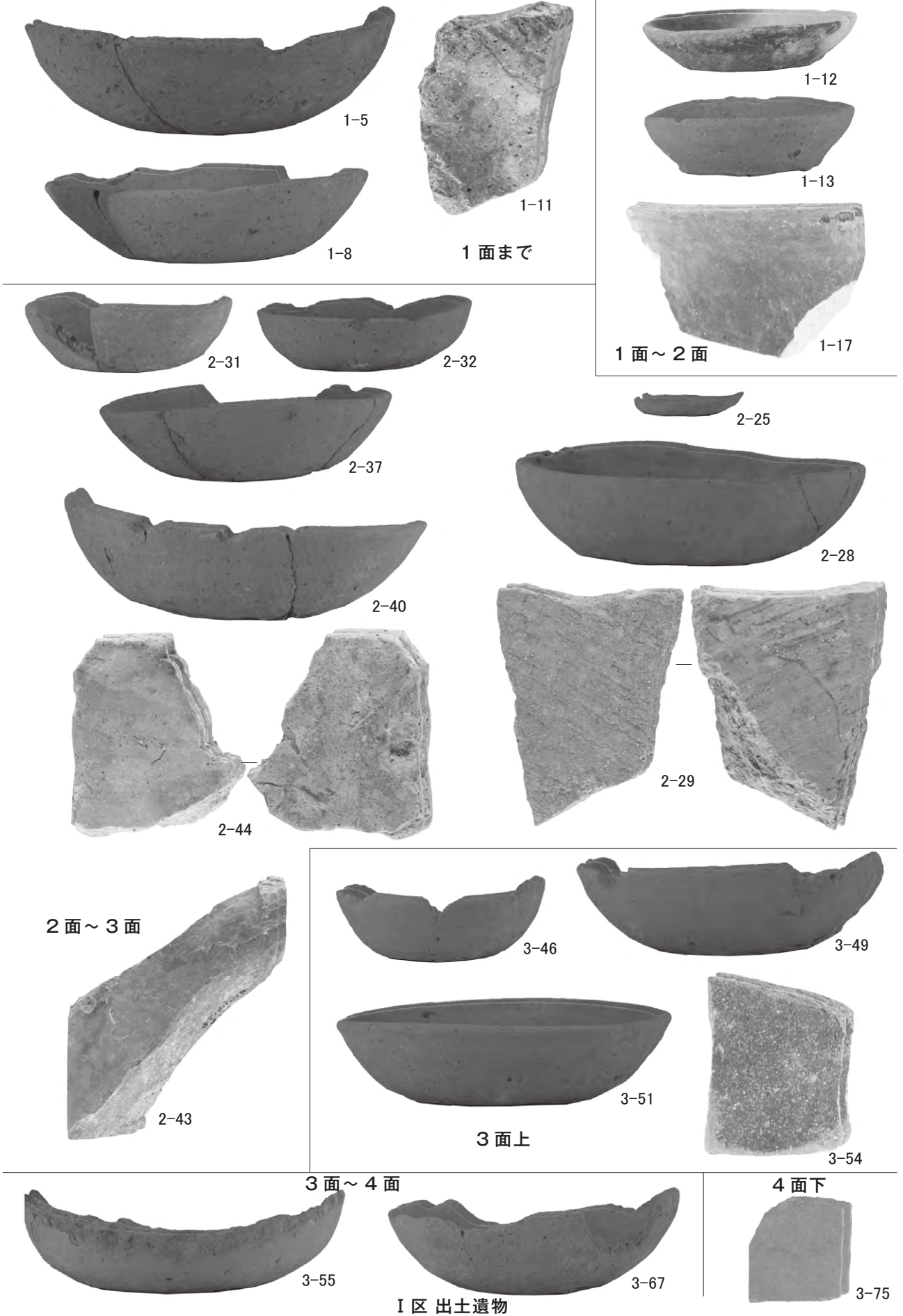
7. II区3面 遺構1（北東から）



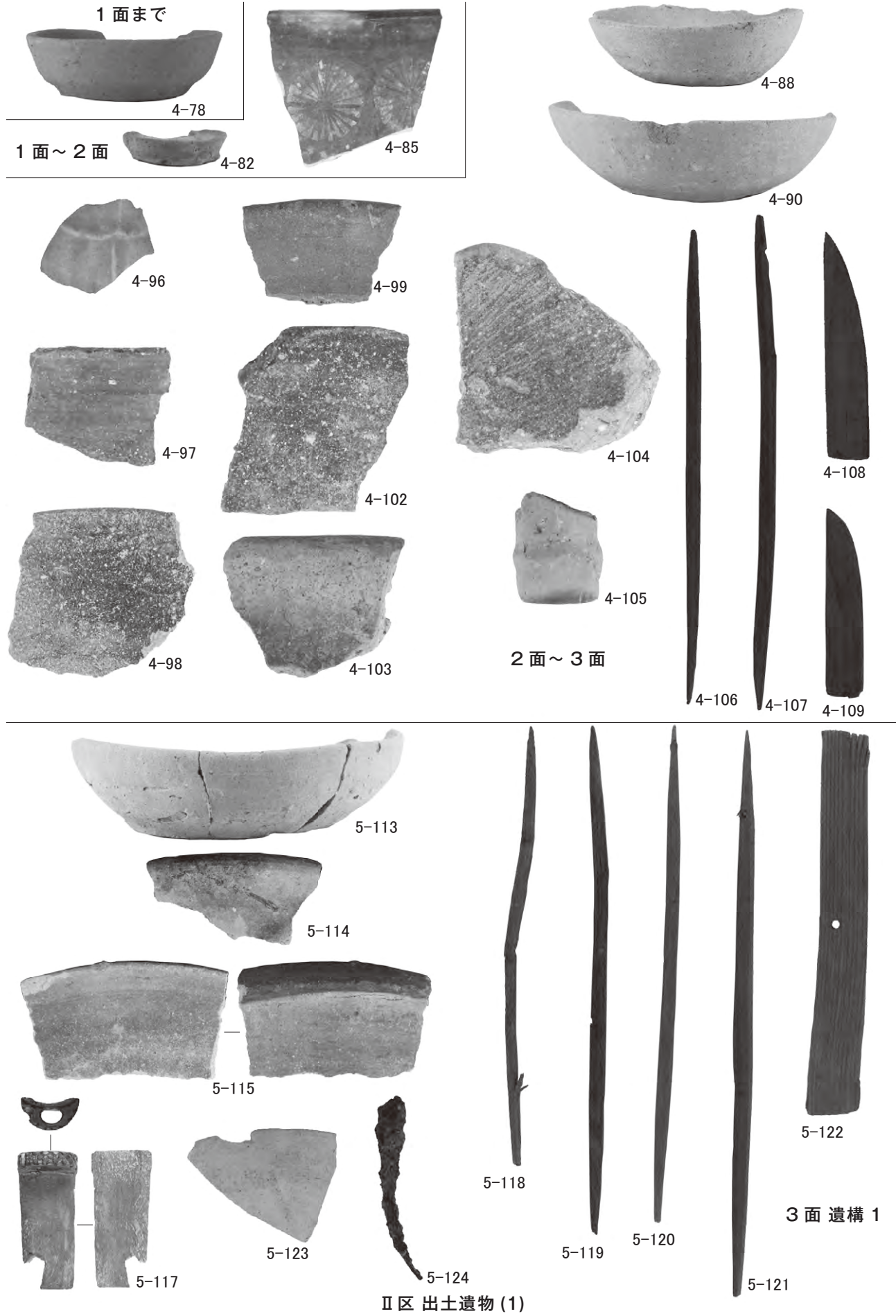
4. I区柱材（攪乱）検出状況（北から）



8. II区3面 遺構1 西護岸材（東から）



図版4





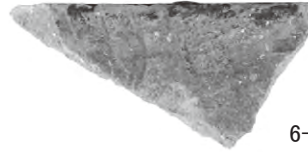
6-132



6-137



6-147



6-148



6-149



6-151



6-150



6-152



6-157



6-162

6-163



6-153

3面下遺構2



7-164



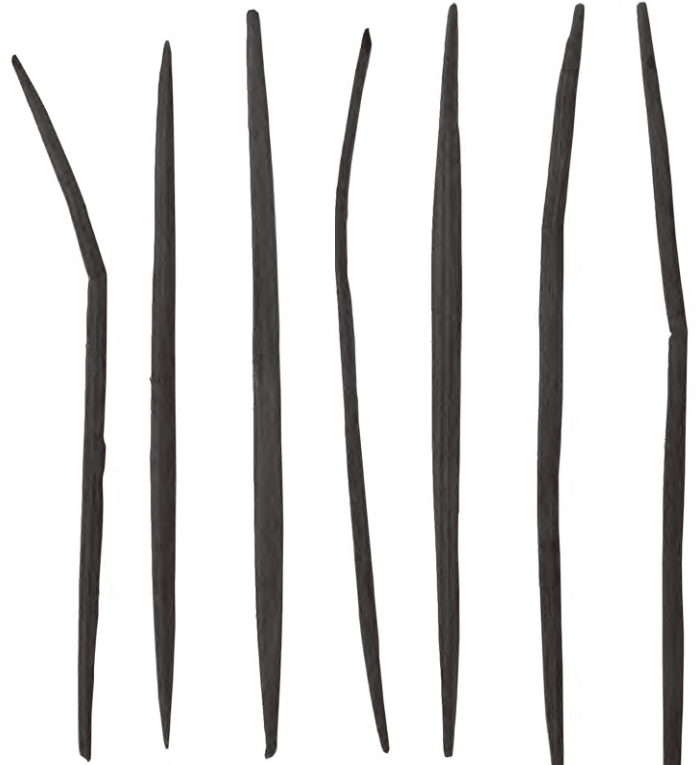
7-166



7-168



7-180



7-170

7-171

7-172

7-173

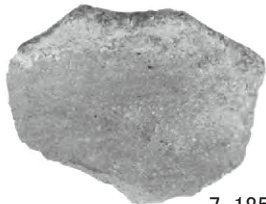
7-174

7-175

7-176



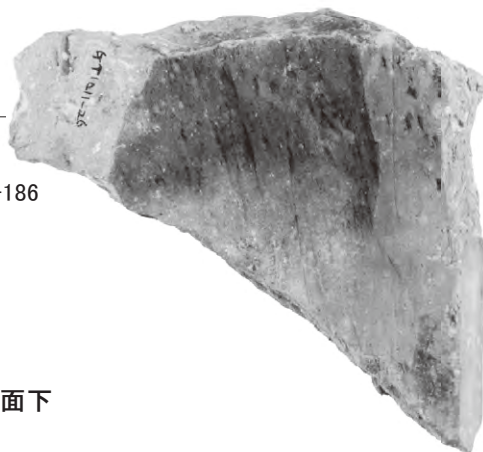
7-183



7-185



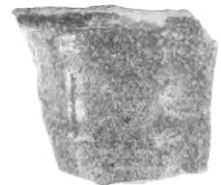
7-186



3面下

Ⅱ区出土遺物(2)

南壁①層



7-187

表採



7-188

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成28年度調査報告							
巻次	33 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	福田 誠/伊丹まどか・渡辺美佐子/伊丹まどか/田畑衣理/伊丹まどか/押木弘己							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜三丁目 254番1	14204	236	35° 18' 50"	139° 32' 38"	20060821 ～ 20061003	33.00	自己用店舗併用 住宅 (柱状改良工事)
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座二丁目 208番1	14204	261	35° 18' 38"	139° 33' 11"	20070226 ～ 20070501	45.00	個人専用住宅兼 事務所 (柱状改良工事)
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 54番15	14204	200	35° 18' 54"	139° 32' 50"	20080610 ～ 20080707	18.00	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)
ゆいがはまみなみいせき 由比ヶ浜南遺跡	神奈川県鎌倉市 長谷二丁目 176番8	14204	315	35° 18' 43"	139° 32' 21"	20080723 ～ 20080815	55.00	個人専用 住宅 (基礎工事)
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 134番4	14204	201	35° 18' 58"	139° 32' 47"	20081020 ～ 20081110	48.00	個人専用 住宅 (基礎工事)
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺四丁目 923番2の一部	14204	291	35° 18' 43"	139° 31' 35"	20110131 ～ 20110331	65.00	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	都市	中世	道路遺構、溝、土坑、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、巻き貝、 二枚貝	13世紀中から後半の 生活面と長谷小路、 稲村崎路と思われる 道路を検出。
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	掘立柱建物、竪穴 建物、土坑、ピット、 井戸	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、金属製 品、石製品	13世紀前半から15世 紀の竪穴建物群を検 出。
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都市	中世	溝、土坑、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、土製品、 瓦質製品、金属製品、 石製品、骨角製品	13世紀後半から15世 紀の生活面を検出。 破碎泥岩の地業層を 検出。
ゆいがはまみなみいせき 由比ヶ浜南遺跡	都市	中世	溝、溝状遺構、土 坑、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦質製 品、金属製品、骨角製 品	13世紀中頃から14世 紀前半にかけての砂 丘上に形成された遺 構群。
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	都市	中世	土坑、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、土製品、 瓦質製品、金属製品、 石製品、骨角製品	14世紀から15世紀前 半の生活面を検出。
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	社寺	中世	溝	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品、 瓦、金属製品、石製品	13世紀後半から14世 紀後半の土地利用を 確認。金蒔絵を施し た石製品が出土。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33

平成 28 年度発掘調査報告

(第 1 分冊)

発行日 平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 株式会社ポートサイド印刷

